

A列車に乗って
ハーレムへ行こう

ソウルフル!

工藤明子



A列車に乗って
ハーレムへ行こう

ソウルフル!

工藤明子

「私は自分の運命の支配者だ。私は自分の魂の統率者だ」

ウィリアム・アーネスト・ヘンリー

プロローグ 4

- ・ ハーレムに行きたい 4
- ・ ハーレム巡礼 13

第一章 ハーレムに行こう 19

- ・ A列車に乗ってハーレムへ行こう 20
- ・ ハーレムとはどこか? 28
- ・ ハーレムの一年はホットでカラフル 37

第二章 目で見えるハーレム・ルネッサンス 47

- ・ エンターテインメントとハーレム・ルネッサンス 48
- ・ バブリング・ブラウン・シュガー 56
- ・ ハーレム・ナイト 59

第三章 ハーレムを歩く 65

- ・ そこは異文化のカルドロン 66

第四章

ハーレムと観光 127

・アポロ劇場 128

・スターバックス／ハーレムでお茶を 137

・スタジオ・ミュージアム 141

・黒人の偉人フレデリック・ダグラスの記念碑

144

・一二五丁目の黒人露天商 74

・メトロカードを巡る暗黙の好意 82

・ハーレムのネイバーフッドバー 89

・タクシーと観光バス 93

・ハーレムは「ラストフロンティア」 96

・ハーレムのレコード店 103

・ハーレムの光と陰 108

・危険なハーレム 112

・やっぱり起こってしまった盗難 119

・ハーレムのチラシ配りロナルドの笑顔 123

・レノックス・ラウンジ 147

・なぜ黒人はジャズを聴かなくなったのか 153

・シヨーンバーグセンター・フォー・リサーチ・イン・ブラックカルチャー 160

・YMCA 168

・番外「アフリカ人共同埋葬地」 170

・ハーレム探訪の旅は始まったばかり 173

第五章 ニューヨークとトーキョー 175

・ニューヨーク 176

・トーキョー 195

最終章 私が黒人に惹かれた理由と似たもの同士 215

エピソード／ハーレムで知ったソウル 232

プロローグ

ハーレムに行きたい

(註1) ハーレムはニューヨーク・シティ(以下ニューヨーク)のマンハッタン区の北部に位置する黒人居住区で、かつてはゲットー、スラムの代名詞であり、貧困層の黒人が住み、殺人、強盗、レイプ、ドラッグがらみの犯罪の巢窟としてニューヨークはおろか世界中に悪名を轟かせていた。市が深刻な財政難に陥っていた不況の真っ只中の七〇年代にニューヨークに住んでいた私にとつては友人知人との日常会話にも登場しない別世界であり、心理的にはないに等しい「ネバーランド」のような地域だった。この頃のハーレムの治安は最悪だったと言われる。寂れ果て、廃墟のようなビルが放置され、その割合は八〇年代に入ってもセントラル・ハーレム(ハーレムの中心地域)全体の四分の一にのぼったという。

多くのガイドブックにはマンハッタンマンハッタンの北端はセントラルパークが終わる一一〇丁目までしか記されていない。観光的にはほとんど価値のない地域だったと言える。訪れるべき観光場所もなく、ショッピングをするデパートもなく、それより先に危険過ぎて観光客はおろか、他人種を寄

せ付けない街だったのだ。

実際のところハーレムという響きは私にはほとんど恐怖と同義語だった。今でもハーレムと聞くとピリツと身内に緊張が走り、うっすらとした恐怖心が広がる。一種のトラウマなのだろう。ここ数年のニューヨークしか知らない人にはこっけいに響くに違いない。

初の黒人市長デインキンス氏に変わって九四年に市長に就任したジュリアーニ氏がニューヨークの治安回復に貢献したのはよく知られている。彼のクリーンアップ作戦に好景気が追い風となって、ニューヨークが格段に安全になったと喧伝されるようになったが、かつての恐怖はなかなか消えず、安全と言われてもにわかには信じられない。

七〇年代にはマンハッタン中に危険な地域がいくつもあつたのを私は肌で知っている。観光会社でツアーガイドを務める知人が、日本人観光客に渡すマンハッタンの地図の危険地域を赤で囲んだら、地図が真っ赤になったぐらいである。

私は四年間でマンハッタンの東西南北のアパートや救世軍の寮など九ヶ所を転々とした。二年

と最も長かったのが1番街と2番街の間のアパートである。当時女が住むにはギリギリの安全地帯と言われていた。華やかで安全なウエスト・ビレッジに住みたいと思っただけで、家賃は倍はした。洒落たブティックの並ぶウエスト・ビレッジの八丁目を東に向って歩いて行くと巨大キューブ「アラモ」のオブジェがあるブロードウェイに出る。ここを境に風景はガラリと変わり、侘しく、すさんだ雰囲気になる。自然と緊張感が身内に走る。

3番街から東の八丁目にはセント・マークス・プレースと名前が付く。ニューヨークのカウンターカルチャーの中心地と言えば聞こえがいいが、古着屋、安っぽいファーストフード店、中古LP店、民芸店などが軒を並べ、七〇年代当時には「アイスクリーム・コネクション」という、日本人経営のテイクアウトの店があり、カチカチのフライドチキンなどを売っていた。長髪の若い日本男性数人が働いていた。

また、通りのかなりの部分を占める、青いペンキを塗りたくったビルは「エレクトリック・サーカス」というサイケデリック・サウンドのメッカで、ベルベット・アンダーグラウンドやグレートフル・デッドなども出演したエポック・メイキングなナイトクラブだったという。一九六七年にオープンし、一九七一年にクローズした後はいつまで経っても空き物件で、この通りの荒れた

雰囲気貢献していた。

2番街の角には入場料が一ドルの映画館があり、私のすぐ後ろの席で寝ていた黒人のホームレス（当時はバムと呼ばれた）がいきなり立ち上がって放尿し始めた時には慌ててアパートに駆け戻ってシャワーを浴びたというとてもない経験がある。可哀そうに、そのホームレスは顧客の一人にながられていた。現在八丁目には日本の居酒屋スタイルのレストラン／バーが多く営業している。納豆や豆腐といったかつては入手困難だった日本食品が手軽に買えるスーパーマーケットもあり、掲示板があるので何かいい情報はないかと滞在中に数回は寄ってみる。日本人居住者にはいい時代になったと思う。

ロウアー・イーストサイド（マンハッタン南東部）には無人のまま放置されたビルが幾つもあり、寂れ放題のブロックがあつた。そうしたビルでは火事が多発していた。「また火事だよ」と友達が教えてくれて一度だけ見に行った。黒々としたビルが赤々と燃え盛り、ぞつとするコントラストを描き出していた。「持ち主が保険金目当てで放火するんだって」とその友人が眉をひそめて教えてくれた。時々「フィービーズ」という、確か3番街の四丁目にあつた有名なバーに飲みに出かけたが、帰りは男の友人と一緒にないところだった。

サウス・ブロンクス、イースト・ハーレム、ミート・パッキング・エリア、ヘルズ・キッチン、バワリー街などの「バッド・ネイバーフッド（危険地域）」と並ぶのがロウアー・イーストサイドにあるアルファベット・シティだった。1番街から東の南北に走る大通りにはアベニューA、B、C、Dとアルファベットが振られている事から付いた名前で、アベニューAなら何とか近づけてもそれは昼の話。ましてB、C、Dなどのデープなイーストサイドはヒスパニックと呼ばれるラテン系のメキシコ、南米、特に当時ニューヨークに多かったプエルトリカンの多いエリアで、他人種が決して近づくべき場所ではなかった。彼らの好むサルサが常に通りに溢れていたのでもサルサを聞くと当時を思い出して不安な気持ちになる。

地下鉄にしても、今でこそ真夜中でも込んでいるが、七〇年代当時は地下鉄に乗るなどは決死の覚悟と言っても言いすぎではなく、八時以降に外に出る事すらはばかれた。アパートから歩いて二分ほどの、2番街の一三丁目角にあった日本食レストラン「美恵」に行くのですら気を引き締めてから出かけたのだ。

今はまず使わないタクシーを当時はよく利用した。給料日には路上盗に襲われた時の用心に

(註³)

二〇ドル札を財布に入れ、残りは右と左の靴の中に隠した。また、アパートに着いてもビルの中で襲われる事があるので運転手に余計にチップを払い、あそこ（と自分の部屋を指差し）に明かりが付くまで待っていてくれ、と頼むのが習慣になっていた。こういう警戒心はニューヨークで暮す女性なら当たり前の事だったのだ。

帰国して西麻布のマンションに落ち着いた私は、お金を分けて入れた財布を二つ持って近くのラーメン屋に出かけようとしている自分に気付いて苦笑した。日本ではそんな事をする必要はないのだ。いつもピリピリしている私を見て、合気道を学びに日本に来ていたニューヨークの友人は「ここは日本だ、そんなに警戒する必要はないよ、君はニューヨーク病にかかっている」と私をたしなめたほどだった。

治安が良いとは言えない八〇年代の終わりからしばらく不在にしていたが、一九九八年六月に長い不在の後に訪れた時には事情は一変していた。私に取っては円安の最悪の時期だったが、ニューヨークは好景気の兆しで輝いていた。地下鉄ではトークン（代用硬貨）の代わりになるプリペイド式のメトロカードが導入されていて、それと同時に十字型の鑄鉄のごついターンシルが姿を消し始めていた。清掃をする人が通りにある大きなゴミ箱にこれまた大きなビニール袋を設

置して頻繁にゴミを回収しているのだが、初めは通りがきれいになった事に気付かなかった。ウィリアムズバーグ橋でジョギングしようと近くの駅で降りた時、駅自体も荒れた印象できれいではなかったが、外に出て通りを歩くうち、デジャヴューの感に打たれた。それが何故なのか最初はわからなかったが、清掃の行き届いたミッドタウンと異なり、歩道にはくしゃくしゃと丸められた紙くずやソーダの缶、テイクアウト容器などが捨てられて散乱していたのだ。そうだった。そこは七〇年代のイースト・ビレッジによく似ていたのだった。私がニューヨーク生活で一番良く歩いたのは2番街である。GAPやスタバや洒落た店など一軒もなく、古着屋やスリフトショップやヒマなハンバーガーショップの並ぶあの2番街にそっくりだったのだ。汚さがなつかしさを引き起こすとは考えもよらなかった。

そして、私があればと恐れて近づかなかったアルファベット・シティがすっかりファッショナブルに生まれ変わり、夜半過ぎにも大勢の人々が行き交っていると知って仰天した。本当に安全なのかどうかと、彼らに混じってアベニューAからB、C、Dと歩いてみても、どうしてもうつすらとした不安感は拭い切れない。

しかしながら、多くの危険地域の中でもハーレムは別格で、危険地域のトップに君臨していた。

そんなハーレムに足を踏み入れたのは四年間にたったの二回だけ。ジュリアーニ元ニューヨーク市長が街の浄化を進めている時に「健全なタイムズスクエア」と言ったのを聞いて「冗談だろう」と警官が笑ったとドキュメンタリー番組の中で明かしていたが、「ハーレム観光」も私には冗談でしょう、という感じだったのだ。

変われば変わるもので、ハーレムは現在、第二のハーレム・ルネッサンスとか、ネオ・ハーレムルネッサンスなどと呼ばれて世界中からツーリストが訪れている。ニューヨークの「番外地」に出入りする、ましてレノックスアベニューのスターバックスで人と待ち合わせる日が来ようとは夢想だにしなかった。

ハーレムの「ホラーストリー」は終わったのだ。

私がハーレムに行ってみようと思いついたきっかけ「安全」である。ハーレムに行きたいと思った大きな理由については「ハーレム巡礼」と「私が黒人に惹かれた理由」の中で述べたい。

(註1) まずハーレム (Harlem) とハレム (harem) の違いをはっきりさせておかなければいけない。この二つはまるで別物であり、Harlem はニューヨークの黒人居住地域であり、ハレムはオスマン帝国の王室の後宮などを指す言葉である。日本ではハーレムとハレムがごっちゃになっている。

(註2) アフリカ系の黒人はアフリカン・アメリカンと呼ばれる事も多いが、日本で一般に通用している「黒人」で統一したい。

(註3) 麻薬中毒患者は一回分の麻薬代金 (二〇ドル) 欲しさに路上盗を働くと言われていた。

ハーレム巡礼

私の黒人文化への入り口は音楽だった。そしてその入り口はハーレムに続いていたのだった。

渡米当時、人種差別という「システム」に関して私はほとんど無知だったと振り返って思う。TVで、パティで、路上で、職場で、友人知人との会話の中で、つまり生活全般を通して私はアジア系、ユダヤ人、ラテン系、黒人、そして白人の中にもワスプを頂点にして人種のヒエラルキーがあるのだという「人種のレッスン」をひとつひとつ受けていったのだった。一番顕著なのが黒人差別だった。黒人のジャズ・ミュージシャンをほとんど崇拝していた私も段々黒人の生活や差別の実態を知るようになり、彼らに対する浮ついた熱狂を徐々に覚ましていった。

こんな事があった。

デートをした帰り、救世軍の寮まで送ってくれた黒人男性に、入り口の前で「ここでもいいですから」と言った時に「僕が黒人だからか、一緒にいるのを見られたくないのだろう」という思いがけない

言葉を聞いてたじろいだ。救世軍は男性のゲストを部屋に通してはいけない決まりになっているという、単にそれだけの理由だったのだからうまく説明できない私を見て、彼は諦めとも、怒りともつかない、何とも言えない表情を見せて去って行った。それっきりだった。

古着の行商をするようになった私は近所のクリーナーに古着のクリーニングを頼みにちよくちよく顔を出すようになっていた。ユダヤ人経営のその店（今は日本レストランになっている）には黒人の若者が一人勤めており、黙々とプレスをする真面目そうな彼の顔は見知っていた。ある夜半、アパートに帰る途中、横からぬつと黒人が寄って来た。あたりに人影はない。私は思わず後じさつてしまった。するとその男性は「スミマセン、僕です、クリーニング屋の」とかえってびっくりしたらしかった。暗闇で最初はわからなかったが、確かに彼だった。私のホツとした表情を見て彼は驚かずつもりはなかったんです、ごめんなさい、お休みなさい」と言うが早いか暗闇の中に消えて行った。私は恥ずかしかった。黒人だからとすぐに警戒して後じさるなんて、と罪悪感にさいなまれたが、それは危険なニューヨークで身に付けてしまった自然なディフェンス・メカニズムだったのだ。

黒人に関するこうした数々の体験は心の中にずっと残って消える事がなかった。黒人が受けている差別に対する他ならぬ黒人自身の態度も頭を離れなかった。

ハーレムを訪れる事ができたのは「プロローグ／ハーレムに行きたい」にも書いたように、ハーレムが安全になったからだが、いつかは行ってみたいという漠然とした思いは米軍横田基地の黒人GIを取材して記事を書いている80年代に芽生えていた。

帰国後、「黒人のように踊り、アンカーウーマンのように英語を話したい」などという大それた願望を抱いて夜な夜な米軍横田基地内のNCO（下士官）クラブで黒人兵達と踊り明かすようになり、

ニューヨークでは深く知り得なかった彼らの習慣、彼らの性質、彼らの夢と現実に触れるようになった。日本女性と黒人兵の相性はあまりいいとは思われない。女性が利用の回路に巻き込まれて精神のバランスを崩すケースがよくあるのだ。彼らと、彼らを取り巻く日本女性達の、時には破天荒な行状を記事にしているのを知った黒人から「君は一体何人の黒人を知ってるって言うんだ、黒人について記事を書くぐらい黒人の事を知っているのか」と非難された事も心のどこかに引っかかっていた。当時知っていた黒人の大半は極東に配置された軍人で、民間人とは考え方や価値観も異なる。軍人ばかりでなく彼らが「ワールド」と呼ぶ本国に住む黒人についてもっと知りたい、知らなければいけないのではないかと思うようになった。

黒人と日本女性との間には差別という共通点があるという気やすさから「日本の女は奴隷のようなものだ」と軽い気持ちで口をついて出た一言で友人の表情が変わった事がある。怒るでもなく、呆れるでもなく彼は淡淡と言った。

「奴隷とは鎖に繋がれ、自由を奪われた存在だ、君は鎖で繋がれていない」

私は当身を食ったように一瞬胸が詰まった。黒人は鎖に繋がれてアフリカ大陸から「黒い積み荷」として「出荷」された。ドラマ「ルーツ」には、自分の祖先の足跡を辿る作家アーサー・ヘイリー役のジェームズ・アール・ジョーンズが、祖先が働いていた農園主の子孫を訪れて奴隷のリストがないかと尋ねる場面がある。ない、と言われて、それでは家畜の記録を見てくれるように頼むと果たして奴隷の名前が馬と一緒に書かれてあった。つまり奴隷は人間扱いすらされていなかったのだ。

いかに奴隷が過酷な人生を強いられたか、そうした奴隷の歴史を少しでも知っていれば奴隷を祖先に持つ彼らの前で軽々しく「奴隷みたい」などとは口にできない。それまで「奴隷のような扱い」「奴隷並み」などと考えもなしに使っていた私は、以後そうした表現は一切口にしない。

黒人兵とのフルコンタクトの付き合いは約4年で終わった。彼らに抱いていた幻想は薄れ、彼らの主張や価値観に同感したり、疑問や反感を抱いたりするようになって、やがては生き方や考え方の大きな食い違いや付き合いにくさから彼らを人生のパートナーに選ぶという選択肢は諦めてしまったが、彼らの音楽や文化、差別に対して戦い続けた強さに対する尊敬と憧憬は損なわれずに残った。

そして私には当時やり残した「課題」があった。

私がなぜ黒人とその文化に惹かれたのかという疑問をハーレムに行って解決しなければいけない。この数年、そういう考えが浮かんでくるようになった。ハーレムに行って過酷な差別をかいぐぐって生きて来た黒人とその生活をもっと知りたい。そうする事はもっと自分を知る事につながるのではないかと考えるようになったのだ。

そういう意味では二〇〇六年のハーレム行きは黒人の「メッカ」であるハーレムへの私の「巡礼」でもあった。

第一章 ハーレムに行こう

A列車に乗ってハーレムへ行こう

A列車に乗らなきゃダメさ

ハーレムのシュガー・ヒルに行くにはね

A列車を逃したらハーレム行き早い列車に乗り遅れちまったってことさ

さあ急ごう、さあ乗ろう

ほら来た、レールをどうこう言わせてさ

乗った乗った、A列車にさ

すぐにシュガー・ヒルに到着さ

(筆者訳)

「A列車で行こう (Take the A Train)」はビリー・ストレイホーン作詞・作曲で、言わずと知れた
デューク・エリントン楽団の代表的な曲である。^(註)ハーレムのテーマソングと言ってもいいだろう。
曲名は、エリントンがストレイホーンをピッツバーグから呼び寄せた時に、自宅までは「Aトレ
インに乗れ (Take the A Train)」という書き出しの手紙をストレイホーンに書き送った事に由来す

るという逸話が残っている。ジャズの曲名にはこうして安易に即興で付けられたものがけっこう多いのだそうだ。

A列車とかAトレインと言われても日本にいる時にはピンと来なかったが、ニューヨークに住めばこの列車にいつか乗る日が必ず来る。私が初めて乗った時には（ああ、これがAトレインか）と感無量だったものだ。ハーレムをひんばんに訪れた二〇〇六年にはAトレインをひんばんに利用した。クイーンズの滞在先を出てラテン系^(註3)、ヒンドウ系、アジア系が行き交う通りを歩いてジャクソンハイツ駅に向う。いつも日雇いの仕事をもらうのをじっと待っているラテン系の溜まり場もある。ここが本当にアメリカなのかと思うぐらい、白人や黒人は見かけない。ラテン系の男性だと同じラテン系の女性に色目を使ったり、声をかけたりしているが、日本人の私には目もくれない。ほとんど英語が通じないからコミュニケーションも出来ないし、彼らとは共通の話題もない。スパーで働く韓国人だと同じアジア人同士、何かしら話す事はあるのだが、移民達は他人種に興味を示さずに生きているし生きているのだ。ニューヨークが人種のるつぼ^(註4)(melting pot)ではなく、人種のモザイクだとか、人種のサラダボウルだと言われるのがつくづく本当だと感じられる。

美的なところがどこにもない雑然とした街並みを横目にしながら、チューインガムが黒くまだら模様を作っている駅の階段を降り、電車を待つ。サッと電車に乗れる幸運は滅多に訪れない。一〇分、時には一五分以上も待つ間、一刻も無駄にするまいと、情報源になる新聞を片端から読み、必要な部分はザッと切り取り、後はプラットフォームに備え付けられている巨大なゴミ箱にドン・ドン捨てていく。時にはそのゴミ箱から新聞紙を引っ張り出して読む事もある。恰好など付けてはいられない。非難の眼差しを向ける者はない。気楽なものだ。

電車に乗って、ぐるりと車内を見渡すとラテン系が多い。スーツ姿の「ど真ん中のアメリカ人」^(註4)など一人もいない。いきなりこの状況に放り込まれると、乗客ほとんど全員が日本人でホワイトカラーの多い東京の電車を見慣れた目がカルチャーショックを起こし、慣れるまでに数日かかる。

ジャクソンハイツ駅からは、マンハッタンに向って横に走るEラインに乗り、五〇丁目で8番街を上るA、B、C、Dラインのどれかに乗り換える。好都合なのは急行(エクスプレス)のAラインだ。五〇丁目の次はコロンバス・サークルで、あとは一二五丁目まで止まらないから、Aというマークが電車の先頭車両に見えた時には(ラッキー!)と内心ニヤリとするのだが、ハーレムなど用のなかった頃、コロンビア大学に行くのに、1か9番線の一一六丁目駅で降りればす

ぐなのに間違つてAトレインに乗ってしまい、「A列車で行こう」の歌詞のようにごうごうと轟音を立てて電車がいつまでも止まらないので、このままではハーレムに着いてしまうと恐れおのいた思い出がある。

便利なAトレインをつかまえるにはいつもクイーンズからEラインに乗ればよいようなものだが、ニューヨークの地下鉄は当てにならない。遅れはしょっちゅう、スケジュール上では一分毎に来る事になっているそうだが、そんなのは全く当てにならない。一台逃すと次はいつ来るかわからないし、Eを待っていてもFが続^{（待）}けて二台来る事もあるので来た電車について飛び乗ってしまう。特に週末はエクスプレスが各駅停車（ローカル）になったり、工事や保全作業のせいで目的地まで迂回しなければいけなかったり、甚だしきは目的地に辿り着けなかったりする。実際そういう事があつたのだ。ニューヨークの地下鉄には最初はイライラするが、ニューヨーカーは辛抱強くじつと待っている。そのうち私も彼らのように諦めとも悟りともつかない境地に達し、そのうち次々と運行スケジュール通りにやって来る日本の地下鉄の方が奇妙なのだと思えてくる始末だつた。

Aトレインを降りると風景は一変する。そこは甘くて苦いチョコレート・シティ。さあ、セント・

ニコラス・アベニユーからハーレム探検がスタートするのだ。ハーレム・ルネッサンスの時代に「興奮を呼ぶ街」と呼ばれたレノックス・アベニユーはすぐそこだ。

(註1) デューク・エリントンことエドワード・ケネディ・エリントン(バンドリーダー、作曲家)の楽団は一九二二年に「コットン・クラブ」の専属楽団となる。その後の長く輝かしいキャリアはジャズ史に燦然と輝く。5番街の一〇丁目のデューク・エリントン・サークルには「生誕一〇〇周年」記念の銅像がある。セント・ニコラス・アベニユーの一五六―一五七丁目の自宅では二〇〇〇年曲もの作曲をし、晩年は、リバーサイドの一〇六丁目にブラウンストーンのタウンハウスを購入して住んだ。その為、一〇六丁目の西側は、デューク・エリントンブルバードと呼ばれている。一九七四年に他界した際にはモーニングサイドのセント・ジョン・デバイン教会で葬儀が行われ、一二〇〇人以上が列席した。ちなみにデュークとは公爵の意味。ジャズのミュージシャンには「名誉貴族」が多いようだ。アル・ハインズ(ピアノ)のアルは伯爵、カウント・ベイシー(ピアノ、バンドリーダー)のカウントも伯爵。位では公爵の方が上である。「A列車に乗って」が作曲されたのは一九三九年、一九四一年という二つの記述がある。

(註2) ジャズのタイトルには英語の勉強になりそうなこなれたものが数多くある。かつてはタイトルを訳す傾向が強かった。例としては「It Might As Well Be Spring (春の如く)」「Ain't Mischavin' (浮気は止めた)」「I Guess I'll Hang My Tear Out to Dry (涙のかわへまじ)」「I've Grown Accustomed To His Face (彼氏の顔に慣れた)」「Just One of Those Things (そんなこと)」「Alright, Okay, You Win (あなたの勝ちよ)」など。

(註3) 映画「マネートレイン」にAラインが登場する。ニューヨークの地下鉄路線中最も長い路線で、地下鉄地図を見るとブルックリンの外れのロッカウェイ・ビーチ駅からマンハッタン北端のインウッドまで延々と伸びている。ロッカウェイには思い出がある。トークン(代用貨幣)一つで行ける一番遠いところはどこかと思つて地図を見たら、それがAラインの終点ロッカウェイだった。ギスギスしたマンハッタンにほとほと嫌気が差すと週末の午後、ロウアー・マンハッタンのアパートを出てグラフィティだらけの電車に乗った。墓地や倉庫や低い街並みを眺めながら暗くなりかける頃ロッカウェイに着くと海岸まで歩いて行つた。そして岸壁に座つて月をしばらく見上げた後、駅前のマグドナルドでハンバーガーを食べて帰路に着いた。

(註4) インド人は公式言語が英語なので話が通じるが、ラテン系の人々には英語を話さない人が多く、ま

た、はなから他人種との接触を望んでいないように見える。アメリカ式の習慣などにも馴染まない者が多い。たまにレディファーストで、道を譲って電車に先に乗せてくれるようなラテン系の男性がいるとかえってびっくりしたものだ。ラテン系の人々に取っては他人種は見えていてもいないに等しい存在のように思える。残念ながらラテン系の移民の友人が出来た事はない。

(註5) 私の造語で、いわゆるアメリカの体制の中心部にいる人々。

(註6) Fラインに乗った場合には巨大クリスマスツリーとスケートセンターで有名なロックフェラー・センターでBに乗り換える。クイーンズからではなく、タイムズ・スクエア駅から一二五丁目を目指すにはマンハッタンの西側を縦に走るIRTのブロードウェイ／7番街線の1、2、3、9番線に乗る。2、3だとズバツとレノックス・アベニューに到着するが、1、9番線だとハーレムのずっと西側、ブロードウェイとモーニングサイドハイツの合流する地点に出てしまう。この駅はマンハッタン峡谷高架橋にある唯一の駅で、かつてニューヨークの地下鉄がエルと呼ばれて高架線上を走っていた時をしのぶ事ができる。「失われた週末」などの古い映画にはエルが登場する。一二三丁目から一三五丁目までの短区間、地下から地上に出るので、その間ハーレムを見下ろす事ができる。夜などは非常にノスタルジックな気分になった。古めかしいこの駅は「アメリカン・ギャングスター」

にも登場する。

この駅で降りるとハーレムの中心地からは遠いのでここから一二五丁目を横に走るバスに乗る事になる。レノックス・アベニューを北上するにはまたアップタウン行きのバスに乗り換えなければいけないので大変不便だった。ニューヨークのバスは地下鉄より更に待ち時間が長く、スピードも遅いので急いでいる時には歩いた方が早いぐらいなのだ。やはりハーレムはマンハッタンに比べると交通の便が悪く、特にクイーンズからだとも乗り換えがあるので心理的にも随分と遠く感じた。

ハーレムとはどこか？

ハーレム、特にハーレム・ルネッサンスの歴史や文化については既に多くの書物が書かれており、専門家でない私などが付け加える事はないが、ざっと過去に遡ってみる。オランダ人の農民が一六五八年に、当時の生活の中心地からは遠く隔たっていたハーレムに入植し、オランダの小さな町にちなんだニューハーレムと名付けたところからこの世界に名だたる偉大な街の歴史が始まった。交通の便があまり良くない事は現在も同じだが、一八三七年からニューヨーク&ハーレム鉄道（現在のメトロノース鉄道ハーレムライン）がハーレムまで通っていた事はいたが、マンハッタンの南部からは長い時間を要し、当てにならなかったという。

その後一二九丁目まで鉄道が伸びるとロウアー・イーストサイド（マンハッタンの南東部）から脱出した東欧系のユダヤ人が一一〇丁目から一二五丁目付近に多数移り住むようになった。アイルランド系、イタリア系、ドイツ系なども多くいた。一三五丁目周辺には黒人が多く住み着いた。一九〇四年の地下鉄（現在の2、3線）開通によりミドルクラスやアップパーククラスの流入を見込んでたぐさんのブラウンストーンやアパートが建てられる建築ラッシュが起った。その当時建

てられた美しいブラウンストーンが今でもハーレムで見られる。第一次大戦頃にはユダヤ人は人口過密となったハーレムを抜け出し、住宅の供給過剰で家賃が急激に下がったハーレムには南部から貧しい黒人が職を求めて多数なだれ込む「グレート・マイグレーション^(注)」(大移動)が起こり、二〇年代、三〇年代には主に南部とカリブ海域から流入した黒人のハーレムの人口は二〇万人以上になった。一八八〇年代にはハーレムは白人の富裕層が暮らす場所だったのが、彼らが去った後に貧しい黒人が住むスラム街となり、皮肉な事に、夜には白人がエンターテインメントを求めて訪れる一大娯楽エリアになったのだ。

ハーレムで黒人文化が花開いたハーレム・ルネッサンスは一九一九年に始まり一九三七年頃に終息したというのがひとつの目安となっている。この時期の文献にも事欠かないので私は特に記さない。連日、たくさんの白人客が詰めかけていたハーレムも一九三五年の暴動を境に、「ハーレムはもう、それまでのハーレムではなくなった」と「マルコムX自伝」に書かれている。ハーレムの商人達が黒人から儲けを得ているのに黒人を雇わない事に対する怒りが発端となったこの暴動後、ハーレムの人種間の軋轢は大きくなり、白人はハーレムに行くのを恐れるようになっていった。公民権運動のプロテストやデモや暴動は七〇年代まで続き、ハーレムはゲットー、スラムとしての長い冬の時代を過ごす事になったのだ。

七〇年代のニューヨーク市長はリンゼイ、ビーム、コッチ氏の三人で、九〇年代にはディンキンス氏、そして一九九四年から二〇〇一年まではルドルフ・ジュリアーニ氏が務めている。ジュリアーニ元市長の時代にマンハッタンは格段に安全で清潔になり、ハーレムも荒れ果てたビルや公園などが整備されてようやく息を吹き返した。今や貧民街という定義は当てはまらない。それほどかネオ・ハーレム・ルネッサンスだ、バブルだ、などと言われている。住宅の値段も急上昇し、白人層も続々と流入し始めているのだ。

再びハーレムにスポットライトが当るようになったのは魔法の杖がハーレムの上で一振りされたからである。その魔法の杖の名前はフェデラル・エンパワーメント・ゾーン。ハーレム再建計画である。レーガン政権時に発案され、その後政党内で「政治的フットボール」として歓迎されたり廃案にされたりという紆余曲折を辿った案が、一九九五年のNYタイムズの記事にはようやく三億ドルの連邦と市の資金がハーレムとサウス・ブロンクスの一部に投入されるとある。これにより市の貧困地域にどんな変化が起こるかははっきりとはわからないと書かれているが、現在のハーレムの変わりようを見ればきつと目を見張った事だろう。

ところでハーレムとは一体どこからどこまでを指すのか？

私の中ではストリートの番号が二桁、つまり九九丁目なら何とかアッパーウエストサイドだが、一〇〇丁目となるとハーレムというイメージになり、かすかに恐怖心が沸いたものだ。一九九八年に友人に一一〇丁目あたりのレストランにランチに誘われたのだが、（え？ ハーレムじゃない）と尻込みしたほど三桁の恐怖は大きかった。

映画「二五時（25TH Hour）」には、麻薬のディーラー役のエドワード・ノートンと客の間にこんな会話が交わされるシーンがある。

「一一〇丁目に行け、オレは足を洗ったんだ」

「ハーレムなんか行かないよ、ブラザー（黒人）の餌食になるだけだ」

一一〇丁目は今ではハーレムに区分されているのだが、古い文献の中には一二〇丁目からがハーレムだと書かれたものもある。マンハッタンにはチャイナタウン、SOHO、チェルシー、アッパーウエストサイドなどというエリアがあるが、ここからここまでがそうだ、というはつきりと

した境界線がない。流動的な例としては、チャイナ・タウンが「膨張」してリトル・イタリーを「侵食」しているとか、ドイツ系アメリカ人が多く住んでいた東側の八六丁目から九二丁目辺りの「ジャーマンタウン」がいつの間にか消滅していたりと、ニューヨークはTVドラマ「セックス・イン・ザ・シティ」でサラ・ジェシカ・パーカー演じるコラムニストが「ニューヨークでは変化がすべて (New York is all about change)」と言っているように刻々と変化するのだ。

日本では県にしても区にしてもはつきりと境界線があり、それに慣れている私は、ハーレムとはどこからどこまでなんですか、と図書館員に尋ねたのだが、優秀な彼女らにしても即座には答えられなかった。アメリカのマグドナルド社に「ハーレムには何軒支店がありますか」とメールを出してもハーレムの範囲を特定出来ないのでお答えできませんという返事が来た。

学者で作家のラルフ・エリソンが面白い事を言っている。^(註3)

「黒人が住むアップタウンがハーレムだ」

最近では白人も住むハーレムだが、一応、セントラルハーレム（ハーレムの中心地）はセント

ラルパークの北端の一〇丁目から始まり一五五丁目までと、東西ではハーレムリバーの下に伸びるフィフス・アベニューから西の地域を指すという事になっているようだ。コロンビア大学一帯はモーニングサイド・ハイツと呼ばれてハーレムではない。

二〇〇六年、ハーレムに足しげく通ったのはいいが、四年住んだマンハッタンにはそれなりに土地勘があり、映画で見ても即座にどの辺りかわかるけれど、ハーレムばかりはそうは行かなかった。景色に全く馴染みがないので東西南北がよくわからない。そしてニューヨークの偉大なグリッド・システム（格子状の街並み）がハーレムにも適用されているのはいいとして、ハーレム以南では通りに5番街、6番街、7番街と規則正しく番号が振られているのに対し、この街では5番^(註4)街から西の通りが数字で表されていないので戸惑い、混乱してしまうのだ。

まず、6番街だが、一八八七年にレノックス・アベニューと改名されている。これは大富豪で慈善家の白人のジェームズ・レノックスにちなんだものだという。（もつとわかりにくい事に一〇〇年後の一九八七年にはマルコムX・アベニューという別名も与えられている）、その一つ西がアダム・クレイトン・パウエル・ジュニア・ブルバード（大通り）という長たらしい名前で、アダム・クレイトンで通じる。これが7番街に当る。この通りが一二五丁目と交差する角には、

アダム・クレイトン・パウエル・ジュニア・ステイト・オフィス・ビルディング（州政府ビル）があり、かなり目立つ。広場にはアダム・クレイトン^(註5)・パウエル・ジュニアその人の銅像が建っている、「Keep The Faith（信念を貫け）」という彼のスローガンが刻まれている。

フレデリック・ダグラス・ブルバードは8番街でも通じるのが有難い。この通りのすぐ西にはセント・ニコラス・アベニューがあり、これを北上するとエッジコム・アベニューに繋がったりと私のようなニューカマーには訳がわからない。更に西に進むとアムステルダム・アベニューやブロードウェイといった馴染みの名前が出て来てようやく安心したものだ。最初は緊張して歩くだけが精一杯で、多くは黒人の偉人にちなむこうした通りの名前ははなかなか覚えられなかった。

（註1）大移動 南北戦争後、自由になった奴隷が一八六〇年代から徐々に移動を始めるようになる。一九二〇年から一九五〇年頃には六〇〇万人以上の黒人が南部から北部に大々的に移動した。

（註2）現在のハーレムには黒人のセレブリティが多く住む。元バスケットボール選手のカリーム・アブドゥル・ジャバーは二〇〇六年九月にマウント・モリスのブラウンストーンに入居している。作家のマ

ヤ・アンジェロ、コメディアンポール・ムーニー、市会議員のアダム・クレイトン・パウエル・ジュニア4世、私の好きな歌手のフレディ・ジャクソンも住んでいる。ジェントリフィケーション（スラムなどの高級化）の一方で、相変わらずプッシュャー（ドラッグの売人）もいればギャングもいる。暴力沙汰や殺人事件もある。外観はきれいになったが、黒人の抱える問題は解決された訳ではないと言う黒人もいる。ハーレムは今も昔もビター・スウィートな街である。

(註3) ラルフ・エリソン (Ralph Waldo Ellison) 一九一九～一九九四年。学者、作家。

(註4) 一二五丁目にはマーティン・ルーサー・キング・ジュニア・ブルバードという別名も付いている。ニューヨークのグリッド・システムの恩恵は方角音痴の私には計り知れないが、それでも地下鉄駅から出た時には東西南北の感覚がつかめない事が多い。しばらく歩いて間違いに気付いたりする。一二五丁目のクロスタウンバス（東西を走るバス）に乗って8番街からレキシントン街まで行く時には恰幅のいい黒人の運転手に何度も何度も「次がレキシントン?」「ここがレキシントン?」と止まる度に尋ねた。閉口した彼は「違います」「その時はアナウンスしますから」とその都度辛抱強く答えてくれていたが、車椅子の人が乗車するのを見た私は、かなり時間がかかるのを知っている。そこで降りて歩こうとしたのだが、彼は私が間違って降りようとしているものと勘違いし、フット

ボールのオフェンスのように私の前に立ちはだかつて静止した。「ここはレキシントンではありませんせん」と降ろしてくれなかったのは彼の善意と仕事への忠実さからだろう。ようやくレキシントン街に着くと、「さあ、お待たせしました、ここがレキシントンです」とうやうやしくアナウンスし、車内には笑いが起こったのだった。

(註5) 黒人の地位向上とハーレムに貢献した指導者、牧師。黒人初の下院議員。

(註6) フレデリック・ダグラスは奴隷解放運動の先駆者。奴隷の母と白人所有者の間に生まれた元逃亡奴隷。「アメリカン・ギャングスター」の实在のモデル、フランク・ルーカスは「8番街のどこがいけないんだ(What was wrong with just plain Eighth Avenue?)」とNYタイムズのインタビューで不満を述べている。

ハーレムの一年はホットでカラフル

二月——ニューヨークに卒業旅行の日本人がたくさんやって来る月だ。私は二〇〇二年の一月に一週間だけ訪れた。この時期のこの街の寒さをイヤというほど知っている私は、できれば二月だけは行きたくない。が、若い学生には寒さは気にならないようだ。

そんなニューヨークが記録的な暖冬と報じられたのが二〇〇六年暮れ。青森市とほぼ同緯度にあるニューヨークは、通常なら一月二月は氷点下まで冷え込む厳寒の季節だというのに、明けて一月五日には一七度、八日には二二・二度まで気温が上昇した。ニューヨークばかりでなく、二〇〇七年一月の北半球の平均気温は過去最高だったそうで、平年に比べてモスクワは五・九度も高く、ニューヨークは三・五度高かったという。日本も一・四四度ほどで、過去四番目の高さだった。地球温暖化にエルニーニョ現象が重なった結果だというのが、ニューヨークでは桜が開花したり、地下鉄にエアコンが入ってTシャツ姿の者まで現れたというニュースを見て、息ができなくなつて数ブロック歩くことにどこかの店に入らなければ歩けないほどの寒波に見舞われた当時を体験した私には驚き以外の何物でもなかった。

が、黒人にとっては冬も行事の多い「ホット」なシーズンである。

十二月二十六日から一月一日まではクワンザ(Kwanzaa)という行事がある。祖国アフリカの文化や伝統を祝って黒人の団結心を高めようというエスニックのスピリット溢れる楽しく教育的な行事である。

但し、「アグリー・ベティ」というドラマの中のエピソードではあるが、白人の世界で成功している編集者役のバネッサ・ウィリアムズは「クワンザ」をクリスマス特集のアイデアとして出されて「それ、イヤミ？」とアシスタントに食ってかかっている。黒人としてのアイデンティティをどれだけ意識しているかによってこうした黒人だけの行事の意味合いも変わってくるのだ。

クワンザがクリスマスの翌日から始まるのは、貧しい黒人がクワンザのためにショッピングがしやすいよう、多くの店でセールが始まるこの日に合わせたという事だ。ラッパーがバギーなパンツをはくのも、靴ヒモなしのスニーカーを履くのも、刑務所ではベルトや靴ヒモが没収され、自然とそういったスタイルになる事を踏襲しているとか、チットリンという味付けの濃い内臓料理は奴隷制時代に白人が食べなかった食材を使ったのだと知るにつけ、黒人のライフスタイルや

価値観、ファッションに至るまで、色々な歴史的、文化的背景があるということを教えられる。

そして一月の第三月曜日は公民権運動の活動家マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King Jr.) の誕生を記念する連邦の祝日、そして二月の第二週の「ブラック・ヒストリー・マンズ (黒人歴史月間)」と続く。これにはアフリカを離れた黒人の偉人や歴史などを後世に伝えるという趣旨が込められている。この期間はアメリカの黒人の歴史や文化にスポットを当てたイベントが多く行われ、黒人向けTV局のBETだけでなくHBOやPBSなどのTV局でも日頃あまり放映されない黒人に関する硬派の歴史番組や黒人映画が放映される。昨年と今年はバラク・オバマ議員に関する話題も多かったという。なぜ二月かというと、奴隷解放に尽力したアブラハム・リンカーンと奴隷解放論者で作家のフレデリック・ダグラスという偉人の誕生日である事から歴史学者のカーター・ゴッドウィン・ウッドソンが一九二六年に当初「ニグロ・ヒストリー・ウィーク」として設定したという。なお、全米人口の約一三%、ニューヨークでは約二五%という黒人がブラック・ヒストリー・マンズ関連で消費する金額を考えるとビジネスの面でも見逃せない行事であるらしい。

チャンスをとらえては「ハッピー・クワンザ」「今月はブラック・ヒストリー・マンズだよ」と

カメラの前で黒人文化のPR担当のような発言をするスパイク・リーののような黒人がいる一方で、二〇〇七年に女優を引退して司会業に専念すると発表したウーピー・ゴールドバーグは「私はアフリカン・アメリカンではない、アメリカ人だ。私の祖国はアメリカだ」と、自伝のドキュメンタリー番組で語っている。明るいコメディ映画出演が多い中、モンゴメリー・バス・ボイコット事件を題材にした「ロング・ウォーク・ホーム／The Long Walk Home (1996)」のような映画にも出演している彼女ではあるが、テッド・ダンソンやフランク・ランジェラという白人俳優と交際していた事からも窺えるように、あまり人種を意識しない女性なのだと思う。モーガン・フリーマンも「黒人の歴史は米国の歴史なのだからブラック・ヒストリー・マンスなど必要ない」「黒人白人とレッテルを張ること自体を止めるべき」と主張している。

それも一理あると思う。実際、ひとつの人種の歴史に捧げられた行事が行われる事がフェアで有意義なのかという議論があり、過激な黒人団体である「ネイション・オブ・イスラム」なども、浅はかな儀式に成り下がっているとこの月間を批判している。制定された当初、黒人の歴史と言えば社会的に低い地位にいる黒人や、奴隷とその子孫が主たるもので、アフリカ人がいかに歴史や文化の主流に貢献したか、あまり知られていなかった。それを認識させようとウッドソンは尽力したのだが、彼自身、この記念行事がやがてなくなり黒人の歴史がアメリカの歴史と統合する

日を願っていたという。

初の黒人大統領が生まれるかどうかという現在ではあるが、歴史的な過渡期の中に置かれている黒人が忙しい日常と現在の状況に埋没してともすれば忘れがちになる自分達のルーツやアイデンティティを、歩を休めて再認識できる月があるというのは大変有意義な事だと思う。差別や虐待を受けてきた日本女性にも「女性月間」があつて、「男女平等」という一項を日本の憲法に取り入れたベアテ・シロタ・ゴードンさんを称えるとか、女性が辿つて来た苦難の歴史を振り返り、自分達の意識を高められるよう、TV局が女性の歴史に関するすぐれたドキュメンタリーや映画を放映すれば日本女性の地位向上に役立つと思うのだ。

が、やはり一番ハーレムが熱いのは真夏、それも「ハーレム・ウィーク」^(註6)の行われる八月である。「ハーレム・ウィーク」として定着する前には、当時のハーレムを取り巻く沈滞ムードを打ち破ろうと、ハーレムの栄光の歴史と、困難な生活を強いられたハーレムの住民の明るい未来へのトリビュートとして住民の有志が一九七四年に「ハーレム・デイ」という一日限りの催しを設立したのだが、今や「ウィーク」どころではなく七月から九月の初めまで約二ヵ月間も続く大きなイベントに成長している。

七月末の日曜日（今年は七月二十七日）の「グラント將軍の墓」での野外コンサートで幕を開ける。ゴスペル、R & B、ダンスなどのイベントに露店も出て家族でピクニックも楽しめる。大小さまざまなイベントがあり、中にはバスケットボールのトーナメントもあるというから情報を逃さないようしっかりチェックしなければならない。ハイライトの「ハーレム・デイ」（八月中旬の日曜日。今年は八月十七日）には一三五丁目の5番街からセント・ニコラス・アベニューの間の四ブロックで大がかりなストリート・フェスティバルが催される。三五万人の見物客が訪れるとハーレム・デイスカバーのウェブサイトにある。身動きできないほどの人出で、日本人の姿もちらほら見えるが、訪れるのは圧倒的に黒人で、これはやはり黒人の、黒人による、黒人の為のフェスティブだと言える。私も見物客の一人としてきつとこの通りを歩いている事だろう。

そして九月の第三日曜日のアフリカ系黒人とカリブ系黒人の遺産と歴史を称える「アフリカン・アメリカン・デイ・パレード」でハーレムの夏に終わりが告げられる。

（註1）キング牧師の誕生日は一月十五日。

（註2）日本でも放映中の「The Wire」もHBO制作。ボルティモアの貧困層の黒人の麻薬ディーラーと地

元警官の攻防を描く犯罪ドラマ。おススメ。

(註3)

一九五五年、アラバマ州都モンゴメリーで、黒人女性ローザ・パークスが、バスで白人に席を譲るのを拒んだ為、人種分離法違反で逮捕された事が発端となり、公共交通機関における人種差別に抗議して黒人がバスをボイコットした歴史上有名な事件。自伝の中で彼女は「屈服させられることに我慢できなかった」と回顧している。マーティン・ルーサー・キング牧師がボイコットを指導した。この事件で勝利を手にして勢いを得た彼はその後ワシントン大行進など数多くの抗議行動で公民権法を成立させた。アンジェラ・バセット主演で「ローザ・パークス物語」(二〇〇二年)が作られている。

(註4)

とは言え、モーガン・フリーマンは黒人の歴史を描いた四部作のドキュメンタリー映画「Slavery and the Making of America (奴隷制度とアメリカ建国)」ではナレーションを担当している。一六一九年にアフリカ人が最初の奴隷としてアメリカに渡り、一九八五年に最後の奴隷が解放されるまでの二五〇年間、黒人が今日のアメリカを築いたという内容。PBSで放映され、DVDとして販売されている。(http://www.pbs.org/wnet/slavery/)

(註5) 「ドイツ、ブラック、プエルトリコ、韓国とのミックス」などという出自を持つアメリカ人は珍しい。人種のミックスが進んで「レーシャリー・アンビギュアス（人種的に曖昧）」でパッと見ても人種的背景がわからない人もいる時に黒人、白人、ラテン系、アジア系、ネイティブ・アメリカンなどという従来の人種の分類の仕方が現状にそぐわない場合も増えている。「将来はアメリカ人の肌の色は一色になるだろう」とまで言う人もいる。

(註6) 毎年ハーレムのアフリカ系アメリカ人（黒人）ラテン系、カリブ系アメリカ人らの文化的活動を紹介している。この祭典が国際的な注目を浴びたのはジンバブエのムガベ大統領が二〇〇〇年の聴衆に向って、ジンバブエの独立に関してのアメリカの尽力に対して感謝の意を表明した時だという。イギリスの植民地で一九八〇年に独立したばかりの新しい国であるジンバブエで、ムガベ氏は初代の首相、八五年からはずっと大統領を務めている。二〇〇八年六月には五期目の当選を果たしたが、アフリカ連合の選挙監視団から決選投票の正当性を否定され、選挙の再実施を要求されている。ブッシュ米大統領も「偽りの選挙だ」とコメントしている。今や、ハーレムウィークはニューヨークだけでなく、アメリカの文化的祭典となり、毎年多くの人々を惹きつけている。（ハーレム・デイスカバーのウェブサイトより抜粋・意訳）今までに出演したのはベン・E・キング、グロリア・リン、サビヨン・グローバー、スモーキー・ロビンソン、スパイクリー、ステイシービー・ワンダー、カラー

ハーブルのキャスト、フレディ・ジャクソン、ダグ・E・フレッシュなど黒人セブリティが名を連ねる。「ハーレムジャズ&ミュージック・フェスティバル」として七月末からアダム・クレイトン・パウエル・Jr・ステイト・オフィスビルの広場では無料コンサート「ハーレム・サマーステージ」が行われる。二〇〇六年に訪れた時には「ハーレム・サマーステージ」の段幕が九月に入っても取り払われず、それを見かける度（さぞかし楽しかっただろうなあ）と悔しい思いをした。

ハーレムウィークのみならず、ハーレムの活性化にはもっと白人を呼び込む努力が必要だという声も多い。ハーレムは交通の便が良くない事もあり、わざわざやって来る白人の姿は少ない。

第二章 目で見るハーレム・ルネッサンス

エンターテインメントとハーレム・ルネッサンス

マンハッタンでは毎日どこかしらでTVや映画、コマーシャルの撮影が行われているようだ。運が良ければ「アイアム・レジェンド」撮影中のウィル・スミスにコロンバス・サークルでバツタリ出くわしたり、「バナナ・スカイ」のワンシーン、トム・クルーズが誰もいないタイムズ・スクエアを走り抜けるのをホテルの部屋から眺めたり、「^(註1)アメリカン・ギャングスター」の撮影中にハーレムのソウルフードレストランでランチを食べているデンゼル・ワシントンの横に座る幸運に巡り合えるかもしれない。

完成するまでは様々な障害があったという「ゴッドファーザー」だが、パートⅡは今やアメリカ映画協会(AFI)の偉大な映画一〇〇選の三二位に入る名画である。この映画の撮影は私の住んでいるアパートからすぐそばのブロックで行われていた。1番街とアベニューAの間の四丁目か五丁目あたりだったと思う。イタリア語の看板を飾り、舗装の道路にわざわざ土を盛って古い時代を演出していて、映画で見ると一九世紀のリトル・イタリアそのものだった。このブロックに住む住民はたつぷりとこの「ライブ・ロケーション・ショー」を楽しんだに違いない。

が、マンハッタンでも、ハーレムで撮影される映画となるとその数はぐっと減る。有名なところを拾ってみると「コットンクラブ／The Cotton Club」（一九八四年）、「ブラザー・フロム・アナザー・プラネット／The Brother from Another Planet」（一九八四年）、「モ・ベター・ブルース／Mo' Better Blues」（一九九〇年）、「フーリージャックシティ／New Jack City」（一九九一年）、「マルコムX／Malcolm X」（一九九二年）、「十五時／The 25th Hour」（二〇〇二年）など、こうしてみるとスパイク・リー監督の映画が多い。「ジャングル・フィーバー（Jungle Fever）」（一九九一年）の主人公、ウェズリー・スナIPS演じるホワイトカラーのサラリーマンの住居はハーレムという設定だった。

ハーレムのスタジオ・ミュージアムで買って、潰れないよう円筒に入れて持ち帰った「ハーレムルネッサンス」一〇〇年の歴史、芸術、文化」というポスターにはたくさんのジャズ・ミュージシャンや各界の著名人、ハーレムの歴史的建造物のイラストが描かれている。

「^{註4}コットンクラブ」始め、「ラファイエット・シアター」、「スモールズ・パラダイス」、「コニーズ・イン」、「リズムクラブ」、「ストンピン・アット・ザ・サヴォイ」で知られる「サヴォイ・ボールルーム」その他が所狭しと描かれている。それを見ているだけで、ハーレム・ルネッサンス時の華や

かさがほうふつと浮かび上がり、通りに流れ出るスウィング・ジャズまでが聞こえてきそうな気がする。ハーレム・ルネッサンス時のハーレムがどんなに素晴らしかったか、ジャズが好きな私にはこの時期はスターがたくさんいたゴールデンエイジである。四時五時までの夜遊びなど平気だった当時の私なら仕事はね次策、ハーレムの明け方まで続くパーティーに駆けつけるのに、などと時々空想する事がある。ファッツ・ウォラー、ビリー・ホリディといった、ファンキーでブルージーなミュージシャンが生きた時代はどんなだったかと時々思いを馳せるのだ。映画やドラマのようにタイム・トラベルが出来るものならもう戻って来れなくてもいいとすら思う。

ハーレムの絶頂期にしても、犯罪の巣窟だった時代にしても、知る手立ては書物や映画しかない。私の想像力をかきたててくれるのは「マルコムX自伝」の中の、マルコムXが語るハーレムの項である。音楽が始まるといってもたつてもいられないほど音楽が好きでしかもリンディ・ホップという激しいダンスの名手だったというマルコム。彼がそわそわする様子は手に取るようにわかる。私もかつては米軍基地の中の下士官クラブで「自分の曲」がかかると早くフロアに出て踊りたくて、誰でもいいから誘ってくれないかとキョロキョロとあたりを見渡したものだっただ。

一三二丁目と7番街の角は「ザ・コーナー」と呼ばれ、「コニース・イン」や「ラファイエット・

シアター」に出演するスターの姿が見られたというから、私も7番街を歩けば小走りのファッツ・ワラーに出会って、「お行儀よくね！（Ain't misbehavin'）後で行くからいつもの曲をお願いね」と声をかけ、次には優雅なロングドレスでタクシーから降り立ったビリー・ホリディに「ルッキン・グッド、ミズ・ホリディ！」と敬愛の眼差しを向ければ彼女はちらつと微笑んでくれたかもしれない。

私は、ルネッサンス時のスター達が、時には幸せに浸りながら、時には苦渋を胸にかかえて歩いたであろう正にその同じ道を、ハーレムの歴史を踏みしめながら歩いていったのだ。

（註1） 実在のギャング、フランク・ルーカスの半生を描いた「アメリカン・ギャングスター／American Gangster」（二〇〇七年）は日本ではDVDが八月まで発売されないのでストリーミング配信で観た。一九六八年のハーレムからスタートするこの物語は、イタリアのマフィアが幅を利かせていた時代で、フランクはベトナム戦争を背景に、ヘロインを東南アジアから「産地直送」で密輸、ブルーマジックというブランド名をつけて売りさばき、のしあがって行く。アメリカ兵の棺の中に大量のヘロインを忍び込ませるといふ突飛である意味斬新なアイデアが出てくるが、フランク

自身はそれを否定している。画像が悪く、（ああ、ハーレムのおそこだな）とわかる場面は少なかったが、消火栓を開けて水をほとばしらせて遊ぶ子供達の姿や通りにたむろする黒人達の姿に、七〇年代のハーレムの生活とはこういうものだったかと興味深かった。映画中には歴史的景観の美しいストライバーズ・ロウ他ハーレム各所がロケ地として使われている。一見ハーレムのどこにでもいそうな容貌のフランク・ルーカスの写真を見ると、デンゼル・ワシントンというハンサムなスターが演じた事で現実味が薄れたような気がする。

一九七五年に逮捕されたフランクルーカスは仮釈放の後再逮捕され、一九九一年に釈放されている。NYタイムズのインタビュー記事「The Return of Superfly」（二〇〇〇年八月七日付）は一一六丁目の7番街と8番街の間でくたびれたシボレーに乗って麻薬を売りさばいていたフランクがリージェンシー・ホテルのスイートに泊まり、ロールスロイス、ベンツ、コルベット・ステイニングレイなど数台の車を乗り回すようになるまでの血にまみれた「サクセス・ストーリー」を赤裸々につづっている。同記事によると七〇年代初めのハーレムにはたくさんの麻薬のブランドがあった。一例としては「ホンマ物／Tu Blu,」「すっくすミン／Mean Machine」「命がけ／Could Be Fatal」「クーリーハイ（高校とハイになっているをかけてる）／Cooley High」「ファンキーなアハ／Funky Stuff」「もつと欲しう／Can't Get Enough of That」「悲劇のマジック／Tragic Magic」「神

に誓って／＼「Swear to God」(訳・筆者)などはほんの一例でそれらの名がセロファンの袋にゴム印で押されたという。ネーミングが面白い。それらの中でもフランク・ルーカスの「ブルーマジック」は他に例を見ないほど上質だった。

(註2) デンゼルワシントンはハーレムの「Mo Bay Restaurant」で、ランチを摂っていたそうだ。同じくハーレムのソウルフード・レストラン「ミス・マウドの店(Miss Maude's)」(五四七レノックスアヴェニュー、一三七丁目)には古いハーレムの写真がたくさん飾ってあるそうだ。NYタイムズ・オンラインでは「Arm Wrestling In Harlem(1940)」「Live, From the Apollo (1965)」「Window Trumpeter (1976)」などハーレムの素晴らしい写真が買える。但し最低で二万円程度する。

(註3) 同監督の「ドゥ・ザ・ライト・シング(Do the Right Thing)」「クルックリン(Crooklyn)」はブルックリンが舞台。

(註4) 「コットンクラブ」と肩を並べる有名なナイトクラブ「コニーズ・イン」に隣接。オール黒人キャストのレビュー「シャッフル・アロング」が一九二二年ブロードウェイで白人層に大受けて、黒人音楽がポピュラーになり、ハーレムまで音楽を聞きに行く白人客が増えたが、観客は同じ人種

である事を望んだ事からこの二つのクラブは白人オンリーだった。その為黒人達の素晴らしいパフォーマンスを黒人客が見られないという皮肉が生じた。後に「コニーズ・イン」は白人客が帰った後、深夜のみ黒人のミュージシャンに開放された。「コニーズ・イン」のビルは現在一階がCタウンスパーマーケットとなっている。

ハーレムルネッサンス時代に何百とあったクラブの中の「ザ・ビッグ・フォー」とは「コットンクラブ」「コニーズ・イン」「スモールズ・パラダイス」「バロン・ウィルキンズ・クラブ」で最も人気のあったのが「コットンクラブ」(現在新しいコットン・クラブが営業している)。一四年間営業を続ける中で黒人初のセックスシンボルとなったレナ・ホーンが週給五〇ドルでコーラスガールとしてデビューしたのもここ。彼女は後にウォルドルフ・アストリア・ホテルで週五〇〇〇ドルを稼ぎ出すまでになった。「コットンクラブ」廃業後は朽ちるままになり、「サボイ・ボールルーム」と共にミドルクラス用の住宅「デラノ・ヴィレッジ」の1部となった。「スモールズ・パラダイス」はスピーク・イーजीとしてスタートし、黒人オーナーによるステイタスの高いクラブとなった。ローラースケートにのつたウェイターはトレイをバランスとりながらチャールストンが踊れたという。「スモールズ・パラダイス」に出入りしていたギャングのフランク・ルーカスは五〇年代後半の冬の寒い夜、エヴァ・ガードナーを連れしたハワード・ヒューズを見かけたと言う。ハーレムに上流階級の

白人が訪れていたというひとつの証言である。

(註5) ストライバース・ロウ(努力した人、成功した人たちの通り)は映画のロケ他、CM撮影も行われる。

「バブリング・ブラウン・シュガー」

一九七六年にオープンしたブロードウェイ・ミュージカル「バブリング・ブラウン・シュガー (Bubbling Brown Sugar)」は七〇年代のハーレムの街角から始まり、往年のエンターテインナーと若いカップルがハーレム・ルネッサンス華やかかなりし頃にタイム・スリップするという筋立てになっている。荒れ果てたハーレムからいきなりキャブ・キャロウェイ、デューク・エリントン、ファッツ・ウォラーなどが活躍する映画「コットンクラブ」さながらの世界に迷い込むカップルの驚きは想像に難くない。それは七〇年代のハーレムしか知らず、「沸き立つブラウン・シュガー」という形容がぴったりの現在のハーレムに迷い込んだ私も同じだったのだ。

二〇年代から四〇年代のハーレムのナイトクラブを舞台にした、黒人キャストによるこのミュージカルは、二つの都市の教会で上演された後にブロードウェイのオーガスト・ウィルソン劇場で一九七六年の三月二日にオープンし、一九七七年の十二月三十一日に幕を閉じている。オープン当時、黒人女性が飛び跳ねるような図柄のポスターを劇場街で見かけたのをよく覚えている。^(註2) 日々の生活に追われてエンターテインメントに出かける心のゆとりもなかった私は、気になった

ものの、劇場には遂に行く事はなかった。

オリジナルキャストによるCDには「イット・ドン・ミーン・ア・シング／It Don't Mean A Thing」「ストンピン・アット・ザ・サヴォイ／Stompin' At The Savoy」「ゴッド・ブレス・ザ・チャイルド／God Bless The Child」「ハニーサックル・ローズ／Honeysuckle Rose」などの、今ではジャズのスタンダードとなっている当時の有名な曲がズラリと揃っている。「ハーレム・メイク・ミー・フィール／Harlem Makes Me Feel」の歌詞には「ハーレムは、生きているって素晴らしいと感じさせてくれる (Harlem makes me feel it's great to be alive)」という一節がある。ハーレム・ルネッサンスの頃のハーレムがどんなに素晴らしいところだったのか、アポロ劇場のレビューを見た観客が印象をこう語っている。「ライオネル・ハンプトン、カウント・ベイシー、キャブ・キャロウェイ、ハーブ・ジェフリーズ、サラ・ボーン、ビッグ・ジョー・ターナー、ナット・キング・コール、デルタ・リズム・ボーイズ……まだまだ続く。(レビューの後) 僕らはクラブをはしごした。ハーレムみたいに素晴らしいところは他にない」。

それにつけてもブロードウェイ・ミュージカルの歴史ひとつ取っても黒人は舞台を踏む事が許されなかった時代がある事を考えれば、厚い人種差別の壁に遮られ、否定され、拒絶され続けて

もめげず、たゆまず、諦めず、エンターテインメント界に大輪の花を咲かせた黒人の逞しさには瞠目すると共に心から尊敬の念を禁じ得ない。

(註1) ユーチューブでは、最近のオランダでの公演の様子が見られる。

(註2) 七〇年代はそれでもまだブロードウェイミュージカルは安かった。八三年に出版されたガイドブックにも三五ドルとチケットチャージ代とある。今では半額チケットでも三五ドルというのはまずない。

(註3) 「イット・ドン・ミーン・ア・シング」のフルタイトルは「It Don't Mean A Thing If It Ain't Got That Swing」。(邦題「スウィングしなけりや意味がない」)。文法的にはほめられた文ではないが、黒人音楽を聴くたび、黒人のダンスを見るたび、そして彼らと話したたび、「楽しくなけりや意味がない」という彼らの人生観を思い知らされる。

(註4) ジャズが主体のブロードウェイミュージカルには一九八一年の「ソフィステイケイテッド・レディズ」、一九九九年の「スウィング」などがある。

「ハーレムナイト (Harlem Nights)」(一九八九年)

「ハーレム・ナイト／Harlem Nights」(一九八九年)ではレッド・フォックス、リチャード・プライヤー、エディ・マーフィーと、三代代の人気コメディアンが顔を合わせている。エディ・マーフィー脚本、監督で作られた、芸術、文学、音楽などの黒人文化が花開いた華やかなりしハーレム・ルネッサンス期へのノスタルジアを込めたこの映画は一九一八年、黒人少年が「ラファイエット・シアター」の前を走り過ぎるシーンから始まる。7番街の一三二丁目と一三三丁目の間にあったこの伝説的な劇場はこれまた有名人が多数出演するレビューで有名なクラブ「コニーズ・イン」に隣接していた。ファンキーなピアノ・スタイルで私の好きなファッツ・ウォーラーはこのクラブの使い走りだったという。

短いイントロダクションの後、舞台は二〇年後の一九三八年、「クラブ・シュガーレイ」に移る。この架空のクラブの営業は一九二〇年から一九三四年までの禁酒法の時代とも重なる。成功したクラブを経営しながら、ギャングとの確執からハーレムを離れる事を決意したクラブの仲間達は、一計を案じてまんまと大金をつかむ。

いよいよハーレムを去るという場面で、丘の上から街を見下ろし、「寂しいな、二度とハーレムには戻れない」とリチャード・プライヤーがしみじみ言う。するとエディ・マーフィは「街はどこにでもあるさ」と年下のドライさで応じる。すると、リチャードは「ハーレムはどこにもない／There's no place like Harlem」と感慨深く言ってジ・エンドとなる。

続くエンド^(註3)・ロールではルイ・アームストロングの「ハーレムで降りして (Drop Me Off in Harlem)」のどこか牧歌的な歌声が流れる。

♪ハーレムで降りしてくれ

グッド・オールド・ハーレムで……

良きにつけ悪しきにつけ、確かにハーレムのように黒人文化が凝縮した街は世界のどこを探してもない。ハーレムはブラウンシュガーのように甘いだけの街ではなく、黒人達の血と汗と涙の沁み込んだビター・スウィートでタフな街なのだが、それでもやっぱり今も昔もハーレムのような街はどこにもない、そう思う。

「ラファイエット・シアター」はオリジナルのビルが現在でも建っており、教会^(註1)(ウィリアムズ・インスティテュショナル・チャーチ)になっている。私はそんな歴史的な場所とは知らず、駐車場に面した隣のアパートの壁面いっぱいに描かれた、こぶしを振り上げて団結を訴える黒人達の壁画に目を留めた。「Struggling Community (苦しむコミュニティ)」というスローガンに黒人達がこぶしを振り上げている図で、黒人の団結を訴えている。風雨に晒されて劣化が始まっている。写真を撮っていると、教会から出て来た黒人の中年女性が近寄って来た。教会のオーナーだという彼女としばらく立ち話をした。

「八〇年代のハーレムはまだまだ苦しい時代だった、でも」と向かいのアパートの幾つかを示し、かつてはいかに家賃が安かったか、そして今はいかにべらぼうな値段になったか、ため息まじりに話してくれた。日曜には教会にいらっしやい、いい男性を紹介してあげるから、と冗談交じりに言ってくれたので行ってみようと思つては見るものの、早起きが苦手な私にはなかなか行けず、帰国の日が来てしまった。

この向いには「ビッグ・アップル・ジャズ^(註5)」という低価格でジャズを楽しめる気軽なカフェ兼

ギフトショップがあり、日本人客も数多く訪れていた。私もハーレムに行くと必ず寄ってたくさん素晴らしい人達に会う事ができた。ハーレムとジャズをこよなく愛するオーナーのゴードン・ポラトニックさんはその豊富な知識を生かしたジャズ・ツアーも行なっている。

(註1) 7番街の一三二丁目と二三二丁目の間に位置するハーレム・ルネッサンス期の伝説的な劇場。

世界で最も有名なタップダンス、ビル・ボージャングル、ロビンソン他、一流の黒人タレントが出演した。「コニーズ・イン」に隣接していた。

(註2) モデルとなったかどうかは定かではないが、一九四〇年代に活躍したボクシングの世界チャンピオン、シュガー・レイ・ロビンソン経営の「シュガー・レイズ (Sugar Ray's)」いうしやれた小さなレストランが7番街の二四丁目に実際にあった。この頃、ハーレムの中心地の南北二二五丁目から一三五丁目の間と、レノックス・アベニューと7番街の間には一〇〇以上のスピーク・イージー(もぐり酒場)や劇場、ダンスホール、そして数えきれないほどの飲食店があり、一大歓楽街の様相を呈していたという。

(註3) この映画には「Mood Indigo」「One O'clock Jump」「Take the A Train」などたくさんのジャズの名曲

が使われている。

(註4) 教会の駐車場となっている場所にはかつては「リズム・クラブ」があったが火事で消失している。同じブロックにあったタツブダンサーたちのプライベートクラブ「フーフアーズクラブ」の外に生えていた榆の木は「希望の木 (Tree of Hope)」と呼ばれ、ハーレム・ルネッサンス期から触った者に幸運をもたらすと言い伝えられていた。エセル・ウォーターズやフレッチャーヘンダーソン、ユービーブレークなどがスターになる前にこの木のある場所を訪れたと言われている。7番街の拡張時の一九三四年に切り倒され、まき状に切られてみやげ物として売られた。その一つがアマチュアナイトが始まる時にアポロ劇場に置かれて、現在もアマチュアナイトの出演者達がさするのが伝統になっている。新しい希望の木は二〇〇七年六月にNY公園課によって再び植樹された。なお、再植樹された榆はオリジナルの木とは関係がない。

(註5) 「ビッグ・アップル・ジャズ」 <http://www.bigapplejazz.com/>

第三章 ハーレムを歩く

そこは異文化の「カルドロソ」

二〇〇六年九月。

ハーレムは夏の名残りの強い陽射しを受けて沸き立っていた。マンハッタン最北部、ウォール街からチャイナタウン、ソーホー、グリニッジ・ヴィレッジ、チェルシー、ミッドタウン、アッパー・ウエスト・サイドと上がり、更に北に位置するハーレム。ツーリストにも穏やかな顔を見せるようになったハーレムの目抜き通りの一二五丁目（フィフティ）は週末ともなると大変な賑わいを見せる。人種の内訳は見たところ九割が黒人、一割がラテン系で、白人の姿はない。アジア系にも滅多に会わない。どこにいても私がたった一人の日本人という事が多かった。

一二五丁目では日本では見かけない路上販売が盛んで、照つても降つても雪の日でもストリートベンダー（黒人露天商）達はテーブルひとつ構え、熱心に商売に励んでいる。これはハーレムの伝統で、ルネッサンス時にもホットドック売り、スイカ売り、ベビーカーを改造したカートに炭を敷き、ホットピーナッツを売る者、違法のナンバーズ賭博のディーラーや麻薬の売人（プッシュヤー）も加わってレノックス・アベニューや7番街は大賑わいだったという。

現在のベンダー達の商う品は香油やお香やキャンドル、手作りせっけん、アクセサリー、デューラグという黒人男性がかぶるナイロンの帽子のような物、黒人のセレブリティの絵葉書など実用品というよりおみやげ品が多い。商品はどれもカラフルで、赤、青、黄、紫と色のパレードが続く。日本ではなかなか買えないマヤ・アンジェローヤやトニ・モリソン、ニッキ・ジョバンニといった黒人女性作家のポストカードを見つけて一枚一ドルで七枚買った。三〇代らしき男性はポケットからぶ厚い札束を出し、その中から一ドル紙幣を三枚引き出して釣りをくれた。かなり繁盛しているらしかった。一ドルは充分安いと思ったのだが、同じポストカードが、スタジオ・ミュージアムでは七五セントで売られていて（やられた）と後で苦笑いした。アーバン・リタラチュア（都市文学）とかいうジャンルがあるようで、スリー・モンティ（いんちきトランプ）の元詐欺師の自伝を宣伝販売をしている男性もいた。明るく、人当たりが良く、到底詐欺師とは思えないのだが、「詐欺師とは思じのいいものだよ」と教えてくれた人もいて、「本はカバーで判断してはいけない（人は見かけで判断してはいけない）」という諺を思い出した。

バナナやココナッツのエキゾチックな香りに包まれて大通りを東に進むと、警官が来たらすぐにまとめて逃げられるよう、テーブルではなく、道路上に大風呂敷を広げて違法コピーのCDや

DVDを並べて五ドルと激安で売る黒人もいる。

かと思うと、園芸用と思われる手押しのワゴンに氷とボトルド・ウォーター（ペットボトル入りの水）を入れて売り歩く者もいる。九月の炎天下を長時間歩いていれば思わず手が伸びそうになるが、聞くと売値は一本二ドル。レノックス・アベニューをちよつと上がったデリなら冷えていないのが玉にキズではあるが、同じサイズの水が三本一ドルで売られている。

ガマン、ガマン。

手持ちのキャッシュが心細いのでから樂をせず、忍耐力で節約するに限る。アメリカではたったのドルが大きな価値と意味を持つ。日本に一〇〇円ショップが出来るはるか昔から大規模な九九セントショップが存在していて、生活用品から食品まで実に幅広い商品がすべて九九セントで買い揃えられるのだ。私もニューヨーク滞在中はよくお世話になる。「ア・ペニー・セイブド・イズ・ア・ペニー・ゲインド（ちりも積もれば山となる）」という諺を金科玉条にしてケチケチと暮らすツールリストには二ドルのボトルドウォーターは贅沢品なのだ。

東京ならよく冷えた緑茶やウーロン茶が入った自販機が一〇〇メートルも歩かないうちにひよっこり出現するが、ニューヨークにない物がこの自販機である。シカゴ・ホワイトソックスの外野手のジャメイン・ダイが二〇〇六年、日米野球の来日時、日本の印象を聞かれて「自動販売機でビールやたばこが買えるなんて日本人はよほど正直なんだな」とスポーツ紙にコメントしていた。ホテルやバー、オフィスの中にはスナックやソーダ、タバコなどの販売機もあるが、路上にはひとつもない。もしあつたら中の小銭狙いで即日壊されるのがオチだろう。

見る物皆珍しく、東へと進むと後ろから音が追ってくる。ブーンボックスと呼ばれる大型CDラジカセから音を振り撒いて歩く黒人だ。こういう輩は昔からいたが、iPodがある時代にまだ健在とは恐れ入る。なつかしいやら可笑しいやらで緊張が一瞬ほぐれる。七〇年代に比べるとラジカセのサイズは大分小さくはなつたけれど、ご苦労な事にこれを肩に担いで自分好みの黒人音楽を鳴り響かせ、いわば移動BGMを通行人に提供しているのだ。携帯で話している男性が、彼がそばを通ると片方の耳を手で塞ぐ。迷惑と言えなくもないが誰も文句を言わない。ブーンボックス氏はビートに合わせ、長い手脚を振る黒人独特の歩き方で人込みをかき分けながら音と共に遠ざかって行く。私が彼ならどうせやるなら上手く編集したCDを通りの一角で流して踊れるようにし、小銭を集めるのに、とふと思ったりした。

CDや家電を売る店、洋服屋などからは様々な黒人音楽が流れ出てくる。ほとんどはビートも歌詞も攻撃的なヒップホップで、黒人音楽のルーツであるブルースやゴスペル、ジャズは一切聞こえて来ない。昨今では若い黒人達に人気のある音楽はラップなのだ。CDショップに入ってもラップのセクションが大きなスペースを占めていてさすが本場、と層の厚さを感じさせる。

一軒だけ、オールド・スクールのブラック・コンテンポラリーを流している。聞き覚えのある声だ。ショーウィンドウを見ると、派手なのにどこか野暮ったいスーツや帽子を商う洋服屋である。店内を覗くと、商品のディスプレイも垢抜けず、ミッドタウンに比べれば見劣りがする。

「^(註3)Let's Get It On」だ、と私は曲のタイトルを思い出す。マービン・ゲイの一九七三年のヒット曲。メロウでセクシーな名曲。ハーレムにマービンの曲が流れているのだと感無量で、私は立ち止まって曲にしばし聞き入った。彼のスローなバラードは、実の父親に射殺されるという悲劇に思いが及ぶ為か物悲しく響く。

自作の音楽^(註1)CDを無料配布している女性もいる。ハーレムでは無料の音楽CDがたくさん手に

入るのだ。日本で入手困難な黒人映画のDVDを買いに入った店ではレジの横に無料CDが箱いっぱい無造作に入っていたので五、六枚貰って帰った。イベント会場に出向けば受付けにも何種類か置かれている。どれもが店で売られていてもおかしくない立派な作りで、帰国してから聞いてみるとプロと遜色ない出来栄である。やはり自作のCDを五ドルで売り歩いている兄弟もいた。ハーレムに行く度に会うからこれが生活費を稼ぐ手段になっているようだ。日本人は金持ちだと思っているのか、しきりに売りつけようとする。無料CDの多さを知っている私はその度キャッシュがない、アイム・ソーリーと断り続け、最後にはあまりのしつこさに「本当じゃないんだってば！」と声を荒げてしまった。クレジットカードは使えるものの、キャッシュは段々底をついてくる。毎日いかにキャッシュを使わないか智恵を巡らしている私にはその時の五ドルは五〇〇円の数倍の重みがあったのだ。

カラフルなアフリカの民族衣装とターバンをまとった女性を通りの角にひとかたまりになっていてそこだけがアフリカ色に染められている。思わずカメラを向けて（OK？）とアイコンタクトを送ると、一ドルくれとアフリカのアクセントで言って人差し指を立てる。写真に一ドルとはまるで開発途上国のようなのだ。苦笑して私はカメラを下ろした。お金が惜しいのではなく、お金を渡す事によって写真への思い入れが壊れるような気がしたからだ。

この街では音も匂いも人々も、強烈な個性を発散していた。何かしら表現し、主張し、行動する事が生きている証のようだった。

一二五丁目をそぞろ流し歩く大勢の横にも縦にも大きい黒人に混じって、見る物、聞く物すべてが珍しく、何一つ見逃すまいと目を見開いて歩いている私は彼らの目にはいかにも場違いで異質に映っただろう。そこは異文化のカルドロン（大釜）、私は釜の中に放り込まれた異邦人だった。

（註1）ハーレムにはいわゆるアフリカ系アメリカ人の他にカリビアン系であるジャマイカ人やアフリカ人も多い。顔立ちや体格は同じでも話すとジャマイカの訛りがあるのでそれとわかる。コロンブスによって発見されたジャマイカはスペイン人の後にイギリス人が入植し、その後、さとうきびのプランテーションを支えるための労働力として、西アフリカから奴隷として連れてこられたアフリカ系の諸部族民が主な住民となった。たびたびの暴動の後に一八八三年に奴隷解放、一九六二年に独立している。二つの異なった目的地に定住する事になったアフリカ人、そして彼らの祖先であるアフリカ人が、再びハーレムで出会ったのである。

(註2) かつてはニッケル&ダイヤモンド(五、一〇セントストア)と呼ばれたバラエティストアも今はインフレで九九セントになっている。

(註3) 私には一九七一年の大ヒット曲「ホワッツ・ゴーイン・オン」の方がなつかしい。この曲にはベトナム反戦のメッセージがこめられている。(多くの母親達が泣いている／多くの兄弟達が死んでいる／何か道を見つけないといけない／今、愛を取り戻す必要がある)

(註4) ミュージシャンを目指す無名の彼らがどうやってたらブレイクするのか、ペンや五〇セント、ディディ、ルダクリスといったラッパーのようにメジャーになれるチャンスはどのくらいあるのか、私には音楽界のシステムはわからないが、LLクールJや五〇セントらはデモテープを作ってレコード会社に持ちこんだそうだ。今ではこうしてCDを制作して無料で配布するのがブレイクへの第一歩なのかもしれない。

一二五丁目の黒人露天商

一二五丁目にはおみやげグッズを売る露天商の面々に混じって、ちよつとコワモテの黒人がいる。

空きビルの塀いっぱいには黒人の虐待の歴史を物語る写真を飾り、通りを歩く黒人をにらみつけている。カラフルな通りでその一角だけが暗く沈んでいる。奴隷労働やジャズ歌手ビリー・ホリデーの「ストレンジ・フルーツ」で知られる黒人のリンチや去勢される凄惨な写真の数々を、立ち止まって見る黒人はあまりいない。語られなかった歴史、隠蔽された「黒人哀史」とでも呼ぶたい歴史をまとめたDVDを二〇ドルで売っているのだ。ソニースタイルやNBCショップで正規のDVDを買っても二〇ドル以下の時に随分とい値段だ。^(註)五ドルの違法DVDに慣れている黒人達はほとんど興味を示さない。

フィルムを駆使した七時間のドキュメンタリーの力作らしいが、私は私なりに黒人の歴史を大體把握しており、できればあまりに生々しいフィルムは見たくないのが本音なのだ。今回の取材目的は黒人の過去よりも現在に的を絞っており、目的からは外れるし、見れば大変落ち込む事は

確かなのでパスした。無料CDを配る女性もいる事だし、二〇ドルはいかにも高い。自分達の先祖の苦難を儲けのタネにしていると言われてもしょうがない値段である。

一二五丁目の露天商がきちんとした商品を買っている時に、ちょっと外れたエリアの露天商が中古のLPや本、ガラクタ類などを並べて売っていた。レノックス・アベニューの二三五丁目まで戻ったと思う。こういう方が私は俄然興味が湧く。滞在中は不必要な物は買わない事を鉄則にして生活しているのだが、同時にニューヨークでしか買えない物は買っておこうという気持ちもあり、ガラクタを見ると、お宝がないかという物色しようかという気になるのだ。この時は同時テロの写真集を見つけた。値段は四ドルぐらいで安かったが、見境なく買っていると帰国時にはとんでもない重量になり、結果として人にあげる羽目になる。四ドルの本を買おうか買うまいか迷っているところに、年配の黒人男性が寄って来て、並べられているジャズのLPのうんちくを語り始めた。延々と喋るだけで買う気配は見えない。それでも露天商はイヤな顔もせずのんびりと相づちを打っている。そのうち、私にともなく、露天商にともなく、昔話を語り始めた。

「あそこに美味しいサザン・フライドチキンの店があったなあ」とシャッターが降りたままの店を指差した。

「ペイデイの金曜日にはあのブロックは人であふれたものさ」

というそのブロックには無人のビルや閉店した店舗が目立つ。きっとそのうち白人の富裕層が入るコンドミニアムが建つに違いない。六〇代と思われるその男性は黒人文化やハーレムを熟知しているようで、いつまでも話を聞いていたかったがあいにく人との待ち合わせ時間が迫っていた。去る間に大きな黒いプラスチックのゴミ袋を持った二〇代後半の黒人男性がやって来た。何か売りに来たらしい。袋からパッケージに入った新品のCDプレーヤーを取り出して露天商と値段の値段を交渉を始めた。

この時、ちらつと目に入ったピカピカ光るCDプレーヤーが、私は無性に欲しくなった。帰国すれば不必要になるのになぜ買ったのか。多分ハーレムのショップで買ったR & BのCDを帰国前に聴いてみたいと思ったのだろう。一〇ドルで売ってくれるというので本代と一緒に一四ドルを支払おうとすると、良心的な店主で、「君にきちんと動く品物を買ってもらいたいからね」と乾電池を入れてスイッチを入れると、確かに音楽が聞こえて来た。

ところが、不思議な事に滞在先に戻って使おうとするとCDがスルスルと空回りしてピタッと止まってしまう。店主のせいではないがとんでもない粗悪品だったのだ。中国製である。電車の中で黒人が「安いよ、安いよ、一〇ドルのところがたったの二ドル」とデュラセルの一ダース入

りの単三の乾電池を売りに回って来た時には店で買うよりずっと安いのでデジタルカメラ用に二セット、四ドルを支払ってホクホクだったが、デジタルカメラに入れた途端、「ロー・バッテリー」という表示が出る。最初（そんなはずはない、新品なのだから）と何本か試してみたが、結局どれも全く使い物にならなかった。貴重なドルをドブに捨てたも同然で随分悔しい思いをした。それは見かけもデュラセルそっくりのまがい品だった。これも中国製だった。アメリカという先進国にこういう粗悪品が多いというのがどうにも理解しがたい。路上で買う時にはよほど注意しないといけない。

ハーレムのあちこちに出ている露天商の黒人男性は概してフレンドリーで、時折り「コニチワ」とか「サヨナラー」などと片言の日本語で遠くからでも声をかけてくる。黒人はとにかく屈託がない。言葉を交わしたって自分の商売のプラスになる訳でもないのにこうやって声をかけられるとひととき心が温かくなる。私は声の主の方向に日本式のお辞儀をしたり、「どうも」と日本語で答えたりした。ミッドタウンと違って摩天楼もなく、広々としたハーレムでは散歩感覚でのんびり歩けるので気持ちもほぐれ、露天商とのやり取りも異文化コミュニケーションのうちと楽しんだ。中国系のアメリカ人女性とハーレムを歩いていた時にも露天商の黒人が私達二人を見て日本語を発し、私が振り返ってにつこりすると彼女は「あんな事をされるとム

力つくわ (I hate that.)」と嫌悪感をあらわにした。私は (何であれ興味を持ってくれたのだからいいではないか) と思ったが「あら、そう?」と聞き流した。

彼女とはその日スターバックスの前で会った。コロンビア大学のジャーナリズムを専攻する大学院生でハーレム再開発のドキュメンタリー制作の下見に来ていたのだった。ニュースキャスターになるのが夢だと言っていた。私がニューヨークタイムズのキャップをかぶっているのを目ざとく見つけて「あなたはタイムズの記者?」と聞いてきたのだ。そうではない、と答えるとがっかりしたようだったが、取材という同じ目的がある事がわかり道連れになったのだった。小柄でキュートな雰囲気似合わず、彼女は非常にアグレッシブだった。二人で道々お互いの取材に向きそうな風景や人物を探しながらハーレムを歩き回ったが、遂に心は通じ合わなかった。私の、時にへり下るような、態度が卑屈に写ったのかもしれない。有名なソウルフード・レストランの「シルヴィアズ」の外で店のマネージャーに会えば自分の取材目的など詳しく告げずガンガン質問を浴びせる。知りたい事を単刀直入に切り出して取材を開始する。不動産屋があれば臆せずにズカズカと入って行つていきなり用件を切り出し、すぐに社長に取り次いでもらうといった風だった。英語が母国語だから躊躇しないという面もあるだろうが、欲しい物はぐっと手を突き出してもぎ取るタイプのようで、はつきり言つてあまり感心しなかった。道端でカップルに声をかけた時に

も女性の方は早く切り上げたい素振りがありあったが、一向に意に介せず、男性にいつまでも質問を続け、「時間を取らせてごめんなさい」と謝るなどの気遣いは一切なかった。それにしても露天商が声をかけるぐらいで「EYE」とは強すぎる表現だった。確かにニューヨークでは男性がしきりに声をかけて来る。知らん顔をしてもいいのだが無視すると今度はいきなり「ビッチ！」と不愉快な罵りが飛んでくる事もあるのでちよつと笑顔を見せたりサンキューと返事をしたりするのが段々わずらわしくなってくる。若くて魅力的な彼女も街で声をかけられるのにうんざりしていただけなのかもしれない。アイビーリーグの大学院に通うエリート意識かもしれないし、日本人に見られたのが屈辱的だったのかもしれない。それにしても、曲りなりにもハーレムに取材に来て、ハーレムでよくあるシーンに嫌悪感を感じる彼女に取ってハーレムとは、黒人とはどういう意味を持っているのだろうかと思つた。カリフォルニア生まれと言つていたから留学生ではない。多分裕福な家庭の出なのだろう。中国系アメリカ人と日本人、アジアのルーツを持つ事で、何か共通の興味があるかと思ひ、別れ際に「メールしてね」と言つと「ええ、また会いましょう」と答えたが、彼女からはそれきり何の連絡もなかった。

Cというラテン系のアメリカ人男性ともスタジオ・ミュージアムの前でよく話した。彼は無許可のタバコの売人だった。彼のような販売人はハーレムにもダウントウンにもたくさんいた

が、警官に逮捕される事もなく、週に五日出勤して来ては七ドルほどのタバコを四ドルで売っていた。彼のような売人に、きちんとしたタバコの卸屋が売ってくれるのだからアメリカという国は面白い。「ニューポート」ばかり売っていたので他のブランドは売らないのかと尋ねたら、売るけれどニューポートが一番売れるのだと言っていた。後で調べてみたら、アメリカのたばこ業界はメンソールタバコを白人と黒人両方に向けてマーケティングをしていたが、白人は四人に一人しか好まない時に七五%の黒人の喫煙者が好む事がわかったという。一番売れるニューポートの半分は黒人が消費している。十月のある午後、そぞろ寒風が吹きつける中、Cと話していると二人の日本人の男性が通りかかった。おしゃれできちんとした感じなので日本人ツーリストとわかる。すぐに話しかけるクセが出て「観光ですか？」と声をかけると、日本人の多くがそうするように胡散臭い眼差しを向け、ひょこんと首を前に突き出し、通り過ぎて行った。若い日本人男性とはそうしたもので私には気にならなかったが、それを見たCは「随分なデイスリスベクト（無礼）じゃないか」と憤慨していた。ハーレムは安全になったとは言え、安心してはいけなないとガイドブックには書かれているので通りで不思議な日本の中年女に声をかけられては面食らったに違いない。

(註1) 先祖の奴隷の過酷な歴史を直視しようという黒人は少ないのだそうだ。辛く長く苦しい時代など過ぎ去った、そんな歴史など忘れたくない、興味が無いという黒人が多いのだ。日本の学校でも、ちょうど第二次大戦の項を駆け足で済ませるように、黒人の歴史については「奴隷制がかつてありました」という程度でお茶を濁しているのだという。知りたくない、思い出したくない、見たくないという気持ちにはわかる。でも未来の為にはそんな歴史も知るべきなのか、かえって黒人の傷を広げるだけなのか、私にはわからない。一九九一年に奴隷としてNYに連れて来られたアフリカ人の共同墓地が発見され、昨年国定史跡に指定されている。そのウェブサイトには「未来を築く為に過去に戻る」と書かれてあるのだが。

(註2) Cはこんな話もしてくれた。「シナゴーグの礼拝で必要だからそれをひとつくれないか」と香油をタダでくれと信じられない事を平気で言う者がいるというのだ。礼拝の時間ではないのでその男が嘘を付いているのは見え見えだったという。可愛らしい男の子を連れた、ちょっと暗い顔をした父親が私に話しかけて来た時にも彼は私に向って(離れた方がいい)という目配せを送って来た。害がありそうには見えなかったが、子供がタレントのオーディションに行くのでカメラがどうか言っていたから私のカメラが目当てだったのだろうか。私に見えない事が彼らには見えるのだ。あるいは、人を疑ってはいけなと思う私と人は疑ってかかれというCの差なのかもしれない。

メトロカードを巡る暗黙の好意

ニューヨークで地下鉄に乗るにはかつてはトークン（代用硬貨）をターンステイル（回転式改札口）に入れてゴツイ鉄製の回転棒を腰でぐいと押して入ったものだ。一九九八年に訪れた時にはメトロカードというプリペイドカードとトークン^{（註）}が併用されていたが、今ではメトロカードに取って変わられている。かつて五〇セントで買えたトークンは現役を引退して交通博物館でヴィンテージ・トークンとして高く売られている。

ロッターリー（宝くじ）に当選した警官役のニコラス・ケイジとウェイトレス役のブリジット・フォンドガ、地下鉄の入り口でこのトークンに乗客にタダで配って喜ばれるシーンが「あなたに降る夢（It Could Happen to You）」に出てくる。実話に基づくこの映画のプロモーションで来日し、記者会見で「大金が当たったらどうしますか」と聞かれ、「あなたにあげます（I'll give it to you.）」と冗談で返したところ、その記者はニューヨークとわからずポカンとしていた。

ニューヨークの地下鉄の乗車賃は現在二ドルである。ニューヨークに行けば一か月以上は滞在

するので三〇日用乗り放題のアンリミテッド（無制限）というメトロカードをいつも購入する。数年前までは非常に得だったが、どんどん値上りして現在は七六ドル、ヘビーユーザーにはまだまだ得ではあるが、週五日通勤のオフィスワーカーにはさほど得ではない料金設定である。

ハーレムの小さな地下鉄駅で降りて、改札口の外で手持ち無沙汰で立ちつくしている若い二人の黒人を見た時には、多分、誰かがメトロカードで中に入れてくれるのを待っているのだろうと見当が付いた。「何をしているんですか？」と一応尋ねてみると、やはり「中に入りたいんだ」と答える。二ドルくれるか、カードで入れてくれる人を無言で待っているのだった。たった２ドルの持ち合わせがないのか、それとも節約したいのか、一体どのぐらいの時間待つつもりなのか、気の長い話である。同情したが切符売りのブースには黒人男性の従業員がいる。自分が買ったメトロカードをどう使おうというかなものだと思うのだが、アンリミテッドのカードを自分以外の為に使うのは禁止されていると聞いていたので「通してあげたいけど、従業員がいるから」と言って立ち去りかけた。すると「何も言われないよ」とボソリと言う。黒人同士の仲間意識なのだろうか。本当に大丈夫だろうかと思いつながらカードを改札口に通して一人を入れてあげた。もう一人は通せない。不正利用を防ぐ為、同じ駅や同じバスでは一度使うと一八分間使用できないようになっていたのだ。構内に入った男性は「じゃあ」と連れに言い残して去って行ってしまった。

こういう黒人は滞在中に数人見かけた。不況の時代には、軽々と改札口を乗り越えて行く「ターンシル・ジャンパー」や、通用口の鉄柵が開いていれば黙って入って行ったりする者もいたが、アンリミテッドのカードが出来てからは、声をかけて頼まなくとも、待つていれば入れてくれる人がいるらしい。私がある駅で人を待つていた時には「入れないの？ カードで入れてあげようか」と親切に言うてくれる人がいたぐらいだから、ニューヨークにはメトロカードを巡る暗黙の好意のやり取りがあるのかもしれない。初めは不思議に思ったが、黒人には既存の体制や大企業などのエスタブリッシュメント（支配者層）に対する信頼感や忠誠心を白人ほど強く持つてはいない者もいるし、生活の為、「ビート・ザ・システム」と言つて何とか支配体制の抜け穴を見つけないとするとところがある。ハーレムは殊にも黒人同士の連帯感が強い場所である。誰も何も見ない、誰も何も言わないのは当然かも知れなかった。今にして思うと、カタイ事言うなよ、同じ貧しい同士助け合おうじゃないか、という弱者同士の助け合いの精神だったのだと思う。

この時の経験をハーレムに住む知人女性に話すと、「そんな事したら危ないよ！ 何か盗られなかった？」と心配してくれた。彼女は非常に警戒心が強い。私のハンドバッグが半分開いていると「きちんと閉めないといけないよ」と注意するし、ちよつと心配のし過ぎではないかと思つたが、

このアドバイス^(註2)が後に大変役に立つ事になった。

メトロカードは金券であり、スイカのようにチャージも出来るが、面倒なのか、一回で用済みになって捨てられたカードが地下鉄駅付近に散乱している。そのカードを拾って、残高がチェックできる機械に通している者もいる。たまには残高が残っているカードに当る事もあるのだらう。一度、地下鉄のプラットフォームで私の先を歩いている女性がヒラリとメトロカードを落とした。急いでいた私は、きつと使用済みのカードだろうと拾わなかったが、隣にいた男性が「落とししましたよ」と親切にその女性にカードを渡したところ「あら、どうもありがとう」と感謝の笑顔を浮かべていた。まだ残高のあるカードだったのだ。そのカードは、彼が拾わなかったら、後で気づいて探しに戻ってもたくさん落ちているカードに紛れてどれがどれだかわからなかっただらう。親切なニューヨークカーもいるものだと感じ、自分の不親切さを反省した。一見すると残高があるのかどうかかわからないメトロカードは保管に注意を払わないと、間違って残高のない方を手元に残し、ある方を捨ててしまったりする事がある。

詐欺行為もある。メトロカードを機械に通す（スワイプ）には少々コツがあり、ツーリストなどはうまく通せなくて何度もやり直し、その度にピーピーと音が鳴り響くのだが、そうした人に

近づいて行って、代わりにやってあげましようとか親切に言ってくれる者の中には、自分の一回限りのカードと、ツーリストが持っている確率の高い複数回以上のカードをさっとすり換える詐欺師（コン・マン）がいるそうだ。学校から支給される無料のカードを使ってちゃっかり一回一ドルのアルバイトをして警官につかまる子供もいるという。

少なくともハーレムでは地下鉄の黒人の従業員はメトロカードの不正使用は見て見ぬふりをするのであったので、貧しそうな身なりの男性が改札口の脇に立っていた時に中に通してあげると、眉間に深いシワを刻んだ彼は“Thank you, lady, God bless you.”（どうもありがとう、神のご加護を）と必要以上の感謝の言葉を残して駅の乗降客の中に紛れて消えて行った。こういう名もない黒人と袖がすりあう度、私は彼らのライフストーリーをじっくりと聞いてみたい衝動に駆られるのだった。

（註1）面白い事に日本の五円玉大のトークンではなく、かなり前に流通していた小さい玉が使えたのだ。多分一個四〇セントぐらいの当時の物ではないだろうか。使えないし、珍しいので持っていたのをどうせ使えないだろうからとふざけて入れてみたらスルリと改札を通れたのでかえってびつくりした。トークンは今や「ビンテージトークン」に地位が上がり、交通博物館で高く売っている。

二〇〇四年十二月六日付の「デイリーニュース」には「生涯アンリミテッド」のメトロカードがあると書かれている。「MTAs Freebies Last Forever (ニューヨーク交通局の永久タダ乗り券)」という記事によると、ニューヨークには夢でしかない生涯無料のメトロカードとE・Zパスが、元MTAの役員三人に与えられていて、保持者の中には数一〇年も前に退任した弁護士ジャスティン・フェルドマン氏のような人もいる。最も長い利用者である彼は一九七九年に契約期間が終了、当時の地下鉄料金は五〇セントだったしE・Zパスもなかった。保持者はいくら地下鉄や橋やトンネルの通行料が上がり続けても一〇セントすら払わずに利用できるのだ。また多くの者が通勤列車のパスも持っているという。少なくとも現在と過去の役員五六人が何かしらのフリーパスを持っていて、その中にはMTAの億万長者のピーター・カリコウ議長も含まれている。役員には給与はなく一日一〇〇ドルから一五〇ドルの謝礼が支払われるだけだから、それぐらいの特典はいいのではないかと、生涯無料というのは見直した方がいいのではないか、などの意見が当事者間にあるそうだが、私のような「バジェット・ツーリスト(予算に限りのあるツーリスト)」には羨ましいのを通り越して恨めしい限りである。値上げやサービスカットに常に悩まされるニューヨークにしても思いは同じだろう。

(註2) タイムズ・スクエア駅で抱き付きスリのような男性にまとりつかれた。彼は大変親切そうで、

ちよつとぶつかっただけなのに何度も謝る。あまりに近くに寄るので私は「大丈夫です、構いません」と離れたのだが、彼は遠くからも笑顔で手を振っていた。ハツと思い、バッグを見るとキチンと閉じており、中の物は無事だった。彼が善意の人だったのか、それともスリだったのかいまだにわからない。

ハーレムのネイバーフッド（ご近所）バー

ネイバーフッドバーとは近所のバーで、誰もが誰もを知っているというフレンドリーさが売りである。

黒人は概してフレンドリーなのは知っているし、私はブラックミュージックが好きで黒人の友人がいるからハーレムのバーでもどこでも一人で入って行くのだが、あまり歓迎されない事がある。そういう時、私は誰でもいいから話しかける事になっている。

その時もそうだった。ハーレムには日本の盛り場のようにたくさんの飲食店が居並ぶ地区はない。夕刻になると高層ビルもなく、ミッドタウンやダウンタウンに比べればうすぼんやりと暗い。あちこちのバーやレストランに明かりが入ると昼には何の変哲もない場所が特別な魅力を放ち始める。

どのバーに入ったものかと一三五丁目の地下鉄駅から降りてすぐの明るいネオンの点いたバー

はどうかと若い黒人女性に聞いてみると「ああ、あれはフッド・ラッツ・バー（近所のしようもない連中の行くバー）よ」と止めたのだが、そういうバーもいいかもしれないと思って入ってみた。客は全員黒人の中年男女でジュークボックスから流れる六〇年代のR & Bに合わせて歌っている男性がいた。とりあえず彼の隣に座った。六〇代ぐらいの黒人女性のバーメイドは後で聞くとオーナーだそうで、ニコリともしない。しばらく無視された後でようやく注文を取りに来た。

「ビールはいくら？」「どのビール？」「どんなビールがあるの？」「どんなビールがいいか言つてごらん」とこんにやく問答を続けてようやくコロナが四ドルだと聞きだした。クアーズライトが三ドル二五セントと格安で、日本のような突き出し代などは一切ない。この安さがこの店のセールスポイントだった。取り合えず隣の男性を取っ掛かりにしてやがて誰彼となく話し始めたのだったが、最後まで女性のオーナーはこの東洋の女はなぜここに来るのだらうと言いたげで歓迎されていないようだった。後日この話を近所の男性に話すと「彼女は僕にも冷たいよ」と言うのでそれが彼女のパーソナリティだったのかもしれない。

「ゲトー・ラブ (Ghetto love)」

アダム・クレイトン・パウエル・ジュニア通りに「Pris」というバーがあった。ハーレムではあまりバーが見当たらないので昼によく前を通り過ぎ、いつか入ってみたいと思っていた。

ようやく夜に通りかかったので入ってみたら、常連らしい客の帰り際に、黒人のバーテンが腕を上げ、ゲットー・ラブ！と言ってお互いの手をからませた。どこかおどけた調子だった。

（ゲットーの愛？）

この言葉にどんな意味があるのか、黒人の事は黒人に聞けばすべてわかるかと思って、資料を読み通っていたショーンバーグの真面目そうな黒人の男性司書に尋ねると「アイ・ドン・ノー」と首を振る。もしかしたら知っていたのかもしれないが（変な事を聞くなあ）と答えたくなかったのかもしれない。

ハーレムはもうゲットーではないはずだが、とずっと気になっていたが、ハーレムに住むフォトグラフィアのセシルさんに聞いてみると「ゲットーはあなたをエンブレイスする、愛する、受け入れる」という意味だと一発で答えてくれた。「司書に聞いたってわからないさ！ワル (thug)」

に聞かないとね」と笑った。

明るい時間にこの店のオーナーに一度会っていた。ミーハーにも「有名人は来ますか」と聞くと、「フレディが来るよ」とあっさり言った。「フレディって、フレディ・ジャクソン？」と聞くと、「ああ、ふらっとやって来るよ、クラブに行く前に」と事もなげに言う。ハーレムがゲトだったとしても、それはやっぱり黒人文化をエンブレイスする特別なゲトーなのだ。

かつてはよくバーやディスコ、クラブに出入りした私も滞在先がクイーンズでは夜中の三時や四時までは遊べない。ダイエット中でありアルコールを飲みたくない、お金もない、短期のツーリストで常連になる時間がない私にはネイバーフッドバーは手の届かない存在である。体力的な限界もあり、二〇〇六年に入ったハーレムのバーはこの二軒きりである。

タクシーと観光バス

ミッドタウンにあつてハーレムで見かけないものが観光バスとタクシーとである。ハーレムと観光という言葉は私に取つてはオキシモロン（矛盾）も同然だった。かつてはタクシーも寄り付かず、ハーレムに行きたくない運転手は黒人の乗車拒否をするとよく聞かされたし、ニュースにもなっている。もつともハーレムに住む友人によると「この五、六年は結構走っているよ」と言うのだが私はあの目立つ黄色いタクシーを見た記憶がない。また、5番街に多いペディキャブと呼ばれる人力車の姿も見当たらず、さつそうと街を駆け抜けるバイクメッセンジャーの姿もない。スーツ姿のビジネスマンもいなければホットドッグやエスニックフードを売る屋台もあまり見かけない。

その代わり、ハーレムには白タクがいる。黒人の中でアジア人は目立つので、地理がわからずウロウロしている私のそばに黒人が運転する白タクがよく寄つて来た。白タクと言えば高料金で悪名高い。観光客を狙った詐欺かとも警戒したが、通行人に聞くと「ボッタクリはしないよ」という事だった。乗ってみれば案外思いがけない発見があつたかもしれない。

ところが、帰国後、ニューヨークタクシー&リムジン委員会（TLC）に問い合わせたところ、私が見かけたのは白タクではなくハイヤー（For-Hire Vehicles）なのだそうだ。ニューヨークの五つのどの区でも走っているのだが、イエローキャブは実入りの良いマンハッタンに集中する傾向があり、ないところでより普及している。

Tで始まりCで終わるTLCのライセンスプレートを付けていて、色は黄色以外なら何色でも良いとされている。実際には黒や紺が多いらしい。運転手にはアイボリーコースト、ギニア、マリなどの出身者、ドミニカンなどの黒人が多い。レートはタクシーが一律の時にハイヤーは各々の料金設定をしている。料金メーターが付いてないので、最初はちよつと不安になるが、高くないというのは本当らしい。ハーレムからミッドタウンまでタクシーなら二〇ドル以上かかり、これに一五%ほどのチップが付くが、ハイヤーだと一〇ドル程度、しかもチップはオプションであつて、運転手が要求したり、支払いを暗に要求するのも規則違反だというから一〇ドルぼつきり。激安である。ただ、ハイヤーは通りで手を挙げる客を乗せる事は許可されていず、派遣のみだというから実際に客を拾っているのであれば違法だが、誰も何も言わないようだ。

(註1) ニューヨーク・タイムズ社の黒人記者カルビン・シムズ (Calvin Sims) は、黒人はタクシーをつかまえるににくいというのは本当だと書いている。

ハーレムは「ラストフロンティア」

ニューヨークを訪れるたびに頭痛のタネとなるのが宿泊代である。日本のアパートの家賃の支払いもあり、居住費がダブルでかかるのでなおさらである。

一九七〇年代に住んでいたロウアー・イーストサイドの古いアパートの2DKの家賃は一二五ドルだった。週給一週間分を家賃に充てるといいと言われていて、当時の秘書としての収入が月五〇〇ドルほどだったからぴたり1週分である。そんな古い話をするとニューヨーク人は笑う。^(註)現在そんな安いアパートなどマンハッタン中どこを探してもないからだ。

一九八〇年代後半までは週四五ドルほどの安ホテルを利用したり、友人宅に居候をしたり、二〇〇一年には日本人のルームメイトを探して何とかマンハッタンに踏みとどまった。帰国してすぐ九一ーが起こった。私はCNでニューヨークの変わり果てた映像を食い入るように見つけた。いても立つてもいられず、何とかして早くニューヨークに「戻りたい」と思い始めたのだった。

九一一後は特に日本人観光客の落ち込みがひどく、日本人相手の小さな宿泊施設はガラガラで、切羽詰まって激安料金を打ち出した。私が問い合わせのメールを出したアパートメント形式のホテルからは、割引をしますから来てください、とわざわざオーナーから国際電話が入った。二〇〇二年の一月にそこに一週間二〇〇ドルほど泊れたのは九一一直後だったからである。今ではそこも一泊一〇〇ドル以上する。この時のニューヨークはすべてが安かった。粉塵による健康問題とセキュリティに難があるダウンタウンのバッテリー・シティ付近の高級マンションの家賃が一時的に大幅に下がりして、高いマンハッタンから安いニュージャージーへの転出組がまたマンハッタンに戻って来たという記事がNYタイムズに出ていた。私の知り合いもミッドタウンからダウンタウンに引っ越している。

ニューヨークの観光業界もビジネスも大打撃を受け、デパートや小売店は五〇%引き、七五%引きなどの信じられない大セールを行っていた。この時の一週間の旅では一〇万円でホテル代、航空運賃、食費、交通費に多少のショッピング代と遊興費が出た。JTBは二〇〇一年十一月から十二月にかけて、三泊五日二万円という前代未聞のツアーを二〇〇組四〇〇名限定で売り出している。ただし現地のツアーガイドの話では二〇〇組は来なかったという。それはそうだろう、売れば売るほど赤字になるのだから。

やがて九一一の痛手から立ち直り始めたマンハッタンの住宅と店舗の家賃は上昇に転じる。

マンハッタンに滞在できたのはこの時が最後、二〇〇三年からは遂に「都落ち」してブルックリンやクイーンズに滞在するしかなかった。共同トイレ、共同キッチンのクイーンズの六畳ほどの部屋はそれでも月五〇〇ドル以上する。

ニューヨーク市にはマンハッタンの他、ブロンクスやブルックリン、クイーンズ、ステテン・アイランドなどの行政区があり、約八二〇万人が暮らしているが、貧困層が住めるのはマンハッタンではもうハーレムしかない。ハーレムで出会った作曲家の中国人女性ハレームの音楽的環境が好きで住んでいるのかと思ったら、「家賃が安いから」という単純な理由からだった。

ハーレムはマンハッタンの「ラスト・フロンティア」である。アメリカ人が西へ西へと開拓を進めて行ったのと同じように、いったん開発から撤退したハーレムへ、企業も人々も最後の甘い汁を求めてなだれ込み、劇的に生まれ変わっている。バブル^{第2}、バブルと数年前から騒がれて、高層ビルのないハーレムに高級高層分譲マンション（コンドミニアム）やホテルが続々と建ち、ピカピカの新築ビルと歴史的な価値のあるブラウンストーン（石造りの高級タウンハウス）や、焼

け焦げて無人のままの三階建てのビルが共存している。このまま野放しにしておけば高層ビルのないハーレムの歴史的景観が失われると住民が反対運動を起こして高さ制限が設けられるようになった。

地下一階、地上三階建てのブラウンストーンを丸ごと所有しているのが、さほど裕福とも思えないキルト作家の女性だった。母親がはるか昔に数千ドルという、今となつてはタダ同然の値段でビルを買ったという葬儀社を営む中年男性はそのビルを最近一億円以上で売却したといとも簡単に言う。こうした不動産売却によるインスタント・ミリオネーヤーはさほど珍しくはない。

一三八丁目と一三九丁目の7番街と8番街の間の通りは「ストライバーズ・ロウ」と呼ばれ、歴史的に大變価値のある通りなのだが、七〇年代にその一角の荒れ果てたビルを四万ドル（約四〇〇万円）で買ったランディ・デュプリー氏は妻に「そんな大金をボロボロの家に支払うなんて!」と呆れられたと笑う。地下室にはボイラーを設置し、二階と三階の部屋を仕切っていた壁を取り去り、美しい彫り模様の入った木製部分にベタベタと塗られた赤や青のペンキを根気良く剥がし、今では本来の美しい姿を取り戻し、インテリア雑誌として権威のある「アーキテクチュアル・ダイジェスト」誌に取上げられたほどである。現在の不動産価値は二億円は下らないという。

荒れたビルがそんなバブルの「お伽話」となるなどと当時の誰が想像しただろう。ブラウンストーンの価格高騰に関する特集記事も度々報じられ、二億円の値が付くのはザラで、白人富裕層も流入し始めている。二〇〇〇年の国勢調査ではハーレムの人口が三〇〇〇人増えて一〇万六千人いる中で白人人口は二%。一九九〇年の一・五%からアップしている。

二〇〇七年十月六日にハーレムでガス洩れが原因で二〇人以上が負傷するという爆発事故があったのだが、ニューヨーク・タイムズ電子版の記事中、事故の起きたワンベッドルーム（二寝室・日本式だと2K又は2DK）の家賃が五九五ドルとあった。私はこの金額に目を剥いた。こんな値段のワンベッドルームは今のマンハッタンでは聞いた事がないからだ。イエメンから来たばかりの移民家族が住んでいたこの部屋はセントラルパークの北端を一九丁目まで北上し、マールカス・ガーベイ・メモリアル・パークの下方、5番街とレノックス・アベニューの間にある五階建ての建物にある（一一九丁目西一〇番地）。写真を見るとミッドタウンやダウンタウンにあるのと変わらない外観で、場所がハーレムでなければ一五〇〇ドルは下らない物件である。ここにはまだ開発の手が伸びていなかったものと見える。ハーレムを歩けば、中心部のミッドタウンに比べればまだまだ全体に寂れたムードが漂っているのがわかる。取り壊し中のビルもあれば、火事で部屋の内部が真っ黒に焼け焦げたビルには無造作にベニヤ板が打ち付けられている。廃屋のよ

うなビルもある。ハーレム全体としては家賃がうなぎ上りに上がっている一方で、探せばまだ激安物件のあるところがハーレムが「ラスト・フロンティア」たるゆえんである。低所得者層向けの公営住宅（プロジェクト）もあれば、レント・コントロール（家賃の上昇規制）のビルもある。そこに昔から住んでいる住人の家賃は耳を疑うほど安い。

ハーレムの不況時代からの一部屋を小さく仕切って家賃を安くするという方法もまだ生きているようだ。レノックス・アベニューの西側を一二五丁目から上がって行くと小さなスーパーがあり、いつもこの前にハンダアウト（たむろ）している中高年の男女がいた。実年齢より老けて見えるのは栄養が悪いせいかもしれない。ジョンソンという黒人はちよつと見には五〇代に見えるのだが、よくよく見ると四〇代らしかった。彼は三畳ほどの狭い部屋に月二〇〇ドルちよつとで住んでいると言っていた。アメリカに三畳などという狭い部屋はまず存在しないから、これも仕切った部屋だと推測できる。

「開発途上」のハーレムの住宅事情は複雑に入り組んでいて一律に安いとは言えないのだが、それでもミッドタウンに比べれば激安と言わなければいけない。ハーレムにも住めなくなれば後は更に北上してブロンクスに住むか、生活費の安い南部にでもに引越すしかない。実際、ソーシャ

ル・セキユリティ（社会保障）を貰ってジョージア、ノース、サウスカロライナなどの黒人の人口の多い州に移り住む者は多い。ジョンソンと一緒にいたヒューという初老の男性も、初めて会ってから約一か月後にジョージア州に引越して行った。

（註１）現在この辺りのアパートは最低一五〇〇百ドルはする。

（註２）アメリカの住宅バブルで一攫千金を手にした人も多い。私の友人もブルックリンのパークスロープのコープを９年前に三千万円相当で買って四年前に四七〇〇万円ほどで売り抜け、西海岸に引越していった。ニューヨークに滞在した七年間の家賃がチャラになっただけでなく、およそ一七〇〇万円の利益を得た事になる。そのバブルも終焉しつつあるという。住宅業界の景気は徐々に悪くなるとの見方が強い。

（註３）マークス・ガーベイ（Marcus Mosiah Garvey 一八八七年～一九四〇年）黒人民族主義の指導者。アフリカ回帰運動の提案者として知られている。ジャマイカの国民的英雄。

ハーレムのレコード店

NYタイムズ・オンライン版（二〇〇七年）にハーレムの二軒の店が店を明け渡すよう大家に通告されたという記事がある。一九四六年にオープンした「ボビーズ・ハッピーハウス（Bobby's Happy House）」は一月二十八日、「ハーレム・レコードシャック（Harlem Record Shack、以下シャック）」は三月末日までという期限が切られている。（ああ、あの店か）と私は一二五丁目の南側にある、うっかりすると見過ごしてしまうほど門口の狭い店構えを思い出した。シャックの立ち退きについては以前も取上げられていたので、ひそかに憂いてはいたのだが、ハーレムの商業価値が急激に増したので仕方がないのだろうという気がしていた。アメリカでは賃貸契約切れによる店じまいも多く、「賃貸契約終了につき閉店（Losing a lease: going out of business）」という貼り紙をたまに見かけるのだ。

物件の持ち主が市場価格に見合った新家賃を設定するのは当然で、小さいビジネスのオーナーや貧困層はほとんどマンハッタンから押し出されてゆく。かつては「最も貧しい人々の避難所のひとつ」だったハーレムにも一億円以上で売買される建物が増え、商業ビルの家賃も三倍に上昇し、ハー

レムから南部やブロンクスに引越す者などが既に出始めている。シャックのオーナーであるシクル・シャンジ氏（六六歳）は現在四五〇〇ドルの家賃を支払っているとあるが、立ち退き後の家賃は二万ドルは下らないだろう。六〇年代に南アフリカから移住してきてここで三六年ビジネスをしてきて「皆がハーレムから逃げ出した時期にも我々は踏みとどまって黒人文化を守った」と誇らしげに言う彼も、ここ数年の近隣の変化には目を見張るばかり。二軒の店の数ブロック以内には二以上の工事現場があり、その中には一九階建てのホテルやオフィスビル、豪華なマンションなどが建築中だとある。シャックでは九〇年代にも立ち退き騒ぎがあり、その時には八〇〇〇人の署名が集まったというが、発砲と放火事件に発展し八人が死亡するという惨事を招いている。この事件は図書館で調べ物をしている時に見つけ、一見平和に見えるハーレムにもこうした暗い歴史が隠されているのだと改めて知った。大家への抗議集会参加の呼びかけの紙には「歴史的なブラック・コミュニティを我々の手に取り戻し、保存し、守ろう」と書かれているとあるがハーレムの先行きは黒人住民にとっては厳しい。今年の八月にはこの店がどうなったのか、建設中のビルの現在はどうなのか、不在の二年間のハーレムの変化を検証してみようと思っている。

ハーレムの歴史に詳しいシャンジ氏から話を聞こうとして二〇〇六年のある日の午後一二五丁目の彼の店を探した時にはちよつとした「事件」があつた。

この店の名前をハーレムのチラシ配りのロナルドから聞いた時に、私は自分の知っている電化製品ディスカウント・チェーンの「ラジオ・シャック」だと勘違いし、バスの中からこの店を見て場所を知っていたので迷わずそこに入ってシャンジ氏に会いたい、と従業員に告げたところ、そういう人はいない、ここはレコード・シャックではない、と言われて初めて自分の勘違いに気付いたのだ。そう言えばロナルドが「アポロ劇場の向い」と言っていたのを思い出し、店を出てアポロの向い側の一二五丁目を歩いてみたが見つからない。ずっとスタジオ・ミュージアムの方まで行って、顔見知りの露天商にこれからまたこの店に行くところだと話していると、背が高く、目付きの険しい頬のこけた黒人男性が寄って来て「僕が案内してあげる」と言う。一軒一軒よく見れば見つかるのは確かだったので「大丈夫だから」と断ったのだが、さっさと先に立って歩き始めた。この時私はこの男性が露天商の知人だと思っていたのだが、後で聞くと全く関係がない事がわかった。何となくイヤな感じがしたので、道々、自分が全くのおのぼりさんでない事を知らせておく必要があるだろうと危険回避のディフェンス・メカニズムが働き、さっきの露天商とは顔見知りである、今日はいなかったが、カルロスというタバコ売りの男性とは友人である、と話すと、いきなり「タバコは吸うのか」と聞いてくる。「タバコは吸わない」と言うのと、「だったらいい物がある」とズンズン先導する。ますますイヤな感じだ。「もういいから」と彼の「好意」

は断りたかったのだが、彼のペースで事態が展開している時にあまり強く拒絶するのもいい考えだとは思われない。このまま何とか店まで行つてぶつちぎるしかないだろうと思つてみると、一人の男性を紹介された。すると彼はマリファナのダイムバッグ（一〇ドルの子袋）を手渡すのだ。二人とも私が一〇ドル札を取り出すのを期待してじっと私を見つめている。この場を逃れるにはお金を渡すしかない。一〇ドルを受け取った二人目の男性は「いつでも来な」とニヤリと笑つて離れて行つた。こちらは笑顔の人の良さそうな三〇代の男性だった。（これがハーレムのプッシュャーか）と気が抜けた。

「レコード・シャック」に着けば目付きの悪い方の男性も離れて行つてくれるだろうと思つたが甘かつた。彼はツーリストの私を店まで案内して小銭を稼ぐのが目的だったのだ。店に着いて「どうもありがとう」と言つてシャンジ氏と話し始めてもずっと店内にいた。シャンジ氏は大柄で物静かな感じのアフリカ人男性だった。時差のあるアフリカに電話をする忙しい時間帯なので別の時間に来て欲しいと言われ、果たせないでしまった。

店を出て「友達に会いに行くから」とそれとなくわかるように言つても男は付いて来る。アポロ劇場の前で友人のロナルドを見つけた時には暗い道で灯りを見た時のようにホツとした。「彼

は友達よ。本当にどうもありがとう」とまた礼を繰り返すと、ようやく本来の目的であるお金の事を切り出した。

「お金が必要なんだ、ア・フュー・ボックス（二、三ドル）もらえないだろうか」

ロナルドは事情がよくわかつているようだったが、大人しい彼は困ったような顔をしているだけで救いの手は差し伸べてくれない。彼が助けてくれないなら自分で解決しなくてはいけない。切り詰めた生活をしている私にはア・フュー・ボックスは痛かった。頼みもしないのに先導されてマリファナまで売り付けられた上にお金を支払うのは主義に反したが、お金を渡さない事には離れて行ってくれないようなので札入れではなく小銭入れを出し、ありったけの硬貨を彼に手渡した。一ドルちよつとあったのではないだろうか。やはり最初の時点で「大丈夫だから」と断った方が良かったのだが、一ドルちよつと支払ってハーレムの素顔を垣間見られたのは大きな「収穫」だったと今は思う。

（出典）In Harlem, 2 Record Stores Go the Way of the Vinyl

（ハーレムで二軒のレコード店がレコードと同じ運命を辿る／二〇〇八年一月二十一日付）

ハーレムの光と陰

七〇年代のハーレムを車で通り過ぎた事がある。荒涼として廃墟のようなビルが並び、年配の洋服も顔付きもくたびれた黒人達がアパートの入り口の階段（ストウプ）や、道路に持ち出したイスに腰掛け、往來の車や通行人を無表情に眺めていた。ストリートウォッチングがお金のかからない趣味のようでもあった。繁華街（今思うと一二五丁目）には黒人の姿しかなかった。白人はおろかアジア人すら見かけない。他人種に恐れられる場所でも彼らに取っては生活の場なのだ。他人種の差の不思議さを感じた。老いも若きも通りを眺める男性達の姿は現在のハーレムでも見かける光景である。彼らの顔には生活苦や精神的荒廃の影を見ることが出来る。シャッターが降りたままの店も多く、さびれた情景の中に他人種が入れなかった時代がしのばれる。

ハーレムに限らず、黒人の生活や文化については日本のメディアに取上げられる事はほとんどなかったのが、二〇〇六年には日本にもアメリカのような格差社会が到来するというメディアの記事に関連付けてハーレムがよく取上げられた。日本ではハーレムは格差社会の象徴、貧困層の住む地区として取り上げられる事が多く、私の頭の中にもハーレム・イコール・ゲットー、スラム

というイメージがこびり付いて離れなかったのだが、実際に訪れてみて、貧困の兆しを探そうとして東西南北に行き来してみてもそんな様子は全く見当たらない。こぎれいな店が並び、「見える貧困」であるホームレスもない。一度だけ、一二五丁目のバス停で、歯の悪い初老の黒人女性に寄って来て小銭を渡したきりである。ハーレムにホームレスが見当たらないのは好景気のせいで数が減っているのかと思うたらそうではなく、貧困層が多く実入りが少ないのでミッドタウンを根城にしているのだそうだ。

ニューヨークのセントピーターズ・チャーチ前にいたホームレスのマイケルさんと十月に話した時にはシェルターでは意地悪をされたり、物を盗まれたりするから行きたくないと言っていた。夏はまだいいが、^(註1)厳寒のニューヨークは一体どうやって乗り切るのだろう。

生活保護を受けて日がな一日ストリートウォッチングをするような人もいれば、日々のサバイバルを賭けてタフに、時にラフに生きている者もある。その中には必ずしも「正直なビジネス（オネスト・ビジネス）」を営む者ばかりではなく、詐欺的行為を行なったり、盗品をさばいたり、麻薬を売りさばく事で生きのびている者もある。小さい子供も立派な稼ぎ手である。アポロ劇場前に、ショーを見に来た人々の長い列が出来た時には七歳ぐらいの黒人の男の子がキャンディ

バーを1ドルで買ってくれないかと一人一人に声をかけていた。ドラッグストアで買えば七五セント程度。スーパ―ならもっと安い。それでも買っている大人がちらほらいた。また、地下鉄の車両内でキャンディバーを売り歩いている一〇歳ぐらいの子もいた。話をしてみようと思ったのだが、すぐに降りてしまった。富裕層の多いアップ・ウエストサイドでは、道端に座り込み、「両親は病気で働けません。食べる物がありません」と手書きした紙を置いて物乞いをしていた黒人少年を見かけた時には胸が詰まって僅かだがお金を差し出した。もしかしたらただの小遣い稼いだったのかもしれないが、生き馬の目を抜く(dog eat dog)サバイバルレースを強いられるニューヨークで、黒人は子供の頃から生存術を学んで行くのだなあとと思い知らされる。こうした事をするのは見かける限り黒人少年のみである。彼らを見かける度に不憫に思い、そして貧富の差のあまりに激しいアメリカの理不尽さを思う。

(註1) 市のホームレスサービス課によるとここ数年公園や通りに寝るホームレスは少なくなっているというが、ミッドタウンの教会付近などに真昼間に長々と寝そべる黒人ホームレスの姿が見られる。ニューヨークのホームレスの中には5番街やタイムズ・スクエアなど、人出の多い地域を回って物乞いをし、一日に一〇〇ドルぐらい稼ぐ者がいるという。ハーレムからミッドタウンまで電車通勤する似非ホームレス女性の記事がNYタイムズに載っていたが「あんなのは大袈裟な記事だ」と言

う黒人もいた。ポートオーソリティ（バスターミナル）脇には一〇人ほどのホームレスが崩れるように座って、ある者は小便を垂れ流していた。かつてバワリー街で見慣れた光景である。一時ほどではないがクラックやコカイン、ヘロインなどのドラッグに走り、脳障害から口調がスローになったり、肝臓障害を起こす者もいる。骨にも問題が出るそうで、そう言えば、ホームレスには歯の抜け落ちたままの者が多くいた。歯に異常に気を使うアメリカ人には珍しい事だ。

危険なハーレム

ニューヨークは確かに信じられないぐらい安全になった。ニューヨーク市警察（NYPD）のウェブサイトの犯罪統計を見てもそれは明らかである。二〇〇八年に入ってから五月十八日までの市全体の強姦、強盗、傷害、重窃盗などを合わせた犯罪件数は四万六一七件と、昨年よりわずかながら減っている。殺人事件は一七八件で一九九〇年の二二六二件から劇的に減っている。

一九九八年の六二九件より更に少ない。が、マンハッタンのミッドタウン北署の殺人件数が一件の時にハーレムのあるマンハッタン北署では一七件も発生している。ニューヨークの新聞には毎日エリア別の犯罪数が載るが一番多いのは「アップパー・ウエストサイド」である。私も一ヶ月間だけ滞在した事があるこの地区は映画「ユー・ガット・メール」の舞台にもなったシックでおしゃれな地域なので、（おや？）と思ったら、地元新聞記者が「ほとんどハーレムの犯罪だよ」と教えてくれた。ギャングの抗争で死亡者が出たり、発砲事件も多い。ニューヨーク・タイムズ電子版が五月二十六日に「ハーレムの発砲事件で八人負傷」というニュースを伝えたばかりである。それによると一二五丁目のレノックス・アベニュー他で銃声が聞こえたとの通報があり、ティーンエイジャーの被害者が一二五丁目近辺で収容されている。何度も通って見慣れたスターバックス

前の警官の写真が載っている。いくら昔に比べると安全になったとは言え、殺人ばかりでなく犯罪数ではやはりハーレムがダントツで、ニューヨークではブロンクス区に次いで危険なエリアになっている。ハーレム(註)と東京の「安全」の観念と実態には大きな開きがあるのだ。

ハーレムに足を踏み入れると外国人である私もすぐに黒人達のサバイバルに巻き込まれてしまう。日本人がよくコン・アーティスト（詐欺師）に騙されるのは周知の事実である。酒のボトルをわざと落したりメガネを落したりして弁償するように迫ったり中にはカメラの撮影を頼んだらそのまま持つて逃げて行ったという信じられない犯罪者もいるそうだ。大きな声もあげないし、すぐに諦める日本人ツーリストは彼らに取っては恰好のターゲットである。

七〇年代に「バッド・ネーバーフッド（危険地区）」だったローアー・イーストサイドに住み始めた私はミドルクラス的と言われ、様々なシーンで利用されたりお金を巻き上げられたりした。それから四年の間には危険なこの街を熟知して危機管理にも長け、ディフェンス・メカニズムも身に付けたつもりだが、二〇〇六年にはあなたはこの辺に詳しくないようだから、とわざわざ遠回りをして目的の地まで案内してくれた親切的な黒人女性もいたぐらいで年に一度もニューヨークに行かないツーリスト(註)になってしまった私はきつとスキだらけに見えるのだろう。

サンディという、チエルシーのフリーマーケットにブースを持っている女性とハーレムを歩いていると、私のバッグのジッパーがしつかり閉じていないのを見て「きちんと閉じた方がいいわよ」とくどいくらいに注意された。私は一々ジッパーを閉めなくともしつかり手で押さえているので大丈夫だと思つて聞き流していたのだが、やはり現地に暮らす人の感覚とはズレているらしい。真昼間からスリや引ったくりはないだろうと甘く見てはいけない。「スーパード、買い物袋を床に置き、その上に財布を入れておいたら、ちよつと目を離れたスキに消えていた」と、しつかり者の彼女でさえ被害に遭つていゝのでは注意するに越した事はない。

ある時レノックス・アベニューでバスを降り、持ち歩いていた大きなバッグに目をやった私はアツと危うく声をあげそうになつた。一瞬血の気が引いて手足が冷たくなるのを感じた。バッグのカバーがめくれて開いていたのだ。(ああ、とうとう起こつてしまった!) 財布かパスポートか、何か必要不可欠な物が盗まれたのだと覚悟した。サンディの忠告をきちんと聞いていれば良かった、聞かなかつた自分が悪かつたのだと後悔した。パニック状態に陥つた私は人がたくさん行き交う路上でしばらくガガサと人目も気にせずバッグの中を引っかき回していた。幸い何も盗られてはいなかったが、のんびりと観光をしているのではない。取材の対象となる人や場所

を探しながら歩いているので持ち物にまで注意が行かなくなるのだ。空き巣防止のスローガンではないが、置き引きやスリはじつとターゲットを定めてスキをうかがっている。一人でキョロキョロしながら歩いている私をどこかでジッと狙っている人物がいたかもしれない。

ハーレムにはまだまだ問題は多い。貧困、犯罪、ドラッグ。フレンドリーな人間もいれば詐欺まがいの人もいる。麻薬の常習者もいる、それがハーレムなのだ。

(註1)「外務省海外安全情報ホームページ」を見ると、ニューヨークはここ数年減少傾向にあるとは言え、それでも犯罪件数は東京のおよそ二〇倍と書かれている。一九九八年にはグリニッジ・ヴィレッジに住む日本人女性殺人事件の被害者になっている。ハーレムデイズで賑わう一六丁目も七〇年代には麻薬中毒者が群がる通りだった。この通りでは「アメリカン・ギャングスター」のモデルのフランク・ルーカスがヘロイン商売をしていた。

(註2) 一九八一年の滞在時でさえ、ミッドタウンのヒルトンホテル近くの店でコーヒーを買った私に、デイトの相手のヒスパニック系の男性が私の後ろに並んでいた黒人を指差して「ホラ、あの男、チャンスがあれば君から何かを盗もうとしていたよ」と言うのだ。まさかこんなに人の多い店で、と思い、

「ニューヨークは知ってるから大丈夫 (I know New York)」と彼の考えを否定すると唇のはしでフンと笑ってこう言ったものだ。「君は僕の知っているニューヨークを知らない (You don't know New York the way I do)」。彼はトップレスバーのちらし配りをしているストリートライフを知る男性だった。エンジェルという甘い名前で親切だったけれど、やはり最後にはドラッグ・ユーザーの本性を現してお金をせびるようになった。その時は深く考えなかったが、外国人が日本にやって来て日本について色々な感想を述べるのを見たり聞いたりするたび、(あなた方は私が知っているようには日本を知らない) とエンジェルが言っていたのと同じ事を感じる。映画「クロコダイル・デインデー」に出てくる白人女性が「私はニューヨーク・ウーマンよ」と啖呵を切るが、住んでいた時には私もニューヨークの女として生きていたと思うのだが、そんな日々は遠くなった。ナイーブではニューヨークでは生きていけない。人も信用できない。それがイヤで私は帰国したのだ。ニューヨークに行く時にはなるべく性善説で人と接したいと思うけれど、心の中には警戒心がある。その警戒心もまだらなのでそれがスキとなって狙われるのだろう。日本人はストリートライフを知らない。性善説で生きていける国なので、犯罪に立ち向かうディフェンス・メカニズムを身に付けていない。ニューヨークでは子供も幼い頃から疑う習慣を付け、自分の身を守るのは自分だけだと教えられる。彼らの知っているニューヨークを、私は確かに知らない。黒人には随分インチキな品物をつかまされた苦い経験がある。散々騙されて随分注意深くなったはずなのにまた騙される。どうし

でも日本人は甘いのだと思う。だからカモられ、騙され続けてしまうのだ。つくづくニューヨークとは生き馬の目を抜く街だと毎回思い知らされる。

「商売」には違法なものが多い。グラウンドゼロ付近では黒人の若者がツインタワーをかたどったピンを一ドルで売っていた。写真を撮らせてくれたら買うともちかけたところ、「写真はダメ」と警官の姿を気にしている様子だったから許可なく販売していたのだろう。立ち去ろうとすると「あげるよ」と三つもくれたので二ドル支払った。ハーレム周辺にはたくさんの物売りがある。一二五丁目に店を構えている者の他にも行商をしている男性をよく見かける。「ベイビーボーイ」というジョン・シングルトンの映画には洋服をチョロマカした友人から安く仕入れて美容院に売りに出かけ、四〇〇ドル以上も手にして喜ぶ男性が出てくる。ガーメント・ディストリクト（アパレル関係の倉庫やオフィスの多いエリア）でそろそろ暮れかかって来た頃、透明な衣類カバーをかけたオーバーコートで「たつたの二五ドル！」と路上で売っていたのに出くわし、寒くなり始めていたのでこれ幸いとはばかりにジャケットとカルバンクラインのロングコートを買って大満足で帰宅したのだが、新品に見せかけた中古品で、裾が虫食いだらけだったり、ひどい代物だった。ダイヤモンド・ディストリクト（宝石商が軒を並べる通り）を歩いている時にはきちんとした身なりの黒人男性がこそそと寄って来て、「買わない？」と小さな箱を開けて指輪を見せる。三〇〇ドルぐらいの値札が付いた、小さなダイヤやルビーの細工のきれいな指輪だった。「そんなお金ない」と言うと（実際な

かった。「一〇〇ドルでいい」と言う。これは盗品なのだろうかと思つた。一〇〇ドルもなかったので立ち去ろうとしたら「いくらでもいい」と食い下がる。財布には六〇ドルほどあつたのだが、「それでいい」と指輪を渡してその男はまたこそそと立ち去つて行つた。私は三〇〇ドルの指輪が六〇ドルで買えたとはホクホクだった。数日して宝石商の友人の店に出かけ、その指輪を見せると「一〇ドルぐらいのインチキな安物だよ」と言われてがっかりしてしまつた。変な欲を出した為に結局は損をしてしまつたのだ。「路上で買う物は二〇ドルまでにしておく方がいいよ」とニューヨーカーの彼からアドバイスされたのだつた。今考えると、インチキな乾電池は九九セントショップで一ドルで売られているというから、元々は使える品なのだろう。それなのに使えないとは、中古のオーバーコートを新品に見せかけて売る商売と同じで、中古の乾電池を集めて来て新品に見えるようにパツクしなおして売りまわっているのだろうか。次回はもっと注意深く、賢く買ひ物をしようといつも自戒しているのだが、やっぱり何かしらつかまされてしまう。路上で買う時には安いからと飛びつかずよほど注意をしなくてはいいけない。

やっぱり起こってしまった盗難

ションバーグに日参し、翻訳も大分進んだかな、と思った頃にそれは起こった。毎日かなりの距離を歩き、幾つもの場所に出かける私は持ち物には神経を使う。何かをどこかに忘れたが最後、手元に戻って来るとは思わない方がいい。外していないのに腕時計が忽然と消えてしまったり、知らないうちにカメラを盗まれた事もある。だから大きなバッグにカメラからメトロカードから一切合切放り込んで荷物分散せずに持ち歩くのが一番いいのだが、その時はおしやれをする必要があり、ずだ袋のような色気のないバッグではなく、小さなバッグに紙袋の計二つのバッグを持ち歩いていた。

紙バッグには翻訳済みのノートとカメラと一緒に入れておいた。メモを取る時にはそのバッグが邪魔になる。ハーレムの葬儀屋の主人と話している時に、私はそのバッグをビルの壁に立てかけておいたのだが、話が終わったちょうどその時、Mという結果的に疫病神のような存在だった顔見知りの男に声をかけられた。人間という生き物は、何かに気を取られると他の事をつい忘れてしまうものらしく、近所の教会で何かの展示があるから行ってみようと誘われ、連れ立って歩い

ているうちにハツとバッグの事を思い出し、ザッと顔から血の気が引いた。この時点でもう半分以上バッグの事は諦めていた。そこは日本ではない、ハーレムなのだ。もし葬儀屋の主人が気付いて預かっていてくれたら、とかすかな望みを託して取って返したがビルの前にそのバッグはなく、葬儀屋でも預かってくれてはいなかった。

この時の落胆はそれはもうひどかった。盗難に遭ったカメラは海外旅行保険で八割ぐらいはカバーされるし、もう一台持参したので買い直さなくて済む。海外で盗まれて一番ショックなのはカメラではなく、フィルムでなのだが、この時は一〇年ぐらい前の教訓から撮った写真はその日のうちにパソコンに取り込み、SDメモリーカードをリフレッシュして使っていた。これが役に立った。もし1ギガとか2ギガまで撮り溜めて盗まれたのだったら到底立ち直れなかっただろう。

カメラより何より翻訳したノートが痛かった。ションバーグでは、翻訳した文章をパソコンに保存し、CDなどに入れて持ち帰るという事ができない。一語一語翻訳して書きとめるのだ。かなり時間のかかる作業で、遅々として進まなかったがそれでも数十ページの分量にはなっていたのにその苦勞がすべて水泡に帰したのだ。

すっかり意気消沈した私を見て、Mは声をかけた自分が悪いのだとか、自分も書き溜めた画集を盗まれてショックだったなどと慰めにかかったが気持ちは晴れない。あなたのせいなのだ、となじりたい気持ちをもぐと抑え、近くに警察の分署があると聞いて一緒に行ってくれないだろうかと頼んだ。彼は妙な表情を浮かべて即答しない。そして自分は行かない方がいいだろう、と言うのだ。そこで私はピンと来た。彼は以前、警察の厄介になつた事があるのだ。

「捕まつた事があるの？」と単刀直入に聞くと「大した事ではないさ (Nothing major)」と薄ら笑いをする。私は仕方なく、一人でトボトボと警察まで歩いて行つた。数ブロックが一キロにも思われたほど遠かつた。

受付の黒人女性に「どうかしましたか」とやさしく声をかけられた途端、思いもかけず涙がこぼれ、いい年をしてしばらく泣きじゃくつた。気の毒に思つた屈強の警官数人に慰められ、ひとしきり泣いた後で気を取り直して、こんな時でもないニューヨークの警官と世間話などできないのでハーレムの現状について少し質問をしたりした。保険金を受け取るのに必要な報告書のコピーを貰つて少し元氣の出た私は金にならないノートが捨てられていないかと付近一帯のゴミ箱を覗きこんで見た。ないと諦めると、今度は近所のデリに入った。そこには数人の若い男性がヒマそうにたむろしていた。私は彼らに向つて、こういうノートを見つけてくれたら二〇ドル、い

や五〇ドル払うと言ってハーレムの印刷屋で作った安手の名刺をばらまいたのだった。が、遂に連絡は来なかった。私の大切なノートはハーレムのどこかに捨てられ、ゴミとして処分されてしまったのだ。

帰国が迫っており、もう翻訳し直している時間はなかった。まとめてコピーすればいいようなものだが一ページ二五セントもする。クイーンズでは五セントなのにどうしてこんなに高いのだろう。片端からコピーしたら二〇三〇〇ドルはかかったと思う。そんな金銭的余裕もない。仕方がない、資料は諦めるしかない、そう思い切った矢先、詳しくは書けないが、ある人が救いの手を差し伸べてくれ、その人のおかげで私は分厚い資料を持って帰国できたのだった。

(註1) はすにかけたバッグを背中に回し、ストリートフェアに気を取られているうちにジッパーを開けられて一番上にあつたキャノンのシユアショットという安い自動カメラを盗まれた。高い一眼レフなどではない。その下には財布があつたが、不幸中の幸いで無事だった。その時も盗難保険に入っていたのでカメラ事体はそう惜しくはなかったが、あと一枚か二枚で終わるといふ思い出の詰まったフィルムが永遠に失われた事がショックだった。

ハーレムのチラシ配りロナルドの笑顔

日本人はアメリカ人に比べれば笑顔をよく見せる。ニューヨークカーは不必要に笑わない。松坂大輔投手のボストン・レッドソックス入団時には大輪のひまわりのような笑顔を見せていた。満艦飾の笑顔は愛想笑いをしない他の大リーガーと不釣り合いで、天文学的な俸給の上に更にオプションを要求する経緯が逐一ニュースになっていたのといまつて、私は、あまり好印象を抱かなかった。

チップを稼ぐ人は別として、一般にアメリカのサービス業に従事する人々もあまり笑わない。それに慣れてしまうと笑顔が不自然に見えるようになる。ニューヨークのタイ料理店に入った時にはさすが「微笑みの国」と言われるだけあって、そのウェイトレスは終始笑顔を絶やさなかった。その時も私は痛ましいような、奇妙な感じに打たれた。笑わない国民の中であまり笑いとくえつて奇異に映るのである。いい悪いの問題ではないが、日本人は笑いすぎ、ニューヨークカーは笑わなさすぎだと個人的には思う。

ハーレムを歩いている人々にも笑顔はなかった。一体に表情が暗い。撮影するならードルくれ

と言ったアフリカ人女性達、何ドルかくれ、とせがんだ黒人の険しい顔、写真を撮らないでくれ、とびしやりと言いだしたアポロ劇場の女性警備員など。皆日々のサバイバルに懸命で笑顔を見せる余裕などないのかもしれない。ハーレムの観光スポットにもなっているスタジオ・ミュージアムでよく笑う若い黒人従業員に出会った時には珍しくてしげしげと見入ってしまったほどだった。音楽の話だったと思うが、話しかけると体を折り曲げてクックツとさも可笑しそうに笑うのがキュートだった。地方から出て来たばかりなのだろうか。そのうちハーレムに慣れて彼も笑わなくなるのだろうか。

ロナルドという中年男性も最初に会った時には笑顔を見せなかった。かといってアンフレンドリーというでもない。7番街の角でハーレムのCDストアの宣伝ちらしを配っていた。見ると日本では入手困難な黒人エンターテイナーのDVDもズラリと並んでいる。私は二カ月という滞在期間があつという間に過ぎ去る事を知っており、いつも急いでいた。ちよつと立ち話のつもりが、次から次と話題が尽きず、かなり長く話しこんだ。いつもアポロ劇場の前にいるから、というのでそれを心に留めてアポロ劇場前を通る時には気を付けていたのだが、たのだが、その後しばらく会う事はなかった。

「ショータイム・アト・ジ・アポロ」というアマチュア・ナイトのTV収録が無料で見られるというのでその日は黒人に混じって長い長い行列に並んでいた。何しろウーピー・ゴールドバーグが司会をするのだから見逃す手はない。路上販売が盛んなハーレムのこと、一二五丁目に面したアポロ劇場の横から一二六丁目に向って長く伸びる行列目当てに物売りが次から次とやって来た。派手なアクセサリー売りもいれば新人歌手の宣伝ちらしを配る者もいてにぎやかな事この上ない。そこにロナルドを見つけた。マジック・ジョンソン・シアターで行われるコメディショーのチラシを配っていたのだ。私は笑顔を見せたと思うが彼の顔には微笑は浮かばなかった。「あら、また会ったわね」とそこでも少し話し込んだ。三度目の正直でそのコメディ・ショーの会場内でまたバッタリ会った。よほど縁があったのだろう。ショーがはねた後、「ショーマンズ」というクラブに行きたかったのだが、暗い夜のハーレムを一人でウロウロ歩きたくないだったので一緒に行かないかと誘ってみた。そうしたら「いいよ」と二つ返事でOKしたので、この有名なクラブでタップダンスとジャズを楽しむ事が出来たのだった。

彼はこの時のお礼だと言って後日映画に誘ってくれて、タイムズ・スクエアの映画館で「ザ・デパートメント」と一緒に見た。映画が終わり、6番街をぶらぶら歩くとストリートフェアに出くわした。安物のおみやげ品を見て歩いたり、写真を撮ったりしていると日が暮れかかって来た。「ま

たね (See you later.)」とクイーンズに帰る間際に言うと、思いがけず、彼はそれまで見せた事のない笑顔を見せてくれたのだ。泣きたくなるような素晴らしい笑顔だった。

第四章 ハーレムと観光

アポロ劇場

ハーレムで一番の人気観光スポットは何と言ってもここ、一二五丁目の7と8番街の北側に位置するアポロ劇場である。歌手やダンサーを目指す若者には輝かしいキャリアへの登竜門であり、地元住民と黒人文化の愛好者に取ってはわくわくするお楽しみのメイン会場であり、かつては黒人のエンターテイナーが生活費を稼げる、「チットリン・サーキット」と呼ばれる数少ない東海岸のクラブのひとつだった。映画「ドリームガールズ」の中にも登場する古い劇場は歴史的建築物として一九八三年に州と市のランドマーク指定を受けている。実際に中に入るとなるほど古いビルだと実感する。

この劇場前に立っていると、白人の姿をよく見かける。声をかけてみると他の州からやって来たアメリカ人に混じってドイツ、フランス、イギリスから訪れた観光客もいる。彼らはハーレムが危険だった頃を知ってか知らずか、喜々として写真撮影に興じている。ミッドタウンではよく見かける真っ赤な2階建ての観光バスだが、よく目立つこの車体の屋根の上に白人観光客が鈴なりになっているのを劇場前で見かけた時には自分の目を疑った。そして彼らが観光客ではなく、

こんなにたくさんさんの白人をハーレムで目にする事のない黒人住民達のアトラクションとなっているようで、ちよつと笑いがこみ上げてきた。ハーレムと観光というミスマッチ(とその時は感じた)は映画「ノッティングヒルの恋人」のヒュー・グラントのセリフ、「シュールだけどナイスだね(Surreal, but nice)」という表現がぴったりだった。タイムズ・スクエアがまだポルノ産業の巢窟だった時に、デイズニーが進出してくる事になり、記者会見でジュリアーニ元市長が「ファミリーで訪れる事の出来るタイムズ・スクエアを目指す」と抱負を語ったところ、記者連から失笑が洩れたと彼自身が語っていたが、ハーレムと観光バスの組み合わせに笑った私には記者達の気持ちがよくわかる。

キャパシティ^(註2)一七五〇席のこの劇場は最初は「ザ・ハーティグ&シーモンズ・バーレスク(The Hurtig And Seamon's Burlesque)」という名で、アポロ劇場と名が変わったのは一九三四年である。その年から始まった「アマチュアナイト」^(註3)が非常に有名で、「ショータイム・アット・ジ・アポロ」としてTVでも放映されている。このイベントからは、古くはピリー・ホリディ、エラ・フィッツジェラルド、サラ・ヴォーン、サミー・デビス・ジュニアなどという伝説的な歌手や、現役のアレサ・フランクリン、ステイービー・ワンダー、マイケル・ジャクソンなど数え切れないほどのスター^(註4)が輩出している。

このショーの出演者は勇気があるか自信があるか、或いはその両方である。もし歌やダンスが下手だったり、気に入らないと観客が容赦なくブーイングするからだ。それが限度のレベルを超えるとオマーという素晴らしいタップダンサーがピエロなどの奇抜な恰好で出て来て、出場者をステージから追い払うという趣向になっている。これでは自信もプライドも粉みじんになってしまふだろうに、見ているとブード・オフされる（ブーイングで退場させられる）者は泣くでもなく、怒るでもなく、淡淡と、または未練がましく退場する姿が面白い。私も、二〇〇四年にこの伝説的な舞台を踏んでいる。アマチュア・ナイトを見に訪れた時に、日本から来た人はいませんかという司会者の呼びかけに応じて手を挙げたら舞台に引き上げられたのだ。そこで否も応もなく曲が流れて踊らされてしまったのだ。他の黒人の参加者はさすがに皆ダンスが上手く、尻を小刻みに揺らす女性とかラッパーのような動きが今風だったりと感じしきりだったが、破れかぶれの私の熱演に拍手が集まり、賞品のスエットシャツを手にしたという、これが私のアポロ・デビューの物語である。

初めてアポロ劇場を訪れたのは七〇年代にさかのぼる。黒人スタンダップ・コメディアン（註）のリチャード・プライヤーが出演するどこかで聞きつけて、当時の交際相手だったケネスという

黒人の高校教師に頼んで連れて行ってもらった。彼の名は日本で見つ・タックス(Watts)のドキュメンタリー映画で知った。アイザック・ヘイズ、ザ・バーケイズ、ルーファス・トーマスなどの有名なR & B歌手よりも、やたら早口で過激な事を喋りまくる黒人男性が強く印象に残った。それがリチャード・プライヤーだった。当日、嬉しいのと怖いのが半々で一二丁目のアパートから一二五丁目のアポロ劇場に着くと、既に超満員。席を埋め尽くすのは黒人また黒人で、彼らの熱気が場内に渦巻いていた。黒人でないのは私ひとりだったかもしれない。普段これだけの数の黒人をまとめて目にした事のなかった私はカルチャー・ショックに見舞われたが、黒人男性と一緒にいる安心感もあつて、不思議とハーレムの怖さはすっかり忘れていた。むしろハーレムの索漠とした風景に似ず、住民の明るさやバイタリティを感じた。豪華な前座の後に、大人気だったリチャードが舞台に登場すると、大きな歓声が上がった。それを受けて、彼はのっけから「よくチケットが買えたじゃないか、二ガー！」と黒人に対する最大の侮辱語である二ガーを連発する。絶対に口にしてはいけなくと固く戒められたこの言葉を、彼は観客に向って何度も繰り返すのだ。さらに驚く事に観客はその度にどつと沸くのだ。とんでもなく猥雑でパワフルな彼のワンマンショーに黒人の観客達は大波のようにうねって笑いさざめく。リチャードの黒人独特の英語の半分も理解できなかったのに、私はお腹の皮がよじれるほど笑った。実際腹筋が痛くなった。あんなに笑ったのは私の人生で後にも先にもない。彼が、この夜が、私が黒人スタンダップ・

コメディにのめり込むきっかけとなったのだった。

アポロ劇場ではアマチュア・ナイト以外にもたくさんのコンサートやスペシャル・イベントが行なわれ、年間一三〇万人が訪れるとウェブサイトにある。二〇〇六年十二月に死去したジェームス・ブラウンのお別れの会 (viewing) もここで営まれた。当日は早朝からファンが集い、午後には数ブロック先まで列がのびてその数は数千人に上り、劇場は人込みで身動きできないほどだったという。ファンの大半は黒人だったが、中には白人俳優のポール・ジオマッティやこの為だけに駆け付けた日本人の家族もいたという。彼は「ソウルのゴッドファザー」と呼ばれたが、アクの強い歌いつぶりはソウルともリズム&ブルースともジャンル分けできない、ファンクと呼ぶのがぴったりだったと思う。

ハーレムが舞台となった「アメリカン・ギャングスター」のプレミア試写会が、全米公開に先がけて二〇〇七年十一月に行われた。あいにくの小雨の中、主演のデンゼル・ワシントン始め、共演のラッセル・クロウ、キューバ・グッテンバーグ・ジュニアなどたくさんのセレブリティが登場、メディアも多数押しかけハーレムで滅多に見かけないリムジンも登場して交通量の少ないハーレムで大渋滞を引起したという。レッドカーペットが劇場前に敷かれ、音楽界からはJAY-Z

とビヨンセのカップル、Diddy、Ice-T、ジャネット・ジャクソンまで、そうそうたる黒人セレブが姿を見せて豪華な雰囲気にも包まれたという。

今年初めにはオバマ議員の選挙の集会も行なわれ、五〇ドルと高めのチケットも完売。白人が多かったといい、その後の彼の白人層での人気の高さをうかがわせる。

(註1) このグレイラインの観光バスはマンハッタンとブルックリンの五〇の地点を循環ルートで結び、ホップ・オン、ホップ・オフ（乗り降り自由）で四九ドル、オンラインで申し込むと三九ドルとリーズナブル。タイムズ・スクエア付近ではこのバスのパンフレットを渡す人々をよく見かける。地下鉄が無制限に使えるアンリミテッドのメトロカードを使えば一日券なら七ドル、私はいつも三〇日券を買うのだが、これでバスにも乗れるので私は一度も観光バスを利用した事がない。のんびりと日かけて世界中のツーリストに混じって今さらながらの観光地巡りも楽しいかもしれない。

(註2) 一五二〇席とも言われる。

(註3) 二〇〇六年には日本人のヒップホップ・ダンサーが優勝して賞金の一万ドルを手に入れている。

NYHIP-HOPDANCE CONVENTION というイベントも同劇場で行われている。

(註4) 「バラエティ・アット・ザ・アポロシアター」というDVDでは一九四〇～五〇年代のアポロ劇場での素晴らしいパフォーマンスが見られる。「サボイ・ボールルーム」「スモールズ・パラダイス」「シュガー・レイズ」などのネオンの看板が輝くまるで現在のブロードウェイのようなハーレムの映像も珍しいが、リトル・バックのタップダンスやルース・ブラウンのソウルフルでブルージーな歌声など今でも古くささを感じさせない彼らに脱帽。

(註5) その後映画にも出演ようになったが、クラック吸引による大ヤケドをおり、一時の勢いがなくなっただような気がする。七〇年代のような感動はもう味わえないかもしれないが、機会があれば絶対に見逃したくない一人。

(註6) 一九六五年、住民の九九%が黒人のカリフォルニア州ワッツで黒人がハイウェイパトロールの検問を受けたことから群集との小競り合いが始まり、その後三四人が死亡する大規模な暴動へと発展した。二〇〇七年に訪れた友人によるとブロンクスに似た住宅街で、黒人、ラテン系、日系人などマイノリティーが住み、現在も治安が悪いという。暴動の後に空き缶で作られたワッツタワーが今も残る

という。七周年記念として一九七二年八月二〇日にワッツでコンサートが行われた時のドキュメンタリー映画。

(註6)

前座は七〇年代の人気ソウルグループのザ・メイン・イングリディエントやビリー・ポールで、レコードとは一味違う、観客を挑発するような、思わせぶりで粘っこい歌い方と、観客のものすごい沸き方に、ソウル・ミュージックの本場に来たとひしひしと感じた。ビリー・ポールは一九七二年十二月にビルボードで「Me and Mrs. Jones」がナンバーワンに輝いている。ザ・メイン・イングリディエントの「Just Don't Want to Be Lonely」は七四年にポップヒットチャートのトップテンに入った。このグループは六〇年代にハーレムで結成され、俳優のキューバ・グッテンバーグ・ジュニアの父親が七一年に加入している。

(註7)

黒人同士では今でもよく使われるこの言葉はメディアなどではN・ワードと呼ばれる。N・ワードはヒップホップの歌詞に頻繁に登場し、差別語ではなくなっているという意見もあるがそれはあくまでも黒人が使った場合に限られる。第二次大戦中に使われた日本人の蔑称である「ジャップ」を引き合いに出すと、デザイナーの高田賢三氏がパリに出した店の名前は当初「ジャングルジャップ」で後に「ジャップ」と略されるようになった。友人に反対されたが、日本人自身が付けるのだ

から構わないという気持ちだったという。黒人同士も自分達が使う分にはいいと考えているのかも
しれない。アメリカ進出時に、戦時中に差別を受けた日系人らに抗議を受け、八〇年にパリの店は
「KENZO」に変えられたという経緯がある。なお、現在ではジャップという言葉は若いニュー
 Yorkerにとつては日本人に対する蔑称というよりは「わがままなユダヤ人女性 (Jewish American
 Princess)」を意味する場合が多く、ジャップという蔑称は消えた、或いは消えつつあると考えてい
 るようだ。

スターバックスとハーレムでお茶を

元バスケットボールのスター選手であるマジック・ジョンソンとスターバックスの共同経営によるハーレムの「スターバックス」。ハーレムの目抜き通りの一二五丁目とレノックス・アベニューの角にあるこの店はよく目立つ。よく知らないハーレムを歩いていて、見慣れたこの店のロゴを見ると、特にひいきの店でもないのに脳の中にチカッと灯りが灯る。チェーン店のパワーとは恐ろしいものだ。

かつてはシガーストアで、何ヶ月も空き物件だったこの場所に一九九九年、スターバックスのハーレム一号店がオープンした時には大きなニュースになったと同時に、期待を持ってハーレムの住民に迎えられた。オープン時には、地元住民を従業員として雇い、コミュニティのメンバーとして貢献したいとスターバックス側は語っている。かつては黒人の労働者を雇わないなど人種問題のあった通りが、黒人を益する通りに生まれ変わったのだ。二年後の二〇〇一年には白人や黒人知識層、ツーリストが訪れ、ハーレムの変化を象徴する存在となっているとニューヨーク・タイムズの記事にある。二〇〇六年の滞在中には、わかりやすいので私も何度も待ち合わせに利用し

た。いつも地元の利用客で賑わっていた。2年の不在の間には何軒か増えたようだ。

ハーレム活性化には大企業が資本投下をする事が必須だと言われ続け、そういう意味ではスターバックスの進出は画期的な事だった。「H&M」「OLD NAVY」といった大手アパレルメーカーの小売店が一二五丁目にオープンした時にも友人は「とっても嬉しかったし、エキサイティングだったわ」と目を輝かせる。だが、資本主義の行き着く先を私は懸念する。というのは小売店世界一のウォルマートのようなメガ企業の行く先々ではママズ&ポプス（ママとパパの店）と呼ばれる地元個人商店がつぶれて行き、利益は地元に戻元されず、従業員は低賃金労働を強いられるといった現象が起きており、やがてこれがハーレムの問題にならないかと危惧するのだ。個性ある個人商店の並ぶ通りはとても魅力的なものだ。一二五丁目もそうした通りで、アメリカの偉大な通りの一つに選ばれているほどののだが、これからはどんなに変わって行くのだろう。私人としては「H&M」や「OLD NAVY」には興味はないし、もしこれからも「GAP」や「ベネトン」といった企業が進出すればもうそこはハーレムでなく、ミッドタウンと同じになってしまう。それよりはヒップホップのメッカとして、ファットファームやション・ジョン、ロカウエアなどのヒップホップ・ブランドの旗艦店や大型ダンスクラブなどが出来ればいいと思うのだが。

ハーレムで「お茶する」には大変便利なスターボックス。この店の前では何か毎回目新しい事が発見できるようだ。ある時は、デイリーニューズ紙を配っている人がいて、最初はそれが無料だとはわからなかった。ちよつと歩けば有料で売られている新聞(註)を通行人の誰彼にタダで配っているのだから驚いた。ジャクソンハイツ駅でも見かけたから、ニューヨークでは特に珍しい事ではないらしい。受け取ってみると、表紙にスポンサー企業の広告がデカデカと載っている。そこだけが有料新聞とは異なるが、中味は全く同じ。通りで無料新聞配布を見かけたらそれはあなたのラッキー・デイである。

スターボックスで待ち合わせた地元に住む知人がこんな事を言っていた。

「この店では毎日必ず何か騒ぎが起こるのよ！」

折りしもカウンターでは客が従業員に向つて何やら大声でクレームを付けていた。

「他のスターボックスではない事なのに」

と彼女はうんざりした顔で囁いた。

ハーレムの「象徴」にも悩みの種はあるようだ。

(註1) ミッドタウンに多いニュース・スタンドはハーレムではあまり目に付かない。その代わり黒人の少年が「さあ、読んでみて! (Read all about it)」と声を張り上げて新聞を売っているのを見かける。

スタジオ・ミュージアム

一二五丁目のレノックス・アベニューと7番街との間の南側にあるこじんまりしたスタジオ・ミュージアムは日本人も多く訪れるハーレムの観光スポットでもある。展示の他、ワークショップ、リーディング、コンサート、講義、シンポジウムと多彩な行事を提供してハーレムになくはないカルチャー・センターだが、私はすっかりミュージアム・ストアに魅せられてしまった。受付奥にあるこのストアは入館料を払わなくても入れる。そもそもここは入館料を取らず、寄付（ドネーション）という制度を取っている。

そこは黒人アーティストによる魅力的な商品が溢れるブラックアートの殿堂である。洗練されたMOMA（ニューヨーク近代美術館）のストアとは全く異なり、プリミティブで大胆でカラフルな表現の絵画や絵葉書、カレンダーなどが所狭しと並べられている。日本では入手困難な書籍も多く売られている。黒人のアーティストの作品を日本では全く目にするチャンスがない私は何度も店内を周回して眺めているうちにあつという間に時間が過ぎ去ってしまった。ある意味ではストアがこの美術館のメインアトラクションであると言ってもいいかもしれない。従業員の方々

も大変親切である。

買いたい物はたくさんあったのだが、いつも予算と重量の関係で軽くて安い物しか買えないのが悔しい。散々迷った末に、たくさんのアートイストの中でもやはり抜きん出て素晴らしかったジャン・ミシェル・バスキアのカレンダーと「ハーレムルネッサンス一〇〇年の歴史、アートと文化」というポスターのを買ひ、ポスターは今でもパソコンの横に飾っている。詩人のラングストン・ヒューズやジャズ歌手のエラ・フィッツジェラルドなど日本でも知られた人々や、美容家のマダム・C・J・ウォーカーのように、黒人であれば誰でも知っているけれど、日本ではほとんど知られていない名前もある。狭い一画に聞いた事のない名前が散りばめられていて、黒人の文化や歴史についていかに無知であるかを思い知らされる。自国の近代史も詳しく教わらなかったのだから黒人の歴史はなおさらである。

知人女性によると、アメリカの学校でさえ黒人の歴史についてはあまり詳しくは教えないのだという。黒人史を知る事が人種の融合への妨げとなる一面も確かにあるかもしれない。パールハーバーのアリゾナ記念館のように、いつまでも真珠湾攻撃をした日本人を許さないという意志の元に作られたかのような施設に行くと日本人である私は非常に居心地の悪い思いをするのも確か

だ。

が、奴隷制という人道にもとる制度と、奴隷の子孫であるアフリカ系黒人の自由を勝ち取る為の長い戦いの歴史を学べば、人種差別がいかに愚かしい事であるか、黒人とは何と勇気ある、強く尊敬に価する人々であるかを知る事ができる。やはり歴史からは目を逸らさず、正しい形できちんと語り継ぐべきなのだと思う。

黒人の偉人フレデリック・ダグラスの記念碑

フレデリック・ダグラス（一八一八年～一八九五年）は二〇才でボルティモアから逃亡した奴隷で後に奴隷解放論者として世界的に有名になった。黒人で知らぬ者のない偉人だが、これもハーレムに来て初めて知った。彼の名を冠したフレデリック・ダグラス・ブルバードにはRやLが多く、日本人には非常に発音しにくい。タング・ツイスティン・ワード（早口言葉）のようで、一息に言えず、突つかえながらゆっくりと発音しなければいけなかった。それを簡単に8番街と言つては尊敬の念に欠けるとも思ったが、^{（註1）}フランク・ルーカスがシンブルにエイス・アベニューでいいじゃないか、とも言っていたし、最後はエイス・アベニューで勘弁してもらう事になっていた。

二〇〇七年一月二十三日付けのニューヨーク・タイムズが伝えるところによると、市と州、連邦予算の約一五〇〇万ドルを注ぎ込んで、彼を記念する一万五千平方フィートの広場と八フィートの高さの彫像をセントラルパークの北西の角、一一〇丁目とフレデリック・ダグラス・サークルに建設中で完成予定は二〇〇八年の秋とある。当初の計画では彫像の下に巨大な花崗岩のキルト模様を配する予定だった。キルトの原型は奴隷制時代のファミリーキルトにあり、^{（註2）}「アンダー

グラウンド・レールロード (The Underground Railroad)」と呼ばれる南部から北部への安全な逃亡ルートや、かくまってくれる家々の所在など、生存に不可欠な情報が秘密のコードとして縫いこまれていたとされる。この秘密のコードに関しては小学校でも教えており、黒人の間で絶大な人気を誇るオプラ・ウィンフリーのショーでも紹介されている。

ところが歴史学者や大学教授などは暗号化されたコードを縫いこんだキルトが存在したという証拠はない、一九三〇年代の元奴隷によって行なわれたインタビューにも出てこないし、日記や回顧録にも一切出てこないと主張している。キルトの暗号が事実か民間伝承か、誰がどちらを歴史として残すのか、熱い議論が起こり、市ではこの計画を練り直す必要が出て来たと記事にある。キルトの案が採用されるにしろされないにしろ、私としては例え事実でなくても民間伝承として残して欲しい気がする。

(註1)「アメリカン・ギャングスター」のモデルとなったフランク・ルーカスは「8番街でいいじゃないか」とNYタイムズとのインタビュー記事の中で語っている。

(註2) セントラルパークの北端はどうなっているのだろうと、セントラルパーク・ウェストという公園西

側の優雅な通りを北上した事がある。七二丁目にはジョン・レノンで有名なダコタハウスがあり、夜に通るかかったら本物の松明が灯っていた。ここはニューヨークで最初の高級アパートである。公園は一一〇丁目で切れ、ここから上はフレデリック・ダグラス・ブルバードと名前が変わる。バスの発着所になっているのかバスが数台溜まっていて、発車前の黒人の運転手達が何やら世間話をしていた。ハーレムは黒人のブルーカラーが住む街で、バスの運転手にも黒人が多い。三番のバスだったと思うのだが、セントラル・パークを右に眺めて東に向い、5番街を南下した。それが、アポロ劇場ととんぼ帰りのジャズツアー以外では唯一の一九九八年当時のハーレム体験だった。

(註3)

一九世紀の奴隷が北部の自由州へ逃亡する際に奴隷制廃止論者の助けによって通った秘密のルート(鉄道ではない)。最盛時の一八一〇年から五〇年にはおよそ三万人から二〇万人がこのルートを使って逃亡したとされている。

レノックス・ラウンジ

一九七二年に始まったニューポート・ジャズフェスティバルは、一九八四年からはJVCがスポンサーになってJVCジャズフェスティバルと改名されて毎年六月にニューヨークで開催されている。ジャズファンにはたまらないイベントで、私もこの時期に合わせてニューヨークに出かけた事がある。今年も六月十五日から二週間にあつてコンサートホールその他、小さなクラブや公園、学校、ミュージアムに一流のミュージシャンが出演した。音楽の殿堂カーネギーホールの出演者にはハービー・ハンコック、ダイアン・リブスといった日本でも馴染みのミュージシャンの他、モスデフなどというラッパーも名前を連ねていた。ハーレムでもアポロ劇場やシヨンバーグ、スタジオ・ミュージアムなどでライブが行われているがメインは大きなホールやクラブの多いミッドタウンで、ハーレムはかつてはジャズを中心地だったのに、とちよつとさみしい。

ハーレム観光の目玉は何と言っても音楽、それもゴスペルとジャズだった。最近ではヒップホップ系のツアーの人氣も高いようだ。一九八一年に、パンナム航空が発行していた「八〇日間世界一周」というチケットを使つてぐると地球を一周する途中ニューヨークにも一か月ほど滞在した。当事

はまだマンハッタン全体の治安状況も良くなかったのだが、観光ガイドをやっている友人にハーレムのジャズ・ツアーに誘われ、（ハーレムのツアー？）とこわごわ参加した。車でジャズクラブに乗り付け、終わるとミッドタウンにとんぼ帰り、ハーレムを堪能したというには程遠かった。ミュージシャンもクラブも印象に残らなかった。

一九三九年創業のハーレムのクラブ「レノックス・ラウンジ」は二度訪れた。ビリー・ホリデイも歌った老舗クラブで、彼女の定席もあったと聞いたが、従業員は知らなかった。一度目は二〇〇三年にアメリカ人二人と出かけた。地元のミュージシャンのソウルフルな演奏を期待していたが、出演していた無名の女性歌手は、同行者は「良かったね」と喜んでいたが私ははつきり言っていたがっかりだった。声も出ないし、ドレスも、洋服好きの私が着たくないようなポリエステルのセンスの悪い安物で、ステージングも良くなかった。ハーレム人気が高まるにつれてクラブも商業化し、ミュージシャンの質が低くなっているように思う。

二〇〇六年にはビル・リー・クインテットを聴きに出かけた。ビル・リー^(註2)は映画監督スパイク・リーの父親である。入り口を入ると長いバー・カウンターが左側に延びており、ジャズ演奏はその奥のラウンジで行われる。バーではかからないチャージが、奥ではかかる。二〇〇三年には

一〇ドルだったが、二〇〇六年は二倍の二〇ドルにはね上がっていた。二ドリンク・ミニマム（二杯は必ず飲みなさいというシステム）なので、チップも入れれば四〇ドルにはなる。グリニッジ・ビレッジの「アーサーズ」というピアノバーなどはチャージを取らず、その代わりピアノの上に大きなグラスが置いてあり、そこにチップを入れるシステムになっている。大きいところは別として、小さなジャズクラブはチャージなどという野暮なものを取らず、チップの方がよほどいいと思う。そうすれば今日はお金がないから安く済ませそうとか今日は景気がいいからチップをはずもうと自分で金額を加減できるのに、どうやっても四〇ドルはかかってしまうのではひどいバンドに当たった時の失望感が増幅される。それでは行くのを止めようという気になってしまう。飽くまでも自分だけの話だが。

当日、バーは黒人客ばかりなのに、ラウンジには私を含む日本人数人とヨーロッパの白人のツーリストだけで黒人はゼロ。白人ツーリスト達は、誰かの誕生日だそうで、気前良くシャンパンを開けて料理も注文し、上機嫌でハーレムを楽しんでいたがこの日の演奏は、ジャズに多くを求める私には物足りなかつた。レノックス・ラウンジは作りにも問題がある。バーとラウンジの間は薄いドアで仕切られており、ウェイトレスや客がドアを開けるとバーで流れているブラック・コンテンポラリーが聞こえてくる。ジャズ同様黒人音楽だが、ブルージーなジャズに比べると甘っ

たるかったり、派手だったりと内容が全く異なるので著しく感興が削がれる。特に、バラード演奏になるとドアが閉まっけていても「外界」の音楽が紛れ込むのが気になって仕方なかった。バードランドやブルーノートといった本格的なジャズクラブでは店に入った途端ジャズ一色であり、他のジャンルの音楽で気が散るという事は一切ない。もしチャージを取られているのでなければバーに移動してジュークボックスでなつかしのブラ・コンをかけ、地元の黒人と踊った方が楽しめたと思う。

映画「クロスロード」や「カンサス・シティ」に出てくる、掛け合いが起ころうような黒人色の強い小さいクラブが私のイメージするハーレムのクラブだったが、そういう泥臭いクラブはもう南部にでも行かなければいけないのかもしれない。八〇年代にはまだハーレムの少し下に「セラーズ・レストラン」という熱気のムンムンする好みのクラブがあったのだが、既にない。私のジャズ歴はマイルス・デイビスに始まり、マイルス・デイビスに終わった感があり、現地に行っても特にもう見たいとか聴きたいというミュージシャンはいない。往年の、とか伝説の、という前書きの付く高齢のビッグネームよりは、かえって名の知られていない荒削りで猥雑で楽譜なんて読めなくていいから黒人のソウルを感じさせてくれるミュージシャンに出会いたいと思っている。

はるばる遠いハーレムまで行かずとも、アクセスが良く、チャージなしでそこそのジャズが楽しめるミッドタウンのしやれたバーもある。私が「レノックス・ラウンジ」というネームバリューだけで訪れる事はもうない。

小雨の降る週末、遠いクイーンズからハーレムまで一人で出かけた私はファーストセットだけでレノックス・ラウンジを出た。夜のハーレムは観光客の手から黒人の元にそと差し戻されて静まり返っていた。

(註1) 「ハッシュ・ツアーズ (www.hushhours.com)」、「ハーレム・ヒップホップ・ツアーズ (<http://www.harlemhiphoptours.com/>)」など。

(註2) 「モ・ベター・ブルース」の中で使われた音楽は彼の作曲。

(註3) 考えてみれば私の三〇年近いジャズ歴はライブ歴ではなく、レコード歴であり、マイルス・デイビス、ジョン・コルトレーンに始まり、エラ・フィッツジェラルド、サラ・ヴォーン、ナンシー・ウィルソン、今ならデュー・デュー・ブリッジウォーターなどの一流どころの歌手ばかりを聴いて来た。

そういう超一流の現役のミュージシャンはニューヨークとさえども少ない。期待感ばかりが先行するからいつもがっかりする。これからジャズがサバイバルしていくにはマイルス・デイビスのようなカリスマ性のあるスターが必要なのではないだろうか。長年のジャズ・ファンで大変ジャズに詳しいある男性はすつぱりとジャズを聴くのを止めたと数年前に言っていた。理由は「もうジャズはカッコ良くないから」だという。彼の言う意味もわかる。

なぜ黒人はジャズを聴かなくなったのか

ゴスペルからブルース、ジャズ、R & B、ソウル、ブラック・コンテンポラリー、ラップとアメリカの黒人たちは次々と新しい音楽のジャンルを生み出して来た。ジャズは一九世紀後半にアフリカから連れてこられた労働者が歌い踊ることで憂さを晴らしたのが原型で、ニューオーリンズが発祥の地と言われる。「ニューオーリンズ」(一九四七年)^(註)という古い映画は一九一七年のニューオーリンズを舞台にしており、ルイ・アームストロングやビリー・ホリデイが出演している。クラシックがもてはやされ、ジャズは黒人の音楽として卑下され、白人には受け入れられないというジャズ創成期の状況が描かれている。ジャズもブルースも誕生した頃にはなかなか主流にはなれなかったのだ。その後、ジャズはアメリカで大流行し、日本にも進駐軍によってもたらされたが、現在、黒人音楽の主流からは外れてしまっている。天才アルトサックス奏者チャーリー・パーカーの生涯を描いた映画も監督していて、自身ピアニストでもあるジャズ愛好者のクリント・イーストウツドの言葉もそれを証明している。彼は数年前のロイター通信のインタビューで、ジャズは一九四〇年代にはすごい人気で、今よりもはるかに主流だったと語っているのだ。

フットボールの世界を描いた「エニイ・ギブン・サンデー」（一九九九）には音楽に関する二つの対立構図が出てくる。移動の飛行機の中でクォーターバック役を演じるジェイミー・フオックスが、イヤホンを付けてラップ音楽を聴いているとコーチ役のアル・パチーノが寄ってきて聞く。

「ジャズは聴くか？」

彼は気がなさそうに「ノー」と答える。「コルトレーン、モンク、マイルス、ビリー・ホリデイ」とジャズの巨人の名前を挙げられても「古過ぎるよ」と全く興味を示さない。これがラップミュージック対ジャズという新旧世代の構図。

屈強の選手達が裸でのし歩くロッカールームのシーンでは、黒人選手はブーンボックスで黒人グループ、ザップ（ZAPP）の「モア・バウンス・トゥ・ザ・オウンス（More Bounce To The Ounce）」を、白人選手達はヘビーメタルのメタリカの曲をガンガンかけている。これが、黒人はブラック・ヒットチャートの流行りの音楽を、白人はハードロックを聴くという二つ目の人種の構図。私の知る黒人兵と白人兵の音楽の趣味もこれと全く同じだった。

映画「テイク・マイ・リード／Take My Lead」の主演のアントニオ・バンデラスはラップ好きの高校生に社交ダンスを教えようと苦心さんたんする役柄を演じている。ジャズもラップも黒人

音楽というルーツは同じでも、音だけ聴くとまるで別物である。彼がガーシュウインの曲をかけると「ひびえー（It sucks!）」、「ダサイー（Corny!）」、「おバアチャンの音楽！（Gramma's music!）」「雑音！（Noise!）」と散々な罵声を浴びる。リナ・ホーンの「アイ・ライク・ザ・ウェイ・ユー・ムーブ」、ナット・キング・コールの「ファッシネイション」などの名曲も彼らにかかつては形無しである。彼の無謀とも言える試みは意外な形で成功するのだが……。

一〇年以上前から若い黒人がジャズを聴かなくなったのを感じ始めていたので、それはなぜなのだろうかとずっと気にかかっていた私は、二〇〇六年には出会った黒人の誰彼に「ジャズを聴きますか?」「ラップを聴きますか?」と質問してみた。三〇代以上のミドルクラスの人達が「ジャズも聴くし、ギャングスタ・ラップは好きじゃないけど、カニエ・ウエストなんかは聴くよ」と新しい音楽ジャンルに寛容なのが意外だったが、若い世代ではやはりジャズ離れが目立った。ラップのライブ会場で出会った二〇代の音楽プロデューサーも「テイク・マイ・リード」の高校生のように、ジャズは「古い」「父親の世代の音楽」で全く興味が無いと言っていた。

大工役のウエズリー・スナイプスがジャズを聴く裕福な黒人夫婦に向って「ジャズを聴くのは白人とアジア人だけさ（黒人は聴かない）」という映画の中のセリフもある。確かにカーネギー・ホール、イリディウム、バードランドなどにジャズを聴きに行くと観客はウエズリーの言う通り、

見事に白人ばかり。ブルーノートにはアジア人が多い。アポロ劇場のジャズ・コンサートでさえそうなのだからハーレムの黒人の間でもジャズ離れは顕著だと言える。ジャズは労働者の慰めの音楽からミドルクラスの上品な教養音楽になってしまっているようにも思える。リンカーンセンターという立派なホールでウィントン・マルサリス・オーケストラの演奏を聴きに行った時にも、楽団が奏でるジョン・コルトレーンの曲は洗練された現代音楽のようで、コルトレーンのエッセンスは全く感じられなかった。パンフレットにブラズラッと名を連ねるスポンサーの多さにも拘わらず高値のコンサートで、ジャズは既に「保存」されるべき存在になっているのだろうかと思つた。会場で白人の大学生四人を見つけ、なぜ聴きに來たのかと尋ねると、先輩に「これだけは聴いておくべきだ」とチケットを貰ったからだそうで、ジャズが好きなのではなく「教養」と捉えているのだつた。

今やジャズに往年の勢いはない。黒人の間ではラップやブラック・コンテンポラリーが主流になっているのだ。ニューヨークの書店や喫茶店、CDショップなど市内の一五〇以上の箇所で行手できるフリーペーパーの「オール・アバウト・ジャズ」副編集長は、私の問いかけに対し、ナシシー・ウィルソンをカーネギーで見た時には観客のほとんどが黒人であり、どこに行くかで観客の割合は異なると反論した。ジャズは元々音楽界に占めるシェアは小さく、ポピュラー音楽と

いうジャンルで見なければ以前と変わらず人気があると主張するのだ。ジャズのプロモーションを使命としているこの雑誌がジャズの衰退を認める訳はないと思うが、クリント・イーストウッドが言うまでもなく、ジャズなど聴かない、という黒人は多い。たまに「聴くさ」と言うので誰が好きか聞いてみるとケニー・Gやグローバー・ワシントンを挙げる。どうも歌が入っていないとジャズだと思っているフシがある。ケニーGはイージー・リスニング、グローバー・ワシントンはブラック・コンテンポラリーである。

ハーレムの「ビッグ・アップル・ジャズ」の従業員で詩人でもあるポープさんはジャズを聴く若者も多いと力説しながらも「ジャズはラップに比べると確かにわかりにくく、ミドルクラスの音楽と言えるかもしれない。わかるようになるまでは時間と教育が必要ね」とジャズの敷居の高さを認めている。その一方で「ストリートでもラジオでもラップは常に流れていてアクセスしやすいから若い層はラップに飛びつく。演奏が難しいジャズと違ってラップはストリートですぐにパフォーミングが出来るし」とラップの存在も否定しない。ジャズには奴隷制を思い出させる面があり、それを嫌う黒人も多いと教えてくれた。

いまどきのジャズミュージシャンが大卒なのに反し、ラップは楽譜が読めなくても作曲理論を知らなくても詩を書いてラップするだけのフリースタイルなら誰でもすぐに始められる。スト

リートや校庭でラップの練習をする黒人の子供も見かける。JAZZというラップの大御所も楽譜が読めないのにラップの技術のみで巨大な富と名声を手に行っている。そういうサクセスストーリーに惹かれ、子供はラッパーをロールモデルにする。一二五丁目でも流れるのはラップばかり。テレビ、ラジオ、インターネットでもラップが多く流れるのだから、これでは若い世代がに引き付けられるのは当然だと言える。

それにジャズの料金は高すぎて貧困層の黒人には手が出ない。数年前からエンターテインメントの料金が高騰しているのだがジャズも例外ではない。六〇ドルも七〇ドルも出してカーネギーホールにジャズのコンサートを聴きに行く黒人は少ない。ハーレムのクラブにも黒人の姿はない。私だけが高いと感じるのではなく、NYの地元局、NY1のジャズ特集の司会者も二〇ドルの入場料も(「レノックス・ラウンジ」は二〇ドル)、ドリンク二杯のミニマム(最低二杯注文)というシステムも(「シヨーマンズ」も同システム)高い、と苦言を呈していた。

その代わり、ジャズ・モービル主催のコンサートやグラント將軍の墓で催されるコンサート(どちらも無料)には黒人の姿が多い。五ドルのビールが高いからとチップを支払わないようなブルーカラーの黒人ならジャズ・クラブで四〇ドルも使わないし使えない。ハーレムという付加価値に釣られて高目の値段でも喜んで支払うのはツーリストばかり。どんどん観光地化するハーレムで

はツーリストプレス（ツーリストの行く店）と地元の黒人が行く店とがはっきりと色分けされて来ているようだ。

（註1）これはビリー・ホリデイが出演した唯一の貴重な映画。

（註2）映画のクレジットで見ると「MOTORBREATH」である。

（註3）リバーサイド・ドライブの二二三丁目にある。南北戦争の將軍であり、大統領職を二期勤めたユリシーズ・グラントと妻が眠るグラント將軍の墓（Grant's Tomb）は第一次大戦後が終わるまでは自由の女神よりポピュラーだったという。

シヨーンバーグセンター・フォー・リサーチ・イン・ブラックカルチャー

ニューヨークのBBキング・ブルースクラブ&グリルの出演者リストやブロードウェイのチケットのプロモーションメールに混じって「シヨーンバーグセンター・フォー・リサーチ・イン・ブラックカルチャー (Schomburg Center For Research in Black Culture)」という長たらしい名前の研究施設から、黒人文化やアウェアネスについての講義やシンポジウム、ライブ、展示会などのお知らせのメールが月に一度届く。非常にアクティブで、現地にいたら見逃せないイベントがたくさんある。近代美術館 (The Museum of Modern Art) がMOMAで通用しているように、こちらも頭文字を取って短くすればいいと思うのだが、SCFRBCだと語呂が悪いので皆、シヨーンバーグ、と呼ぶ。

今年の六月には「ザ・ラスト・ポエツ (The Last Poets)」の四〇周年記念行事の通知が来た。このグループの古いCDを一枚持っているが今聴いても彼らの闘志と情熱が伝わって来る。

「ハーレムについて知りたい」と言う人一〇人が一〇人とも「シヨーンバーグに行くといいよ」と口々に言うので(シヨーンバーグって何?)と気になりつつも毎日情報の収集とネット記事を

書く事に時間を取られ、帰国の日が一月を切るまで行きそびれていた。ようやく訪れた時には改修工事の真っ最中で、世界的な施設と聞いていたが、それにしては入り口が狭く（改装中で本来は裏口と後に知って納得）、看板がある訳でなし、わかりにくくて一度目は通り過ぎてしまった。二度目にアメリカ人と一緒に通りかかった時に「ここよ」とすぐに見つけてくれたが彼女が見つけてくれなければしばらくぐるぐる探し回ったと思う。あいにくその日は休館日でまたしばらく時間が経った。

場所がわかったので後日ノートを持って安心して出かけた。受付で名前を書き、狭い通路を通って狭い階段を登り、狭くて質素な閲覧室に入る。一体この狭い図書館のどこがすごいのか最初はわからなかったが、実はこれも改修中の一時的な場所だったのだ。後から考えると狭い受付で名前を書く時に年季の入った黒人男性の守衛と世間話が出来たりしてかえって良かったかもしれない。

閲覧室に入る時にはコートを脱ぎ、荷物を預ける。他の図書館では出入り時にバッグの中身を見せるだけで、荷物の持込みが可能なのだが、ここではすべてを預けなくてはいけない。ニューヨークのサービス業の人々にフレンドリーさを求めるのは難しいと思うが、コートチェックの

黒人女性は顔見知りになってもニコリともしなかった。ドアのない閲覧室の外でよくハミングをしていたが、私にはこれが気になって仕方がなかった。ここで荷物を預けてしまってから筆記道具やノートが必要な事を思い出し、(面倒な事だ)と愚痴を言いたい気持ちで引き換え券を見せてカメラから名刺からその日買った細々とした物など一切合財が入ったバッグを受け取り、がさごそと引つ掻き回す事がよくあった。

利用客はまず左手にある小部屋で写真入りアクセスカード(利用カード)というのを作る。パスポートがあれば館員がその場で作ってくれる。これさえ作ってしまえばどんな本でも見る事ができる魔法のカードである。蔵書の山を見た時には(しまった!)と後悔した。ここはとんでもない情報の宝庫だったのだ! 千里の道も一歩から、とどんな本を読んだらいいのかわからないまま、私は砂糖の山に取り付いた蟻の心境で、ハーレムの成り立ちを書いた本からびちびと翻訳し始めたのだった。

閲覧室は不思議な造りになっている。入って右手が高くなって、日によって変わる司書達が、その一段高い壇上から利用客を見下ろしている。お伺いを立てる時には二、三段これまた粗末な段を上がつて彼女達(中年女性が多かった)を見上げて話すのである。壇の前には「ここに入るな」

と書かれたサインが張ってあつて横柄な感じがしたものだ。実際横柄で感じの悪い人もいた。壇上には司書のアシスタントのような女性が二人いて、コピーは彼女らに頼むのだが、日本のきびきびした態度に慣れていると彼女らが大変スローで不熱心に見えてしまうのだ。帰国日が迫つて来た頃、翻訳済みのノートがカメラと一緒に盗難に遭つたり、金銭的にひっばくしていたり、蔵書の探し方も遂にわからず、カリカリしていたのがわかつたと見えて、一人がクスンと鼻で笑つた。（そんなに急がなくてもいいじゃない）と言ひたかつたに違ひない。これにカチンと来た私は「Do I amuse you?」（私が焦っているのを見て）楽しいですか」と皮肉を言つてしまった。日本だつたらかなりイヤな女と思われる事間違いないが、ニューヨークではこれぐらいは日常茶飯なので、それで後腐れが出来るという事もなかつた。

が、司書達の有能ぶりは特筆に値する。例えば「……入る為の二五セントも払えなかつた」という表現にぶつかつて、「二五セントは何の為に支払うの?」と聞くが早いか、「レント・パーティの代金ね」と教えてくれて、本の海に突進してピツと必要な本を抜き出し、「rent party」という項を指し示して見せるのだ。こんな優秀な司書を私は日本で見た事がない。困るのは本の貸し出しをしない事で、（戻つて来ないと困るような蔵書が多いからだろう）どの本も厚くて重い。ごくごく一部の資料しか見られなかつた。

帰国日の二日前に訪れた時には親切にしてくれた五〇代の黒人女性の司書に何かお礼をしたかったのだが、日本から持参した手ぬぐいや小物はあらかた配り終えて、和紙のしおりや箸置きしかなかった。それを渡すと彼女は喜んでくれ、「必要な情報は得られましたか？」と聞いてくれた。答えはノーだったのだが、それでは彼女の親切が無駄になると思い、「ええ、どうもありがとう」と答えると彼女は私の手を握った。痛いぐらい強い握り方だった。

ニューヨークの図書館は年ごとに「ベスト・ライブラリアン（ナンバーワン司書）」を選ぶ。改めて名前を聞くのをためらって遂に彼女の名前は知らずじまいになってしまったが、彼女が私にはベスト・ライブラリアンだった。

（註一）シヨーンバーグはニューヨークの公立図書館の一部でアフリカ系の文化と歴史に関する資料や文書、写真、芸術作品、フィルムなどが一千万点も保存されている。この分野では世界でも最高のセンターの一つとパンフレットにある。世界中から利用者が訪れるといい、「日本からも研究者が来るわよ」とフレンドリーな司書が言っていた。場所はハーレム・ホスピタルのすぐ近く、レノックス・アベニューの一三五丁目にある。二〇〇六年に創立八〇周年を迎えたというからハーレム・ルネッサン

ス期に開館している。この場所そのものがハーレムの歴史の一部なのである。二〇〇五年に始まった改修工事が終わるのは二〇〇七年一月と言っていたが、館員が「きつと遅れるわね」と予測した通り、確か春頃に完成したというメールが届いた。今度訪れる時には堂々とメイン・エントランスから入れる訳だ。

アーサー・シヨーンバーグ (Arturo Alfonso Schomburg) は一八七四年プエルトリコ生まれ。小学校の教師に黒人には歴史がない、ヒーローもない、偉大な出来事もないと言われた事に触発されて黒人の歴史の研究と書籍や印刷物、芸術品などの蒐集の道に進んだ。コレクションは手紙、手書き原稿、ビラ、といった物にまで及ぶ。彼は、人種差別と戦い、アフリカ系の黒人が世界の歴史に貢献した証拠を提供する事によって「我々の失われた遺産を再び手にする」という使命感を抱いていた。世界中から集めたレアなアイテムが充実しているが、彼自身は Benjamin Banneker's Almanacs のコレクションを自慢にしていたという。彼の蒐集物はNY公立図書館の黒人文学、歴史、プリント部門の土台となった。一九二六年には一万点のコレクションをカーネギー・コープの助力を得て図書館が購入している。それにより、ニューニグロ運動の学者や作家は彼の知識とコレクションの恩恵に浴する事になった。

(註2) 案内には「ラップ以前の厳しい時代のスピリットを反映した若者のグループの歌と詩は予言的で

感動を与える。ハーレムで一九六八年に生まれたザ・ラスト・ポエッツは人種差別、貧困、黒人の社会問題をスポークン・ワード（語り言葉）として訴え、多くの現代のアーティストに影響を与えた。多くの歴史家は彼らをラップのゴッドファザーと名づけた。生存するグループの四人を称えるこの催しにはジル・スコット・ヘロン（詩人／ミュージシャン）とアミリ・バラカ（作家／詩人）という二人の著名なゲストが招かれており、現地にいたのであれば必ず出席したのにと大変残念である。

（註3）

仮の閲覧室は元は劇場で、高い場所はステージだと聞いて合点がいった。駆け出し時代のシドニー・ポワチエ他数々の有名人がこの壇上に立ったと聞いた。シドニー・ポワチエと言えば私はすぐに「招かれざる客」と「夜の大走査線」を思い浮かべるが、「野のユリ」（一九六三年）で黒人として初のアカデミー主演男優賞を受賞した名優である。その後黒人の主演男優賞は「トレイニングデイ」（二〇〇一年）のデンゼル・ワシントンまでいない。「レイ」（二〇〇四年）のジェイミー・フォックス、「ラスト・キング・オブ・スコットランド」（二〇〇六年）のフォレスト・ウィテカーと二一世紀になつてからは受賞者が続出している。黒人女性初の主演女優賞は「チョコレット」（二〇〇一年）のハリー・ベリーで、感極まった彼女の受賞スピーチは記憶に新しい。「ビリー・ホリディ物語／奇妙な果実」（一九七二年）で主演女優賞にノミネートされたダイアナ・ロスは「キャバレー」

のライザ・ミネリに賞をさらわれ、授賞式会場で隣に座っていたシェリー・ウィンタースに「またチャンスがあるわよ」と慰められ、「ダメ、黒人の私にはもうチャンスはない」と涙にくれたという。二〇〇一年はハリー・ベリーとデンゼル・ワシントンがダブル受賞した「当たり年」で、ロバート・レッドフォードと共に名誉賞を受賞したシドニー・ポワチエは「実現するまで」時間がかった（Long time comin'）」という短いコメントを述べるに留まっている。ロングタイム・カミン、そして彼らの長い道のりはまだ続く。

（註4）二五セントはレント・パーティ（家賃を捻出するためのパーティ）の入場料。

Y M C A

Y M C Aはマンハッタン内に数ヶ所あり、私はかつて二〇丁目辺りにあったY M C Aのメンバーだった。古着屋を廃業して帰国する事に決めた私はアパートを引き払って店の裏の小部屋に寝泊りしていた。シャワーが使えなかったのがグリニッジビレッジの店から一番近い所のメンバーになったのだが、ここは年齢によって料金が異なるのだった。年齢をちよつと偽れば数十ドル安くなる事をパンフレットで知って、年齢を偽って利用カードを作ってもらった。年齢を確認できるIDはありますか、と聞かれて、「忘れてきたので明日持つて来ます」と言うとなんか見せろとは言われなかった。現在のようにセキュリティが厳しくなく、鷹揚なものだった。

Y M C Aという施設は大抵どこも古びているのだが、一三五丁目の6番街と7番街の間に建つハーレムのY M C Aも古びた雰囲気建物だった。宿泊施設としてはシングル五五ドル、ダブル六八ドル（季節によって変動）と手頃ではあるが、スイート以外は共同バスルームである。短期滞在なら泊ってみてもいいかと思うが東側からのアクセスは悪いし、ダウンタウンからはちよつと遠い。一二五丁目から外れると人通りが極端に少なくなり、寂しい雰囲気が漂い始める

ので、夜ウロウロするのも気が進まない。ジムとプールがあり、プールの一日無料利用券が近所のプリントショップに置かれてあったので一度無料で使わせてもらった。小さなプールだった。

一九四〇年まではインテリ、アーティスト、ライターの集う場所で、政治活動の中心地でもあったというが六〇年代には文化の中心地はグリニッジビレッジに移っている。現在のYMCAではタレントコンテストも行われている。ここで自信と度胸をつけてアポロ劇場のアマチュアナイトに出る者もいるのかもしれない。有料のアフリカンダンスのクラスがあるとところがハーレムらしい。

(註) Harlem YMCA (180 West 135th Street Bet. Lenox Ave. & A.C.P. Jr. Blvd)

<http://www.harlemjp.com/ymca.html>

番外「アフリカ人共同埋葬地」

アメリカ自然史博物館の隣にあるニューヨーク歴史協会では「ニューヨークの奴隷制」という二〇〇一年の展示会で、足かせや奴隷即売会のチラシなどのショッキングな資料を展示したという。南部の奴隷のみが強調されるが一七、一八世紀のニューヨークにも相当数の奴隷^{（註）}がいた事は案外知られていない。私も初耳だった。華やかで楽しいニューヨークの観光スポットの他に、北米最大のアフリカ人埋葬地（The African Burial Ground）にも足を向けて奴隷制について知って欲しいと思う。私も次回訪れるつもりである。

北米最大最古のアフリカ人埋葬地は一九九一年にロウアー・マンハッタンの連邦政府ビルの建設前に発見されている。見つかった遺骨はアフリカから奴隷船で強制的に米大陸に連れて来られた奴隷や自由黒人のものとみられ、一七世紀から一八世紀に埋葬されている。子供を含むおよそ二万体のものアフリカ系黒人の遺骨は、二〇〇年以上も前に埋葬されたにも関わらず彼らの生前の様子を雄弁に語るといふ。地中深く埋められたそれらの古い骨は状態が良く、アフリカのどの国が出生地なのかがわかる手がかりが残されている。まるでTVドラマの「ボーンズ」並みである。

四〇〇体以上の骨の中には厳しい労働が時には死に至った事を示す、首が骨折した物もあり、外傷も多く見られ、歯の状態からは栄養状態が悪かった事がわかれるという。奴隷達は活気のある港町としてニューヨークが発展するのに貢献しただろうと推測されている。(公式ウェブサイトを抜粋、意訳)

ブッシュ大統領は二〇〇六年にここを国定史跡に指定しており、二〇〇七年十月には記念碑の落成式が行われている。新大陸で生を終えた名も無き人々を慰霊する碑にはアメリカ、アフリカ両大陸の石が使われ、「失われ、奪われ、置き去りにされ、決して忘れ去られることのなかったすべての人へ」というメッセージが刻まれた。ブルームバーグ市長は「これはすべてのニューヨークとアメリカ人にとって大切な場所だ。この悲劇は我が国の歴史の一部なのだから」と語っている。

(註1) ニューヨークに最初に奴隷が到着したのは一六二五年頃と見られ、ピーク時には人口の二〇%を占めるまでになったという。

参考サイト 「骨は語る」知られざるニューヨークの奴隷／Bones reveal little-known tale of New York slaves」

<http://edition.cnn.com/TECH/9802/12/t/burial.ground/>

公式サイト 「アフリカ人埋葬地」には「未来を築く為に過去に戻る」と書かれてある。

http://www.africanburialground.gov/ABG_Main.htm

OPEI (The Office of Public Education and Interpretation 住所 290 Broadway) ではアフリカ人共同埋葬地についての講義を行っている。

http://www.africanburialground.gov/ABG_OPEI.htm

ハーレム探訪の旅は始まったばかり

手持ちのニューヨーク観光ガイドブックにはハーレムの情報がなく、また私の目的はハーレムの文化と人々を知る事だったのでハーレム探索を始めた二〇〇六年の夏には情報と言ってはアポロ劇場とレノックス・ラウンジ、それにジャズクラブを幾つか、というのが正直なところだった。ハーレムはゲットーというイメージを持っており、観光などなきに等しいと思い込んでいたのだ。実際には数多くの教会が散在し、ランドマーク的存在となっている素晴らしい教会もある。たくさんさんの公園もある。マルコムXの常宿だったテレサ・タワーズも現存する。ハーレムは歴史の現場なのだ。最近の名所の新顔は元大統領のビル・クリントン氏のオフィスだろう。彼に道でバッタリ会った知人は「ハロー、ミスター・クリントン」と挨拶したところ、「ハロー、ハウユードゥイン？」と気さくに返事をしたそうだ。何とものどかな街と人である。

ハーレムにはたくさんさんのソウルフード・レストランもある。黒人初の記念碑であるデューク・エリントンの像もあれば二〇〇八年の秋に完成予定のフレデリック・ダグラスの像もある。訪れてみたい場所はまだまだたくさんある。

私のハーレム探訪は始まったばかりである。

(註1) 一八四〇年オーブンと、最も古い公園のひとつであるマーカス・ガーベイ・パークや一九一一年オーブンの歴史的公園ジャッキー・ロビンソン・パークなどたくさんの公園がある。リンカーンセンターの西からモーニングサイド・ハイツの北端まで四マイル以上続くリバーサイド・パークもある。一二丁目のアムステルダム・アベニューにはアメリカ最大の教会、カテドラル・チャーチ・オブ・セントジョン・ザ・デバイン、通称セント・ジョンがある。

第五章 ニューヨークストーリー

ニューヨーク

なぜ私がノイローゼ寸前にまであつたような街に度々「戻りたい」と思うのか、なぜ私が黒人に惹かれたのか、それを説明する為に回り道をして古いニューヨーク時代の経験から語りたいと思う。

同じアメリカに滞在するにしても、アメリカ文化に晒された量によって文化の「習熟度」は異なってくるものだ。日本人の夫と郊外に住み、日本人のみと付き合い、喋る言葉は日本語だけ、日系のスーパーで買い物をし、日本食を食べ、TVは日本語放送という女性の一年と、アメリカの会社でアメリカ人の同僚と働き、英語で生活し、パートナーもアメリカ人という女性の一年ではアメリカという国との付き合いの深さが大幅に異なるのは当然である。付き合いが薄ければ受けるストレスやカルチャーショックは少ない。よって一概には言えないが、長くいられる。が、目一杯アメリカ文化に晒されて生きていけばいわゆる燃えつき症候群になる率も高くなる。私の場合もそうだった。

私は英語の習得が第一目的だったから、意識して日本人とはあまり「つるまない」ようにして

いた。日本人と過ごせば楽なのは当然だが、苦勞して貯めた貯金をすべて注ぎ込んでニューヨークに來たのだから子供の頃から憧れたアメリカから色々と学びたいと考えていた。

ロード&テイラーというアメリカのデパートに就職口を見つけたが、ヴィザがないのでは雇えないと最後になって断られた。ヴィザのスポンサーになつてくれるだろうというのは甘い考えだったのだ。ヴィザ、ヴィザ、ヴィザ、そして英語力。日本で大学を卒業してしようと、ニューヨークではウェイトレスの口を捜すのさえ難しかった。しばらくは日本のレストランや商社を転々としたが、運良くヴィザ不問のハンバーガー屋の口を紹介された。若かった私にもかなりのハードワークだったけれど、働いた当日から自分が担当したテーブルのチップが全額自分の手に入ったのが嬉しかった。当然と言えば当然の権利なのだが、ベニハナという日本レストランではいくら客が自分に「ビッグ・チップ」をくれたとしても新入りは一ヶ月ほどは一セントたりとももらえない。チップのドル札やコインはするりと私の手を離れて店側に吸い取られてしまうのだ。それをまとめて、長く勤めている者から多く再配分するというシステムが取られていた。こんなところにも能力主義ではなく、温情主義が取り入れられているのだ。いくらサービスを良くしても新入りの私ができるチップはすべて無愛想で客の受けが悪い年長のウェイトレスに横取りされるというシステムには納得が行かなかった。それが、アメリカのハンバーガー屋では働いたその日から

自力で得たチップは自分の物になるのだ。初日に一〇ドルのチップを手にした時はようやく自分の望むアメリカ的な生活がスタートして、疲れも吹き飛んでしまったのだった。

順調に見えたウェイトレス生活だったが、そこでも理不尽な出来事はあった。白人のマネージャーの一人にハンバーガーを一個タダで客に出したのではないかと疑われたり、カンボジア人の男性従業員に陰湿ないやがらせを受けたり、白人のウェイトレスにぶつかると思怒鳴られたりしたが、そんな事はガマンすればいい事だった。チェーン店の他店に欠員が出ると補充要員として誰かが回される事が月に2度ほどあったのだが、他の店に行けば時間のロスもあるし勝手がわからなくてチップが大幅に減るのでアメリカ人のウェイトレスは誰も行きたがらない。その役目は本来回り持ちなのだったが、新入りの私が二度続けて指名された。ダックという白人の店長に「私の番ではない」と抗議をすると「行ってくれないのでは辞めてもらうしかないな」と思いがけない事を言われた。意地の悪い脅しを吞んで仕事を続けるか、それとも辞めるか、私は、この先どうやって生活費を稼いだらいいのだろうかと考えより先に後者を選んでいた。悔しかった。フェアネス（公平さ）を大切にするアメリカで、アンフェアな目に遭うとはどういう事だろうか。デスクリミネーション（差別）という言葉が頭に浮かんた。ピエロのようなユニフォームを脱ぎ、救世軍の寮に帰った私は部屋で一人泣いた。

ヴィザは以前に勤めていた日本のレストランに相場の給料の半額ほどで雇われる代わりに申請してもらっていたのだが、そんなステイタスではアメリカの企業では働けない。そうになると、後はお決まりのピアノバーと呼ばれる日本式のクラブで働くしかなかった。アメリカの自由で開放的な日中の生活から、クラブのドアを開ければそこは日本の旧弊な価値観が支配する小さな日本。軍歌や演歌を歌い、男尊女卑を当然のように押し付ける駐在員や威張り散らし、ナイスに頼むのではなく、命令を聞かなければクビだと脅す店長がいた。自分が振り払ってきたはずの因習の具現者達に取り巻かれ、アメリカの基準と日本の基準との二重基準の中で生きる事を余儀なくされたのだった。

フラー・ブラシというアメリカのブラシ会社のセールスをやったり、集めた古着を日本のバーやレストランの従業員女性にさばいたりしてコツコツと貯金し、精神を引き裂くような生活からようやく逃れ、自分の店をオープンしたのがニューヨーク生活二年目だった。オープンすると同時に弁護士を雇って、ニューヨークに長期滞在したい者なら喉から手が出るほど欲しい永住権を申請し、それさえ取れたら生活はバラ色だろうと考えていた。この頃が一番充実した時期だったと思う。が、グリニッジ・ヴィレッジに店を持てたという高揚した気分が続いたのはせいぜい六ヶ

月だった。日々押し寄せる近所の貧困層のニューヨークカーと、日本人である自分との習慣や価値観が真つ向から衝突するような生活に、一年を過ぎた頃にはすっかりノイローゼになっていた。はるばる日本からやって来た母親が「キツネ憑きのような顔をしていた」と当時を振り返って言うほどの最低の精神状態だった。万引き、からかいや嘲笑、詐欺まがいと、店の失敗に至るまでに受けたニューヨークの悪意とでも言うべき仕打ちにほとほと嫌気が差して、ニューヨークにこれ以上住み続けたいのかと自問自答するようになった。

実際にそんな統計があるのかどうか、ツーリスト、ビジネスマン、学生以外の日本人がニューヨークに滞在する平均的な期間は四年という情報がある。何の目的もなくニューヨークを漂流する若者は何人も見て来たが、古狐のように意地悪かと思うと時に天使のような微笑を見せるニューヨークのイリュージョンに幻惑されてうかうかしていると、二年はすぐに経ってしまうのだ。

ストレスで失踪したあげく契約期間中に帰国した板前、ニューヨーク生活に耐えられずに妻が帰国した後、無聊を慰める為にピアノバーに入り浸り、離婚に至った銀行員。強制送還で否応なく帰国したウェイトレス。外国を転々としてから帰国したヒッピーのような女性。どんな形で帰

るにせよ、大抵の日本人はいつかは帰国する。日本レストランで朝から晩まで働く四〇代のコックは、週末を待ちかねてピアノバーに飛んで行き、日本女性と浮かれ騒ぎ、有り金を使い果たすのだ。家具もない粗末な下宿に酔って明け方に帰り、ベッドに倒れこむという生活を一〇年も続けていたが、ある日突然帰国した。一〇年は長いとしても、アメリカ人と結婚した者、ビジネスの基盤がニューヨークにある者などを除けば、国情が不安定な訳でもなく、世界の耳目を集めるような大きな人権問題があるでもない日本という故郷に戻るのだ。

ヴィザのない不法滞在者なら四年もいない。二年いれば長い方ではないだろうか。私の場合はびつたり平均値の四年だった。異国の寂寥目がけて襲ってくる強烈なホームシックは一ヶ月、三ヶ月、六ヶ月、一年と段々間遠になり二年も経つ頃にはすっかり消えて、帰る事など考えてもみなかったが、二年を過ぎ、ビジネスに陰りが出て来た頃、ふと長く居過ぎたのではないかと思うようになった。永住権を持ってニューヨークに一〇年以上住み続けている日本人はたまに日本に帰国すると、こうだった、ああだったと日本の状況をあれこれ報告した上で「もう日本には住めない」と口々に言う。彼らは日本に引き揚げようという気持ちなどさらさらしないのだ。それならニューヨーク生活は理想の生活かという、そうでもない。長年のストレスに晒されて半分精神を病んでいる者もいる。考え方もライフスタイルもほとんどアメリカ人で、日本の事情にも疎く、日本

語も怪しくなつて、日本に帰ると「もうあなたはアメリカ人ね」と言われる者もいる。日本人としてのアイデンティティも崩れ、かと言ってアメリカ人でもないという中途半端な生活をしている彼らを見てみると、これが私の将来の姿なのかとふと疑問を感じるようになったのだ。生まれ故郷に順応できなくなる恐れ、永久に帰れなくなるという恐れを抱き、すっかりアメリカ的な習慣や価値観に染まってしまう前に、適当なところで切り上げて帰国するべきではないかと焦る気持ちが出て来た。その一方で、ニューヨークに住んでいるのが何か特別な事のように思えるのが、日本に帰ればただの一人の日本人としてその他大勢の中に埋没してしまいそうでなかなか帰ろうという決心が付かなかった。

私が遂に帰る決心をしたのは、来る日も来る日も店でアメリカ人とがっぷり四つに組んで戦った生活に疲れ果てたからだだった。アメリカ人に学ぶべき目ばしい事も残っていない。何より、ポトリと木からりんごが落ちるように、アメリカに對する執着が消え失せてしまったのだ。帰る潮時がやって来たのだ。帰国の意志が固まると、航空券代を稼ぐ為にまたピアノバーに舞い戻った。いざ帰る段になってみると、いったん逃れて来た日本という国に尻尾を巻いて帰る踏ん切りがなかなか付かなかった。結局、残った商品の整理をしたり、日本に持ち帰って売る古着の仕入れなどをして帰国したのは店をたたんだ半年後だった。

それでも、ニューヨークでの四年間は有意義だったと思う。私はそこで重要な事を学んだ。女性参政権（アメリカ一九二〇年、日本一九四五年）にしても避妊用ピルの解禁（FDA承認一九六〇年、日本正式発売一九九九年）にしても数十年も日本に先じたアメリカの中心地であり、日本の近未来を思わせるこの街では、日本ではぼんやりとして実体がなく、実感する事もなかった民主主義という制度をそこかしこではつきりと目にする事が出来た。戦後、アメリカによつてたらされた民主主義は日本では六〇年ほどの歴史しかない。当時は全く新しい概念で、何の事だかわからない日本人に向つてアメリカのGI達は「パパさん、ママさん、皆同じ」とわかつたようなわからないような説明をしたという。アメリカでは一七七六年の独立宣言の中に個人の自由、平等という民主主義の基本的人権が謳われ、建国の理念に掲げられた自由平等の思想をアメリカ人は日々遵守し実践し、「アメリカはフリー・カントリー（自由の国）だ」とよく口に出す。それを踏みにじる行為は許されない。机上でいくら学んでも身に付かないこうした人間のバックボーンを形成する主義思想が自然に身に付いたのは何事にも換えがたいアメリカ生活の収穫だったと思う。

平等が目に見える卑近な例では、アメリカ人では超の付くセレブリティであっても高飛車だつ

たり横柄だつたりという事がない。ハーレムでクリントン元大統領が気さくに挨拶してくれたり、JFK空港でポール・マカートニーに会った知人が「ハーイ、ポール」と声をかけるとやはり「オー、ハーイ」と挨拶してくれたり、ウィル・スミスがニューヨークで「アイ・アム・レジェンド」撮影中にはファンに囲まれ、肩を組んで写真を撮ったりする場面に出くわした友人もいる。人間は人種差、性差については完全に実現していると言い難いが、有名無名、収入の多寡、地位に関係なく平等なのだという考えと態度が浸透しているから、いくら有名だろうが威張り散らしたり自慢気な態度は取らない。声をかける側の無名人も卑屈になる必要はない。翻って日本ではどうだろうか。日本のTV局でビートたけしに会った事があるが、私が話しかけると、周りの「お付き」が（話しかけるんじゃない）といった態度で追い払おうとする。同じ人間なのに上下の差があるかのような態度なのだ。

折りも折り、七〇年代は、一九六〇年代後半に始まったウーマン・リブ（註）（Women's Liberation）によって女性の権利が拡張した時代である。伝統的な女性のイメージは根本からくつがえされ、女性が働く事は当たり前となった。「言い返せ（Talk Back）」「はっきり意見を述べよ（Speak Out）」というスローガンの書かれたポスターを見たり、「解放されるって素晴らしい」「MCP（男性権威主義者）は最低」などという勇ましいメッセージを聞き、人々の会話の中や雑誌やTVに

溢れる時代の息吹きを呼吸しているうちに、それが自分の中に取り込まれ、自分というものを形成して行った事は確かである。

男女平等というシステムも掛け声や建前ではなく、手では掴めなくても月や太陽が見えるのと同じように、日常生活の中ではつきりと見えていた。女は男と対等に口を聞きあい、対等に怒鳴りあう。アメリカの男はそれに脅威を感じない。生意気な女だとも思わない。むしろ、何にでも耐えて自分の感情を押し殺す方が不自然だと考えている。メール・スープリマシー(男性優位主義)を「牛のくそ (bull shit)」とバツサリ切り捨て、男が与えてくれる恩恵に与ろうとして媚びたりへつらったりしないアメリカの女達達は当初、私には遠い存在だった。IBMに勤める日本男性がいて、上司が女性だと聞いた時には日本ではあまり聞いた事のない話で、「抵抗はないのですか」と聞いたものだ。三〇代の彼は抵抗感は全くないと明言するのだが、男性が女性の上司の下で働くなんて信じられない気がしたものだ。自宅でパーティを開けば裏方に徹して料理を作ったり皿を洗ったりするのが当然と心得る私に、「皿洗いは後で僕が手伝うから皆と話そう」と言ったアメリカの男性がいる。皿を洗う男性など聞いた事がなかったのに(当然だろう)というように笑いかける彼を、私はまるで新しい人類でも見るように仰ぎ見た。アメリカ人の言葉のひとつひとつはまるで天からの啓示のように私を打った。皿を洗ったり、ゴミを出す男性は当たり前だった。

それが三〇年前の話である。

意地の悪い独断的な日米の男性比較論をぶつつもりはないが、以下、私の男性観を大きく変えた体験談を披露したい。ここに挙げたたった数例だけですべての男性を一般化するつもりはない。あくまでも経験によって私が学んだ事を記しただけである。また、これ以外にも数限りない似たような例を見聞きしている事を付け加えておきたい。

ニューヨークで、私は日本とアメリカの男性の暮らしぶりを目にする機会を期せずして与えられたが、それは日本人男性の再評価をする機会でもあった。ある三〇代の日本男性のアパートの台所は汚れた皿の山で、玄関には脱ぎっぱなしの靴が何足も散乱している。寝室にはカーテンもかかっていず、ベッドメークもされていない。仕事に行って戻って寝るだけの生活を饒舌に語る寒々とした惨状である。これが一流大学を出て有名商社に就職し、エリートと呼ばれる男の夢の海外赴任の実態なのだった。IBMに勤める三〇代男性のアパートも似たり寄ったりで、日本の女2人を招待しておきながら何ひとつもてなすでなく「何か料理を作つて」とせがむのだ。部屋は商社員よりは片付いていたが、センスも何も感じられず、やはり殺伐としている。一方、アメリカ人のTV局のプロデューサーのアパートにはメイドが週に一回入り、きちんと整っている。

それだけでなく、インテリアのセンスも良く「ビッグバンドならデューク・エリントンだね」と音楽にも造詣が深い。台所に立ってフルーツを切ってナッツとセットしてワインを開ける手際の良さには感心した。アメリカ人男性から自宅に夕食に招待された時には、料理の出来ない恋人に代わって見事なローストビーフを焼いてくれたのは彼だった。（女性が料理ができないなんて！）（男性がこんなに素晴らしい料理を作るなんて！）と、私には驚き以外の何物でもない。カルチャーショックなどという生易しいものではなかった

同じ年頃の男性で、同じ年数の教育を受けて、どこでボタンが掛け違ったのか、どうしてこうも違うのか、男は料理が出来なくて当然、部屋の片付けもできない、自己管理能力なんてないものと思っていた私は、料理もできれば家事もこなすアメリカ人男性を見て、家事という最も日常的な生活シーンで男女平等が実践されているのを見て、男性^(註2)に対する意識が大きく変わって行つた。

ニューヨーク生活では重要な事も学んだが、学ばずに済むものなら学びたくなかった事も学んだ。その最たるものが人種差別や偏見である。異民族との交流が少ない日本人は他民族に関心が薄く、シビアナ人種差別はないと言われる。日本国内に居住する他人種の割合も少なく、人種差別問題は人種絡みの事件でもない限りあまり大きく扱われない。地方出身の私もアメリカ人と接

触するチャンスはほとんどなく、人種や人種差別には疎かった。人種差別問題をアメリカ人の白人と黒人に限定してみると、日本人は彼らをアメリカ人、または「ガイジン」として認識し、白人や黒人という区別はせず、いい意味で人種^(註3)に無頓着だと分析する者もいる。

日本での唯一の「人種差別のレッスン」は子供の日の遠い記憶の中にある。仲のいい同級生が北朝鮮出身者で、後に母国に帰国したが、クラス男子が彼女を遠巻きにして、朝鮮人は唐辛子が好きなのところが日本人と違う、といった事をフシをつけて囃したてるのである。人種にも差別にも免疫のない私は、これは一体どういう事なのだろうと全く理解できなかった。が、いつも勝気な彼女が、その時だけはうすら笑いを浮かべている男子を悔しそうに睨んでいるだけで、子供心に何も聞かずにそっとしておいた方がいいと察して、その件について話す事は一切なかった。この差別のエピソードは今でも時折思い出す。明治以降の中国人や朝鮮人差別はそれ自体大きな歴史問題であり、その中には関東大震災時の朝鮮人虐殺というおぞましい事件も含まれている。ニューヨークで流暢な日本語を話す初老の韓国人に出会った時にはうかつな事にかつて日本が韓国を併合して日本語教育を施した事を忘れていたのだった。私が忘れたこの歴史のひとつまは彼らにとっては忘れたくても忘れられない出来事である。久しぶりに日本語を話せる事が嬉しいのか、彼らは始終笑顔だったが、私にはどこか痛ましく思われ、いたたまれなかった。

アメリカに渡る前には人種差別はもうない、と聞かされ、それを信じていたのが、行ってみれば黒人差別だけではない、WASP^(註4)以外はすべて差別の対象と言ってもいいぐらい多くの国籍、多くの人種が差別を受けている事を「学んだ」。私は一つずつ「人種のレッスン」を受けたのだ。レッスン・ワンはイギリスとオーストラリア人だった。ニューヨークに到着して一週間ほどはタイムズ・スクエアにある安ホテルに滞在した。一泊五ドルで、大きな部屋に六台ほどのベッドが入り、イギリス人、オーストラリア人などのツーリストが滞在していた。皆それぞれ観光で忙しく、じつくりと話した事はなかったが、オーストラリア人女性がイギリス人女性の事を気取っているとか我慢できないとか、彼女がいない時に私に陰口をきくのだった。そのイギリス人は感じのいい女性だったので私には彼女の気持ちがよく理解できなかったのだが、世界史で習ったイギリスとオーストラリアの関係をハツと思い出した。オーストラリアはかつてイギリスの植民地だったのだ。好感を持ってないのも当然かもしれない。もしかしたらイギリス人女性は私などにはわからないやり方でオーストラリア人女性に対して優越感を抱いているような態度を見せたのかもしれない。海外に出た途端、世界情勢や世界史が生きて来て、否応なくそこに巻き込まれるのだとこの時知った。

ホテル滞在中にたまたま知り合った白人男性がレストランに招待してくれた。英語の不自由な私に大変親切にしてくれて、今までに食べた事のない珍しい料理をごちそうしてくれた。「ここはどんな料理店なのですか」という単純な質問に、彼は「後で話すよ」と声をひそめた。店を出てから彼はそこがジューイッシュ・レストランであり、自分はジューイッシュ（ユダヤ人）だと重大な秘密でも打ち明けるかのように話してくれたのだが、それがどういう事を意味するのか私にはさっぱりわからなかった。ナチスによるユダヤ人の迫害は「アンネの日記」も読んだし、当然世界史で学んでいるが、それは第二次世界大戦中の事であり、ユダヤ人の迫害は遠い昔に終わったと思っていたからだ。「紳士協定」という古い映画がユダヤ人差別を扱っているが、このようなあからさまな差別は一名ジューヨーク（註5）と言われるほどユダヤ人が多いニューヨークでは見聞きした事がないが、ユダヤ人であるというアイデンティティを隠す人がいるのも事実だった。また、ユダヤ人であるウディ・アレンは度々映画のセリフの中でユダヤ人は差別されているとジュークにまぶして語っている。

白人と一くくりに言っても、WASPを頂点としてヨーロッパ各国の白人のステイタスがあり、下とされる国については蔑称やジョークが数限りなくあるのだった。白人の下に位置するのが黒人やアジア人そしてネイティブ・アメリカンやラティーノのマイノリティ（少数民族）で、マイ

ノリテイという言葉にさえ敏感に反応する黒人もいて、人種の複雑さを思い知らされた。七〇年代のニューヨークには現在のようにラテン系が多くはなかった。当時ラテン系と言えばプエルトリコ人だった。四〇年代から移住が始まり、私が住んでいた七〇年代の人種のヒエラルキーでは一番下に位置するのが彼らだった。仕事といっはレストランのバスボーイや皿洗いで、ウエイター／ウエイトレスという職さえ得られなかった。現在は小柄で無口なメキシコ人が多い。

日本では人種差別をされる事がないので他ならぬ日本人差別について考えてもみなかったが、黄禍論や第二次大戦中の日系人の強制収容や、広島と長崎に原子爆弾を落としたのは黄色人種だったからやれた事で白人種の国であれば落とすのをためらっただろうという意見などもある。実際には私が日本人だという事で手ひどい差別を受けた事はなく、せいぜいアメリカ人ならされない嫌がらせを職場で受けたとか、白人の優位性を誇示するさまがほの見えて鼻に付いたり、差別とも言えないほどの曖昧な仕打ちを受けたぐらいだが、それでも段々白人男性へのうすら寒い不信感^(註7)が募っていったように思う。

(註1) フェミニスト／活動家のグローリア・スタインムが設立者の一人となって「ミズ(Ms)」という雑誌が創刊され、人気を博したのもこの時代である。今やアメリカでは普通に使われている「ミズ」は、

未婚、既婚にかかわらず女性一般に対する呼称で、グローリアは古くからあったこの敬称を広めるのに貢献した。この革新的な雑誌は、日本で家庭内暴力という言葉が登場するはるか昔の一九七六年にアメリカで初のDV（ドメスティック・バイオレンス、家庭内暴力）の記事を特集した。夫婦間にも強姦罪は成立するなど、男女間の問題提起がなされ、罰則が制定されるのはいつも欧米が先である。定期購読していた「ミズ」にはフェミニストの子供の為の童話というシリーズがあった。女性の自立というテーマが盛り込まれた新しい童話で、そこに出てくるお姫様は王が婿となる王子を決めるのではなく、お姫様自身が基準を設けて自ら選ぶという筋だった。一九八一年にはコレット・ダウリングが「シンデレラ・コンプレックス」の中で、女性の男性への依存願望を提唱、指摘しているが、「ミズ」の童話はそうした既存の古い価値観を打ち破る新しいものだった。私自身シンデレラ・コンプレックス症候群だったが、「ニュー・ウーマン」「コスモポリタン」などという時代の息吹を伝える雑誌を読んでいるうちにその内容が自分の価値観に組み入れられていった。日本では知らず知らずのうちに男尊女卑の考えに取り込まれていた私は、日本にいたままでは日本的な考えから自力で抜け出すのは非常に難しかったと思う。

(註2) 今もって家事の八割九割は妻だという日本だが一割二割でも分担するだけまだマシかもしれない。日本の男性は、いまだに炊事はしない、できない、したくない、掃除洗濯もしない、皿洗いもゴミ

出しもいくら頼んでもしないような、自己中心的で自己管理能力と生活技術のない人が多いのだ。母親が生活者としての訓練を受けさせないのか、炊事洗濯などは女のやる物だと決め付けているのか、私はその両方だと思っているが、その結果として働く女性に大きな負担を強いることになる。同棲、又は結婚した途端、男性が日常の雑事から解放されると反対に女性の仕事が増えてしまうのだから。これが、仕事を持つ私が日本人のパートナーを選べない理由のひとつだった。

ゴミ出しはアメリカでは家事の中でも象徴的である。駐在員の夫がゴミ出しをしないのを見た近所のアメリカ人の妻達は（ゴミ出しは男の仕事なのに）と不思議とも奇異とも受け取るのだ。

（註3）有吉佐和子著「非色」を読んでも、戦後、GIと結婚したいわゆる戦争花嫁と呼ばれる日本女性達

が人種に無知または無頓着であった事が窺われる。つまりアメリカに渡るまで、アメリカ人とは戦勝国の強者であると思っていて、戦後日本の惨めな暮らしから逃れてニューヨークに来てみれば、そこには人種差別があり、自分の結婚したラテン系の夫の惨めな生活を体験して愕然とするシーンが描かれている。また、日本で黒人と繁華街を闊歩する若い女性を「ぶら下がり族」などと呼びはしても面と向って他人種と付き合う女性を侮辱する男性は皆無だった。

（註4）白人、アングロサクソン系、プロテスタントを略してWASP（ワスプ）と呼ぶ。

(註5) ユダヤ人の容貌の特徴である黒いカーリーヘア、濃いひげ、カギ型の鼻を持ち、名前もユダヤ系なのに絶対違うと否定する男性がいた。日本人ならわからないと思ったようだ。韓国語と日本語と英語どれもが不完全で、ルーツは韓国にあると思われるのに日本人だと主張する女性もいた。東京六本木界限にもアメリカ人だと偽るアフリカ人男性がいる。その方がモテるからだろう。

(註6) いまやジェニファー・ロペス、ジョン・レグイザモといったブエルトリコ人の人気俳優が活躍する時代になっている。あと何世代か経てば必ずメキシコ系のハリウッドスターが生まれるだろう。アジア人ではブルース・リー、ジャッキー・チェン、ジェット・リーなど中国系のアクションスターが有名だが、セックスシンボルとは見なされない、自分達だつてロマンチックな役をやってみたいと言うアジア系俳優がいた。日本人で大スターと呼べる者はいないが、ハリウッドの歴史をさかのぼれば早川雪舟やナンシー梅木といったスターがいた。

(註7) 日本人男性に対しては少し事情が違ふようで一緒に歩いている時に「ジャパニーズ・サッカー! (日本のマヌケ野郎)」と呼ばれた事がある。女性だけだつたら絶対に言わなかっただろう。

T O K Y O

大不況下のニューヨークでサバイバルに明け暮れた私は、帰国時には、燃え尽き症候群のような無力感と、これでつらい状況から逃れられるという安堵感を同時に感じていた。（これで人種差別からは逃れられるけれど、今度は女性差別か）と憂うつな気持ちもあったが、帰るからには覚悟しなければいけない。（そんなに悪くはないよ、きつと）、自分にそう言い聞かせて仮住まいをしていたニューヨークのピクウィック・アームズホテルで引越し荷物をまとめた。嬉しいばかりの帰国ではなかった。

羽田空港に矢折れ刀尽きた感で到着した私を妹とその家族が出迎えてくれた。空港の外に出た途端、長い不在ですっかり忘れていた湿気の洗礼を受けた。全身を濡れた綿菓子で包み込むような真夏の強烈な湿気はからりとした気候のニューヨークに慣れた身には耐え難く、その後何年も慣れる事ができなかった。「気候は人を作る」という諺通り、この気候の差が両国の国民の「肌触り」のようにも感じられた。

取りあえず、当時六万円ほどの1DKのマンションを西麻布に見つけて落ち着いた。ニューヨークのステューディオ（ワンルーム）という最小の形態のアパートよりもはるかに狭く、広い場所に慣れた目にはマッチ箱にしか見えずに閉口したが、日本文化のマユに保護される心地よさの前には取るに足らない事だった。

しばらくは外国人ツーリストのようなもので、TVを見ても誰が誰だかわからず、四年間あまり使わなかった日本語よりも英語の方が楽だと感じる時もあったが、食べ物美味しい深夜でも女一人で外出できる。危険な街から解放されて東京の生活を謳歌していた。くどくどと説明しなくとも日本人同士、すぐに分かり合えるのも同国人の恩恵だった。同性ながら当時の日本女性には素晴らしかった。ドライでがさつなニューヨーカーと違い、情に厚く、思いやりがあり、気遣いがあり、礼儀があり、日本女性には世界に通用する国際通貨だと言われるのも当然だという気がした。こうして一年ばかりは珍しさもあり、時には日本人の感覚がエキゾチックにも思え、面白おかしく生活していた。私は日本人とうまくやっていた。古着の取引先などは、私がちよつと変わっているのはニューヨークにいたのだから仕方がないと思ってくれているようだった。問題はなかった。何と言っても私は日本人で、日本で暮した月日の方がはるかに長いことから、日本でうまくやっていけないはずはないと信じていた。これが私と日本の短い蜜月期間だった。

一年を過ぎる頃から何だか気分がすぐれない日が続くようになった。うつ気味だという自覚はなかった。ただ何故だか気分が重苦しい。何をしても何を見ても面白くない。TVのお笑い番組を見てもちっとも笑えない。

ニューヨークに行く前に新宿の狭いアパートに住んでいた時には、ひと月に一度ぐらいの周期でうつ状態に陥った事を思い出した。その状態が煮詰まると、私はマル・ウオルドロンというジャズ・ピアニストの「レフト・アローン」という暗い曲をかけて思いきり泣く事になっていた。そうするとまた次の日から何とか日常生活を送る気力が戻ってくるのだった。ジャズのプロモーターの会社で電話番号のアルバイトをしている時には人の目を見られなくなるという経験もした。日常生活は問題なく送れるのだが、知らない人はもちろんの事、友人でも目を合わせるのが怖いのだ。視線を避けて話すしかなかった。それは神経症の一種で、対人恐怖症の中で視線恐怖症と呼ばれる病気だと教えてくれる人がいた。今思えば将来の見えない不安に苛まれていたのが原因だったと思う。アルバイトを止めるとすぐに直った。

ニューヨークから帰国してうつ状態になった理由は今ならはつきりとわかる。日本が息苦しい

のだ。精神の流れがせき止められてしまうような閉塞感の原因のひとつは、帰国する時に懸念した女性差別だった。やはり男尊女卑は生きていた。ニューヨークでは（この人は人種差別をする人だろうか）と相手のしぐさや言葉つき、表情から絶えず探っていたのが、今度は日本で（この人は女性差別をする人だろうか）と探るようになっていた。年齢が上がって来てからは年齢差別も加わった。日本での些細な偏見や女性蔑視は何も目新しい経験ではなかったが、今までなら見過ごしていたような事でも、男女平等の進んだ国からもどってみるとはつきりと見える。ほんのわずかのほのめかしや囁きも、積もり積もって時に耐えがたいほどの重さで押し掛かってきた。

新聞記事を読んでさえしつくり来ないのだ。例えば「夜間学校を卒業した」主婦もエライが、それを『許した』夫もエライ」という記事に、（自分がやりたい事をするのに何故配偶者の許しを得なければいけないのか、得なければいけないのは協力ではないのか）と反感を感じるのだ。

自分の国は自由の国だとアメリカ人は信じている。では日本は自由の国だろうか。そうだとしたら自由の国から帰って来て私が息苦しい、生きにくいと感じたのはいかなる理由によるものなのか。アメリカでは「誰でも意見を言う権利がある（Everybody is entitled to an opinion）」が常套句である。日本には意見を言う自由がないかのようにだった。特に男性に対しては。人と異なる意見な

ど論外だった。日本では男性に反論し、大勢の意見に従わない者はバッシングされる。女性が男性にズバズバと物を言ってはならないという暗黙の行動規範があり、それに反すれば「男を男とも思わない」と糾弾されるのだ。

ロンドンに住んでいた日本の男性とささいな事で意見が食い違った事がある。人間が皆同じ意見を持つ事は稀だろうし、また持つべきだという押し付けは人の自由を奪う行為である。意見が食い違ったら「あなたはそう考えるのですね、でも私はこう思います」と受け流すのが会話術、交際術である。ところがその男性は「だから女はダメなんだ!」と私をダメ人間呼ばわりした。人を侮辱し、他人の意見を尊重できないこういう男性こそがダメ人間ではないのか。私の表情が変わった時に「空気を読んで」歩み寄ればその場は収まったのに、彼は自分の言動には何ら問題はないと思っていたのか、それとも女に謝った事などないのか、無言だったので、彼を含めた三人の日本人男性に不愉快だから出て行つて欲しい、と伝え、それきり会った事はない。どうして楽しく会話をするというカンタンな事が彼らには出来ないのか。異なった意見を言ったからといって、男のエゴを打ち砕こうとしている訳でも何でもなく、それは私が単に異なった意見を持っているに過ぎない。そしてそれはそう珍しい事ではないのだ。

表現の不自由だけでなく、日本では行動の自由も制限されている。自由に振舞おうと思っても女性には期待される行動、暗黙の不文律があり、「世間」は意識的、無意識的にそれを女性に押し付けているのだ。見えない基準から外れた行動をするとKY（空気が読めない）だとか女らしくないなどという攻撃を受ける事になっている。これら単一の価値観の押し付けは相当なものだ。新聞のアジアのどこかの国の女性兵士が花を口にくわえている新聞の写真のキャプションに「（兵士ではあっても）女性らしい」と書かれてあって、花をくわえていれば女性らしいのか、男性がくわえれば女々しいのか、なぜ兵士が女性らしくなければいけないのか、と一々引つかかるのだ。絶えずいつ結婚するのか、女性は結婚するのが幸せだ、結婚しなければ晩年さびしいなどと、特に親しくもない人からも結婚を強要されなくてはいけないのか。一度断りきれなくて人生初のお見合いをしたが、会って一時間ばかりのストレンジジャーが「すぐに結婚して家に入ってくれ」と言った時には鼻白んだ。家事をしてセックスに応じてくれる女なら誰でもいいと思っていたのだろうか。バカバカしく苦々しかった。

六本木のある有名な喫茶店に女性三人男性二人で入ってカレーを頼んだ時にはなぜか男性にはスプーンが、女性にはフォークが出て来た。女三人は不思議に思い、「なぜフォークなんですか」とウェイターに尋ねたところ、女性がスプーンで大きな口を開けて食べるのは少々見苦しいかと

存じまして、とか何とか呆れた理由を付ける。スプーンを持って来てもらったのは言うまでもないが、男性はOKだが、女性はダメ、というダブル・スタンダードはウーマンリブで糾弾された悪習である。特にフェミニストでもない女連中も妙な押し付けだと感じたのだから今日の日本ではもうこんな店の方針に共感する女性はいないだろう。アメリカではハンバーガーや厚いサンドウィッチなどを女性達は他人の目を気にせず大きな口を開けて頬張っている。大きな口を開けて食べてはいけない、パクリと食べ物をかんだ時の歯型がみつともないから端をかじって歯型を目立たなくするのが女性らしいマナーだとか、女性だけに押し付けられる規範や習慣が根強く残っている事を知って愕然とした。

日本には自分の好きな男性と交際する自由すらないようだ。一〇歳ほど年下の男性と付き合っている時には「皆、笑ってるよ」とその男性の上司に非難された。皆、とは誰だろう？ 何を笑っているというのだろうか？ 私はそこで恥じて交際を止めるべきだったのだろうか。お互いの合意の上に交際していたというのに。こういう時、アメリカの女性なら必ずこう言う。

「あなたには関係ない」

私はこの常套句を使わず、

「どうぞ、笑ってください」

そう答えて彼に引き取ってもらった。

小さな事かもしれないが、アメリカにはどんな洋服でも着る自由もある。が、日本ではそんなささやかな自由も贅沢というものだった。ニューヨークでは両サイドに深いスリットが入ったロングドレスだろうが、ネックラインが深くくいこんだブラウスだろうが、何の迷いもなく買っつけていたのが、日本では買おうという気持ちにブレーキがかかるのだ。（こんなドレスを着てどこに行けるのか）（ジロジロ見られないだろうか）（痴漢に遭いそうだからパスしよう）、そういう声に従って、私はセクシーさのかけらもない安全な洋服を選ばなければいけないのだ。アメリカで買った、ノーブラで着るベアバックのドレスやスリットのロングドレスなどはすべて処分してしまった。不快な目には遭いたくない、変な注目などいらない、レープされたがつているなどとトンチンカンな男は惹き付けたくない、そういう一心から洋服好きの私はすっかりおしゃれをしなくなつて久しい。ニューヨークの中の小さな日本であるピアノバーで働いていた友人は普段はノーブラなのだが、勤めに出る時には必ずブラジャーを付けていた。体の線が出ると日本の男性客に不愉快な事を言われたり、ひどい時にはサツと撫でられたりするからだ。女性美を誇示する事は悪い事ではないのに、評価するのではなく、性的対象物として見られるのはセクハラを受けているのと同じ事である。男性が心から賛美しているのか、それともワイセツな事を考えてい

るのが女性にはすぐにわかる。

Dカップの豊満な胸を持つ友人は、胸が極力目立たないような服ばかりを選んでた。なぜなら夜帰宅する時に痴漢に遭うからだ。また、地毛の金髪があまりに人目を惹いて夜道で危険な目に遭い、わざわざ茶色に染めたアメリカ人女性もいる。せつかくの魅力も発揮できない日本。悲しい話だし、何かがおかしい。

日本で我慢がならない事のひとつがセクシュアル・ハラスメント（セクハラ）だった。考えてみれば、小学生の時からスカートめくりをされ、性的ないやらしいほめかしや女性の生理への茶化しなどを受け、大人になってからは電車や映画館の中の痴漢に始まり、後を付けられたり、夜道で後ろから恐ろしい勢いで抱きつかれたり、お尻を触られたり、卑猥な言葉で貶められ、セックスを強要された。セクハラ被害は、女性であれば多かれ少なかれ受けていると思う。その結果、女性が受け取る暗いメッセージがある。

「男は皆オオカミ」。

本来睦みあい、助け合つて生きていくべき存在なのに、男性から性的、精神的に利用され濫用されている（USED&ABUSED）せいで、女性には男性に対する尊敬の念を持てず、信頼感を持ってないでいる。電車の中で雑誌のグラビアヌード写真や、「姦^やつてやる」などというセリフ入りの強姦を奨励するかの如き破廉恥な漫画雑誌を広げて読んでいる者をどうやったら尊敬できるというのか。未熟な若者などではない、熟年の男性なのだ。腹に据えかねて「そういう雑誌はご自宅で読んだ方がいいんじゃないですか」とまで言つてみた事があるが、「いえ、別に」とその五〇代男性は恐縮するそぶりも見せない。職場に水着の女性のポスターやカレンダーを貼つてもセクハラに当るのだからこれも職場だつたら立派なセクハラである。男性タレントが得々とTVでソープランドに行つた話をしたり、時の総理が夢精の話をする。鏡を使つてスカートの中を覗き見したり、トイレで盗撮をしたり、上から下まで何と品格のない男達が日本には跋扈^{ばつこ}しているのだらう。

痴漢も猥談も女を貶めるセクハラ行為なのに、いつまで経つてもなくならない。エッチな話は男同士でやつてくれ、女達がそう言つたとしたら、即止めるべきなのに、ぬくぬくと男性権威主義国家に納まつている男達は、女達の怒りにも痛みにも気が付かない。鈍感さはセクハラのみならず女性差別にも人種差別にも及ぶ。その鈍感さを、日本の女もアメリカの女も同じだろうと見

くびつてアメリカにまで引きずって行くから三菱自工や米国トヨタの元社長のセクハラ事件というみっともない事件が起こるのだ。

ところで日本の年齢差別の習慣は法令よりも強いようだ。アメリカではとくに廃止されているレジヌメ（履歴書のようなもの）への年齢記入も日本ではまだ必須だし、雇用における年齢制限は違法と定められたにも関わらず、相も変わらず年齢制限が行われている。

日本に帰ってきた途端、「何歳ですか?」「結婚していますか?結婚しないんですか?」と、本来なら「プライベートな事を聞いてもいいですか?」と確認してから聞くような質問をいきなりぶつけられた。そのうち日本男性の理想の女性とは巨乳でオバカな娘という像が浮かび上がって来た。当たらずと言えども遠からずだろう。女性たるもの必ず結婚しなければいけないし、しない者は「負け犬」というスタンプをペタンと額に押されて社交の世界から葬られてしまう。年齢は単なる数字だと言うアメリカ人がいる一方で、日本の男性は年齢をあげつらつて女性を貶めるのに余念がない。先入観、偏見、そして差別。他人をあるがままに受け入れずに姑息にジャツジする。

振り返ってみれば二〇代から既に私は年齢差別の亡霊に悩まされていた。女は二五歳にしてク

リスマスケーキになる。つまりクリスマス当日にケーキを買う者はいない、それと同じで二五歳になった女性も売れ残り、三〇歳は最終電車、それを逃したらもう後はない。三〇代などもうおばさんだ、もう女として価値がない。そういうメッセージに取り巻かれ、潜在下にネガティブな自己否定を植えつけられていく。私も三〇歳を迎えた頃（自分はもう若くない、男性からも社会からも望まれない存在なのだ）と強く意識するようになり、随分とネガティブで投げやりな気持ちで過ごしてしまった。年下のアメリカ人男性と交際していた知り合いの日本女性には私よりさらに強い、抜きがたい年齢コンプレックスがあり、いくら彼が年齢は関係ない、と説得しようとしても結局は無駄で、関係も破綻してしまった。不幸な事だ。今振り返れば三〇歳の私はまだまだ「ヤングレディ」だったし、現在の私だって八〇歳になれば（若かった）と思えるに違いない。何歳なのか、その年齢ならこう行動すべきで、服装はこうあらなければいけないなどくだらない決め付けをせず、楽しく過ごせばいいのに「世間」はそれを許さない。年齢など気にせずに暮らせていたら私の人生の満足度は三割方アップしたと思う。

権威を嵩にきて威張りちらす上司、妻を怒鳴りつける夫。自由や平等を踏みにじるモラル・ハラスメントの悪影響も甚大だ。人込みの中で女性を罵倒したり、ネチネチと陰険に言葉で痛めつける日本の男を見て、アメリカ人女性の友人は「腹が立った。私より体格が小さかったから本気

で殴つてやろうかと思つた」と何度となく私に向つて話すのだ。彼女は黒人女性で差別や偏見とは徹底的に戦う。常にポジティブに生きていきたいからネガティブな人間関係は即、切る。私が原稿の締め切りの追われている時に「何か作つて」とおなかをすかせた男性に言われたら「しょうがないなあ」ときつと私は台所に立つたと思う。あなたならどうする？ と聞くと、「餓死しな (Starve) と言ひつやるね」と笑いながら答えたものだ。

カナダ人の男性は電車の中の痴漢行為に文字通り激怒し、痴漢を働いた男を殴つたという。暴力による解決の是非は措くとして、こうした侮辱的な言動や行為を日本女性は我慢したり見過ごしているのだ。一九八四年ジェラルディン・フェラーロが副大統領候補としてウォルター・モンデールと組んで立候補し、ロナルド・レーガンに敗北した時に、「女性はもう二流の市民ではない」と高らかに宣言したが、日本ではいまだに女性は二流の市民扱いをされている事にもっと気付くべきである。ハーレムで私がかけた日本人男性が挨拶をしなかった事を「デイスリスベクト (無礼) じゃないか」とアメリカ人が言つたけれど、そんな程度でデイスリスベクトなら、日本中、デイスリスベクトだらけである。

日常の随所でヘドロのように噴出すネガティビティにも随分と悩まされた。日本がどれだけネ

ガティブかという例を挙げると、電話をしてだれそれさん、いらっしやいますか、と聞いたとすると、「いないと思いますけど……あ、いました」となぜか先に否定する。いるかないかわからない時点では先方に失望を与えない為、「見て来ます、少々お待ちください」とせめてニュートラルな言い方ができないのだろうか。「いや」という間投詞も非常に多い。肯定する時でさえ、頭に「いや」を持つてくる。靴の修理店に留め金の取れたサンダルを持ち込んだ時には「こういう口金はないねえ」と言うのでがっかりしていると、がさごそと引き出しの中を探して「これどうかね」とサンダルにぴったりの口金を取り出したのだ。たまたまあったのだろうか、なぜそういつも否定的な事を言わなければいけないのか。どうしてもっとポジティブになれないのか。期待されると困るから失望させるのが日本の伝統だともいうのだろうか。

日本は本来ポジティブな人間をもネガティブに変えてしまうようだ。帰国当時、私はニューヨークから持ち帰った古着やアンティーク類を都内の業者に卸していたのだが、原宿のコーヒーショップのオーナーが店の外で古着を売ってもいいと言ってくれた。原宿というファッショナブルなエリアでどんな反応があるのか展示してみる事に決めたのだが、日本に滞在中のニューヨークの男性の友人が「そんな事をしても無駄だよ」と冷笑したのだ。日本人に言われたのだったらよくある事とそう気にも留めずむしろ反撃したかもしれないが、何事に対しても他人のやる事

を否定せずむしろいくらか無謀、無駄と思われることでも「Go for it! やってっ観」などとサポートをしてくれるはずのニューヨークの、しかも友人である彼がそう言った事で（何だか妙な感じだ）と強い違和感が残った。そして、それが糸口となって日本のネガティブティに気付いたのだった。彼は日本に合気道を学びに二度めの来日をしていた白人男性で、「日本ではこういう時にはこう言うべきなんだろうな」「こういう時には日本人ならお金で解決するんだろうな」と日本的な価値観や風習を変な風に取り込み、ニューヨークで会った時とは別人になっていた。彼とも京都で大喧嘩をして会う事もなくなった。

私は日本の日常生活で、絶えずこのネガティブティ（それは女性差別とも通じるのだが）に晒されて生きていたのだ。ニューヨークのさり気ない日常からフェミニズムや個人主義、民主主義を感じ取ったように、私は日本で、ネガティブティの放射能を浴びて生きて来たのだ。自分に近い人の間に夢や希望をくじく人がいるのを私は何度も経験している。一〇年以上通ったバーのマスターもそうした一人だった。ハーレムの本を書きたいと思い始めた頃にその事をふと洩らすと、彼は言下にネガティブな言葉を投げつけたのだ。

「そんな所、日本人は興味がない、取材をしたって無駄。ハーレムについて書くには一〇年や二〇年は住んでいなければ無理」

その言葉に打ちひしがれてハーレム行きを止める気などさらさらなかったが、ああ、結局この人も私を否定する他の人間と何ら変わらなかったのだと一〇年目でようやく彼の本性を見た気がした。こんな時には少なくとも私は客なのだから嘘でも「頑張つてね」と励ますのが礼儀ではないか。無駄、無理、確かにそうかもしれない。いくつかの出版社も興味がないと断わつて来た。黒人でさえ「日本人は音楽やファッションには興味があっても黒人文化や歴史までは知ろうとしない」と言っていたのだから。「そんな所、日本人は興味がない」という彼は正しいかもしれない。私が時間とお金と愛情をかけて書いたこの本もたいして売れないかもしれない。たとえそうだとしても、私はこの本を書いた事は後悔していない。

私が手ひどい否定を経験したのは高校の時である。アドバイスが欲しくて将来の夢や希望をある成人の知人男性に語ったところ、役に立つアドバイスどころか「才能のない女は早く結婚しろ」という言葉を聞いて私は呆然とした。私は激しく泣き、彼の元を逃げるように立ち去って、以後その男性に心を開く事はなかった。身の回りには親切ごかしで夢を挫く人はたくさんいる。

優秀な生徒だったマルコムXは教師から将来何になりたいかと尋ねられて、弁護士か医者と答えた。すると、黒人らしい夢を見た方がいい、手先が器用だから大工になつてはどうかと勧めて

いる。ウエスト・バージニア州の田舎町に住むホーマー・ヒッカムの自伝「ロケット・ボーイズ」が原作の映画「遠い空の向こうに」では、やはり教師に「フォールス・ドリム（叶わぬ夢）」は見るなど論されて一旦は地元炭鉱の鉱夫になる少年が出てくる。彼はその後NASAの技術者になっている。どこの教育者が今日、優秀な生徒にそんなアドバイスを与えるだろう。彼らは自分自身が夢破れた人々であり、かつて持っていた夢を叶えそうな生徒を見ると嫉妬し、自分も夢などどつくに捨てている、女や黒人や貧しい者は夢は持つな、と言っているのも同じなのだ。

日本では「期待される日本女性像」を演じてはいるが、ある時自分のトルマー・カラーが出る。それは英語を話す時である。自分では気付かなかったが、外国人と英語で話している時、私が非常に楽しそうに見える友人に指摘されたのだ。なぜなのかと考えてみたら、まず、英語には女性言葉と男性言葉の厳然たる差がない。「私は」も「僕は」も「アイ」であり、「いやです」も「いやだ」も「ノー」である。「あっちに行つてよ」も「あっちに行け」、も「ゴー・アウェイ」であり、そこに男女差はない。英語とは何と民主的な言語だろうか。「ブル・シット」「フリー・ケアズ」「ビッグ・デイル」など日本には少ない本音表現や「シット」「ジーザス」「ファック・ユー」などの罵り言葉が多いのもストレス発散にはもって来いである。

ゴミのように扱われる理由などないし、どんな「エライ」人の前でも卑屈になる事もない。それを身を持って学習したはずなのに、日本で暮らすうちに忘れてしまいそうになる。実際に「エライ」男性と話した時に、へりくだり、愛想笑いをし、自信がなさそうに喋っている自分に気付いて我ながら驚いた。英語を話す時にはそんな態度ではかえって相手にされない。自信を持って自己表現する態度というものが、英語を喋る時に自然に戻ってくるのである。母国語を話す時には得られない充足感を英語を話している時に感じられるのは「こう振舞わなくてはいけない」という日本のスタンダードとは無縁だから。英語を話すとふわりと身が軽くなるような気分になるのは日本の因習から解き放たれて男性に媚びず、ジャッジされる恐れなく本音で語れるからなのだ。謙遜は美しい日本の伝統だが、不必要にへりくだったり媚びたりするのは自尊心を下げる事にも通じる。これは日本人女性にとつて非常に難しい問題だと思う。

無用なあつれきを避ける為に本音を隠し、媚びたりへつらったりして暮らしているうちに自分のプライドも自信も砕け散っていく。当たり障りのない世間話ばかりで本音を言わない事が大きなストレスになるとは新しい発見だった。お決まりの侮辱語、いつもの決め付け、卑下、それらが積み重なってゆううつな度合いが深くなっている。

そして私はニューヨークに「戻る」。

黒人のパワーを感じられるライブやコメディを見て涙が出るほど感動し、共感できる友人と本音で語り合い、なつかしい街を闊歩して帰国する頃にはうっとおしい気分はきれいさっぱり晴れて、リフレッシュし、自信に満ちあふれて帰って来れるのだ。つかの間の解放かもしれない、一時のペインキラーの役目しか果たさないのかもしれない。それでも私はニューヨークに戻らずにはいられないのだ。

最終章 私が黒人に惹かれた理由ゝ似たもの同士

私が八〇年代にやり残した「仕事」、それはなぜ私が黒人に惹かれたのかという疑問に答えを出す事である。

ニューヨーク時代に交際した男性の中にはヒッピーのようなドイツ系アメリカ人の白人もいれば、ユダヤ系の弁護士もいたし、ワスプのTVプロデューサーもいた。特定の人種にはこだわらなかったはずなのに、なぜ帰国してからは黒人以外とは付き合えないと思ひ込むほどの時期があったのか。黒人への関心の入り口は単純に音楽だったにしても、その後大学で黒人文学のゼミを取り、興味の範囲は彼らの歴史や文化にまで広がって行った。二〇〇六年のニューヨークへの旅ではいつもの行動範囲ではなく、勝手のわからないハーレムで多くの時間を費やしてその答えを探ろうとした。黒人のメッカとはどんなところなのか、本国の黒人達の素顔とはどういうものなのか、それを知る事が答に近づく第一歩だと思ったからだ。

グローバル時代の今日、結婚は日本人同士ですべきだ、などと閉鎖的な事を言う人はいないだろう。厚生労働省の人口動態統計を見ても外国人との婚姻数は増加傾向にあり、自分の好む相手がたまたま外国人だったというケースはそう珍しくなくなっている。ニューヨークで知りあった有名商社の創始者の孫である日本人男性の妻はアメリカ人で、「何故だか日本の女性には惹かれ

ない」と語っていた。また、韓国に住むユダヤ系アメリカ人は「どうしてもアメリカ人女性は恋愛の対象にならない、アジア人の女性に惹かれる」と告白し、ラテン系のアメリカ人男性に至っては「アメリカ女性のウエストからヒップにかけてのぼつてり箱型に膨らんだラインが好きではない」と自分の好みの体型まで把握していた。小説「飛ぶのが怖い」の主人公であるユダヤ系アメリカ人女性の好みは中国系の男性だった。ハーレムでは、「黒人男性とラティーノ（ラテン系）の女性のカップルはよく見るけど、その反対の組み合わせは見ないわねえ」と言う人もいた。「東洋系の女性と付き合うアメリカの男には情緒的な問題がある」と指摘するアメリカ人男性もいた。彼の妻は日本人だった。彼が言うには、日本人女性と交際するのはアメリカの女性を恐れているからだと言うのだ。そして従順な日本女性を知ればもうアメリカ人女性には戻れなくなると言う自説を展開していた。

交際相手にしろ結婚相手にしろ、自由に選ぶ権利があるのだからどんな人種を選んでもいいと思うのだが、自分の肌の色と異なる、又は自国の異性以外を選ぶ事に関して不思議がったり妙な罪悪感を感じる男性が多いのが印象に残っている。女性はその点、こだわりがないのか、そんな疑問や罪悪感を感じないようだ。少なくとも、日本で黒人のG Iと付き合っている日本女性達はどうだった。「好きなものは好き」「美味しいものは途中で止められない」とあっけらかんとして

いる。十人十色 (Different strokes for different folks) の例え通り、南米女性に惹かれる日本人もいたし、フィリピン女性と結婚してフィリピンに移住した知人もいる。いちいちなぜフィリピン女性が好きなのか、南米女性が好きなのか、とは私は尋ねない。それぞれの魅力は理解できるし、好きなものを説明する必要はないし、他人が誰かの好みを糾弾する必要も言われもないのだ。私も黒人男性と付き合っている時には何故なのか、という点までは考えず、他人にとやかく言われる筋合いもないと突っ張っていたのだが、多くの日本人男性編集者から「なぜ黒人と付き合うのか、どこがいいのか」と聞かれ続けた事で、それに対する答えを出そうと考えるようになった。彼らには私や「ぶら下がり族」と当時侮蔑的な呼び名を付けられていた日本女性の、黒人への傾倒の理由や黒人の魅力がわからないのだ。ところが黒人兵と交際している女性にはそんな疑問を抱く方の気持ちかわからない。好きだから好き。理由を考えるのなんてナンセンスなのだ。ホストにハマる女性がいれば韓国やフィリピンのホステスにハマる男性がいる。黒人兵にハマるのも同じなのだ。それをいちいち説明する必要はない。どうして彼らの魅力がわからないの、と惹かれる理由など深く考えてみる事はなかったのだ。当の黒人に聞いてみればニヤリと笑って『Bitten by the bug (取り付かれてる)』ぐらいにしか答えない。私にしてもなぜ同胞である日本人の男性ではなく黒人に惹かれるのか、編集者が納得する答は出なかった。自分なりに日本の男性はセクシーではない、女性を大切にしない、などと色々な理由を付けてはみたが、それが本質

的なものではないだろうとはわかっていた。そんな中で、ある女性が「本国で差別されているって聞いてかわいそう、と思ったから（付き合ってみる事にした）」と洩らしたのだ。これが案外、私の彼らへの、黒人文化への興味と親近感の本質かもしれないと思い始めた。彼らと私の間にある「差別」という共通点、つまりは似たもの同士だという皮膚感覚のようなもの、男性優位社会の拘束の中で暮らす日本の女と、白いアメリカの中で暮らす黒人とは差別というキーワードでつながっているのではないかと。

黒人と連れ立って歩いていると好奇の目を向ける日本の男性の目には「黒人がそんなにいいのか」という裏切り者を見据えるような暗い光と、「セックス好きなんだろう」という嘲りが浮かんでいた。彼らは「セックス・キング」と呼ばれる黒人とのセックスが目的なのだろうと思いついていたようだが、黒人がセックスキングであるという神話は世界中あまねく流布しているが、とんでもない。彼らのセックスは案外保守的で単純である。白人の方がよほどチャレンジ精神とセックスをエンジョイするテクニクに長けている。セックスで片付ければわかりやすくいいのだろうが、彼らと全身全霊で付き合った事のない人は何もわかっていないという苛立ちを覚えただものだった。

黒人を一般化したりステレオタイプで語る事はしたくないが、外見を見れば彼らの魅力の一端は明らかだ。アフリカの大地を踏みしめて狩りをしていた大きな足、走るのに適したサラブレッドのように細い足首、引き締まったウェスト、盛り上がった筋肉。西アフリカ出身のアメリカの黒人はスプリンターとしては理想的な筋肉を持っているという。彼らが身体的に優れているのは多くのスポーツで活躍しているのを見ても明らかである。また、彼らはアメリカで、借り物でない自分自身の歌と踊りの文化を作り上げた。夜の六本木のクラブで、見渡す限り日本の女と黒人だけの米軍基地の下士官クラブでも、自分達の歌に合わせて踊る彼らは「サタデーナイト・フィーバー」のジョン・トラボルタのように無敵である。踊りの上手さは水際立っているし独特なオシヤレのセンスもある。彼らは女性に好かれようとジムに通い、おしゃれをし、女性に気を使う。タバコを出せば火を付けて女王のように扱ってくれる彼らは、いつも日本の男達のタバコに火を付けている水商売のホステスの女性に取っては日本人男性とは別次元の存在である。レディ・ファーストが浸透しているアメリカの男性は女性の為にドアを開けてくれ、抑えてくれ、洋服を着せかけてくれる。日本から出た事がなく、レディ・ファーストに接した事のない女性がこんなに良く扱ってくれる男性はいなかったと有頂天になる女性も多い。私はしかしながら外見だけで彼らを選んだのではない。レディ・ファーストのせいでもない。ましてセックスではない。むしろ性格的に差があり過ぎ、肉体的には相性はあまり良くないと思うのだ。

ニューヨークで店を経営している間、不眠症とノイローゼになるほどのストレスを受けて、ほととアメリカ人には嫌気が差していた私は帰国当時、日本人男性を交際相手に想定していた。が、会社勤めをしている訳でなく、友人の輪がある訳でもなく、日本人と知り合うチャンスがない。西麻布に住んでいたので近くの六本木のバーなどにも出かけてみたが、ニューヨークならすぐに隣同士で会話が弾んで楽しく時間が過ごせるのに、日本人からは話しかけられる事がまずない。日本人はそこにあるチャンスをつかむのが下手だし、そもそも異性とのコンパニオンシップをアメリカ人ほど強く求めないのだ。気さくにデートを申し込むアメリカ人と異なり、日本人はフランクさに欠け、チャレンジもしない。やがて私は日本人と知り合う事を諦めてアメリカ人の集まるバーやパブに足を向けるようになった。日本人はチャンスをくれないし、チャンスをつかもうともしない。それが、私が日本人を選ばなかった、選ばなかった理由のひとつである。

アメリカ人は一般に明るくて楽しく付き合いやすい。アメリカでドッグ・セラピーに携わっている人はアメリカは犬まで明るい、と興味深い事を言う。アメリカ人は理不尽に怒鳴らず、きちんと話し合うからだろう。人があるがままに受け入れ、ポジティブで、人をジャッジしたり、陰険に根に持ったりという事があまりないアメリカ人像は白人にしても黒人にしても同じなのだ

が、どうして白人を選ばなかったのかという理由はニューヨーク時代の経験にある。

私が白人を選ばなかったのは自分が有色人種という差別される側に立つ人間であり、差別する側の彼らとは相容れない部分が大きかったのだと思う。大袈裟で深刻なものではないにしてもニューヨークで白人至上主義（ホワイต์・シュープリマシー）、つまり白人が一番文明的で優れているという考えに晒されたせいで、白人と対峙した時に（この人は自分が一番優れていると思っているのだろうか）（人種差別をする人なのだろうか）という問いがつい心に浮かび、彼らの言動や態度を探るようになっていた。いくら白人に平等に扱われているように見えても、よく注意してみれば白人至上の考えはチラチラと見え隠れする。白人至上主義とは自由で平等な交流を妨げる目に見えないバリアの名前なのだった。

私は差別に関しては比較的敏感な方だった。それは母譲りではないかと思う。彼女は母親と三歳の時に死別していて、親戚の間をたらい回しにされるうちに差別を知ったのだと思う。彼女は色黒で、色の白いは七難隠すという、色白が美人の最大条件だった時代に散々からかわれて非常に大きなトラウマとなって今でも消えずに残っている。後にニューヨークを訪れた時に、自分よりも色の濃い黒人達が肌色を気にする事なく生きているのを見て少しその劣等感が薄れたようだ。

私は母の色が黒いと気にした事はもちろんなく、肌の色が蔑みの対象になる事など全く理解できない。そんな母が、私が西麻布に住んでいる時に訪れて、マンションの向かいにあった手作りのしゃれたアイスクリーム屋に寄って帰って来た。何か言いたそうな顔をしているのでどうしたのか、と聞くと、店の女主人が、このアイスクリームはあなたのような者が食べるものじゃない、と言わんばかりの態度だったと言うのだ。まさか、甘い物をあまり食べない私はその店で二、三度しかアイスクリームを買った事がなかったが、そんなに感じの悪い店でもなかった。が、その時の事は多分、母の直感^(直感)が正しかったのだらうと思う。

ニューヨークに住んでいると、中国人や韓国人などのアジア人という時には感じない緊張感や疎外感を、「ト真ん中」の白人からは度々感じる事がある。自分が差別される対象だと知るようになったのは黒人でもラテン系でもなく、白人を通じてである。差別^(註3)の顔というのは時に友人の顔をしているものだ。

白人の知識層の中には、かすかな偏見や差別をフレンドリーな会話にまぶしてそれとわからないように自我やプライドに差別の矢をしかけてくる非常にたちの悪い人がいた。わざと回りくどい、わかりにくい表現を使ったり、難しい単語を使ったりして私が理解できるかどうか試す者も

いた。悪意のあるからかいであり、時には（お前はバカだ）という暗号だったりする。すぐに気付く事もあれば、その場ではわからず、後で（ああ、あれはテストだったのだ）と急に腑に落ちたりする。そんな時には心の中に鉛を流されたような、何とも言えずイヤな感覚に襲われる。差別とははらつてもはらつてもしつこくまとわり付いてくるハエのようなものである。

やがて私と東京の蜜月時代は過ぎ、四年間慣れ親しんだアメリカ文化の香りを求めて、福生市という、米軍基地のある街に引越す事になる。狭い都心のマンションと窮屈で生きにくい日本の風習から遠く離れ、ハウスという、戦後アメリカ兵の為に建てられた広い一軒家に暮し、アメリカのGIと交遊し、米軍施設に入りびたつて暮した。「日本の中のアメリカ」から私は一〇年以上も離れられなかった。

本音で語れば疎まれるような日本の環境の中では言論の自由がないに等しかった。「あなたの正直さを尊敬します（I admire your honesty）」などという表現も考え方も日本にはなかった。周りの人のあつれきと生きにくさを少しでも減らす為になるべく本音も意見も言わず、他人とぶつからないよう対決せずに生きるようになっていったが、内心ではどこかに本音を言っても受け入れてくれる人がいないものかと探していた。社交辞令などとは縁のない人、時には皮肉や悪口もぶ

つけ合える人。私をゴミくずのように扱わない人、裏で私をバカにしているのではないかと勘ぐったり、陰險な心理的駆け引きせずに話すことが出来る人。

それが黒人だった。

アメリカには残念ながらもまだに黒人差別があり、「白人は黒人を憎んでいる」とまで言う人がいる。アジア人に対する差別もあるのだが、黒人に限っては差別される懸念など全くなかった。彼らは私を絶対に差別しない。それが心で感じられる。同じ有色人種同士で、日本人には親近感を抱きこそすれ、差別したり、軽視する事はない。彼らといてなぜ心地よいのかという理由を私はあまり考えてみなかったが、それは差別されないという確信から来る安心感だったのだ。

黒人で、白人のような手の込んだ差別をする者などいない。黒人は本音の人々であり、見え透いたおべんちゃんも建前も言わない。お世辞を言ったとしてもそこに悪意はない。感じの悪い人もいるけれど、もって回った言い方で他人をバカにしたり、茶化したりはしない。同じマイノリティである私と一緒に、エスタブリッシュメントの中核にいない気安さがあり、気取る必要もない。白人にはない正直さ、おおらかさがあり、非常に暖かい態度で接してくれる。苦しい人生を送っ

ているからこそ楽しむ時は徹底的に楽しむ。心づけを五ドルでも一〇ドルでも手渡せば喜んでいろいろ便宜を計ってくれる。何度彼らに窮地を救われたかわからない。

単に好きだから、好みだからと片付けている場合でも、実は自分が選ぶパートナーは自らを照らす鏡であり、両者の関係には共通点がある。価値観や境遇の似通った自国の異性を選べば楽なのに、どうしても他人種に惹かれるという理由を突き詰めて行くと、自分という人間の素顔が見えてくる。黒人には人種差別が、日本女性には女性差別の長い歴史がある。差別された事のない白人は差別される者の気持ちがなかなか実感できない。

日本女性は男性優位社会の中で生き生きと暮らしているとは言えない。女性差別の実態を訴えてみても白人男性や日本の男性からは「わからないなあ」「そんなものかなあ」「考えすぎだよ」とはかばかしくない返事が返って来る。が、これが黒人だとツーンと言えばカーで、すぐに通じ合えるのである。友人の黒人女性が何度も何度も私に聞かせてくれた話がある。彼女はMBAを持つ優秀な女性なのだが、勤めていた会社の企画会議で提案をしたところ、無視されたという。三〇分ほど経って今度は白人男性が同じ事を提案したら全会一致で取り上げられたというのだ。彼女の悔しさはよくわかる。私も似たような経験を過去に何度もしているからである。黒人は、「星

の王子様、ニューヨークに行く／「Coming to America」のような黒人^(註4)キャストによる映画を白人が見てもあまり理解できないだろうとまで言う。

実際にブルーカラーの街ハーレムを訪れ、貧しかった私と同じような生活レベルの彼らとは似たもの同士だと思うようになった。そして黒人の差別の歴史を知れば知るほど、奴隷としての過酷な歴史を生きのびて、一八〇八年の奴隷解放後も常に地位向上の為に戦いを忘れず、アメリカに根を張って生きている彼らのバイタリティと情熱、マネではない独自のスタイルを確立した彼らが羨ましくも眩しく感じられる。そして何より、彼らの熱いソウルに魅せられるのだ。

シヨーンバーグという素晴らしい黒人の歴史の研究施設で貴重な書物を読み進めるにつれ、差別は人種差別、年齢差別、性差別など色々な形を取るが、元は一つだと信じるようになった。差別はすべて無知と恐れと邪悪さから生じるのだ。黒人差別と女性差別の共通点が多い事にも改めて気付かされた。黒人史のエピソードのほんの一部に触れただけでも（これは私の事ではないか！）と思った事が再三あった。黒人を知る事は自分を知る事に他ならなかった。

私が黒人に惹かれた一番の理由、それは、ズバリ、差別という共通体験だったのだ。

(註1) 日本の男性と交際するのに障害となるのもやはり差別である。(この人は女性差別や年齢差別をす

る人だろうか)(束縛する人だろうか)(女性を性的対象物とみなし、望まないセックスを強要したり、暴力を振るったりするだろうか)とハリネズミのようにハリのアンテナを四方に張り巡らしている。恋愛という一応対等な男女関係ではなく、ピアノバーという、客とホステス、主と従、エリートとサービス業という、対等ではない関係を長く経験した事も悪影響をもたらしたのだと思う。

外務省の要職にある六〇代の男性が客として来た時には外国人ホステスをグッと強引に引き寄せて無理やりキスを迫った。彼女はいやがって抵抗し彼の手から逃れようとして床に崩れ落ちてしまった。彼の部下が同席していたが困った表情を浮かべるだけで救いの手は差し伸べなかった。こういうセクハラ行為は夜の水商売の世界では日常茶飯である。

(註2) ウーピー・ゴールドバーグが、自分の母親の体験をCNNテレビで披露していた。しゃれた洋服屋

に入ったところ、店員が「ここにはあなたに買える洋服はない」といったような事を言ったというのだ。ウーピーが入って行くとその店員の態度が豹変したのだが、母親は「そうですね、あなたは正しいわ。私に買えるような洋服はここにはないわ」と皮肉を言い残してその店を出たという。

(註3) タブロイド紙のコピーエディターを数年来友人だと思っていたが、私の英語力をほめちぎったかと

思うと、アクセントがきつい、もつと君が英語が上手かったらいいのに、と全く反対の事を言い出す。普通、日常会話に不自由のないレベルの英語を話す外国人に対してはお世辞でも「英語が上手いですね」と言うのが礼儀である。英語力をテストしたり、英語がもつと上手かったらなどとは決して言わない。文法や単語を間違つても訂正しない。不躰だとされているからだ。女性差別者、人種差別者と思われぬよう、ポリテイカリー・コレクトに英語が上手いなどと心にもないお世辞を言うものだからポロリと本音が出てしまうのだ。私には流暢な日本語を話すミャンマーの男性がいる。あまりに上手いので彼がミャンマー人である事をうっかり忘れるほどである。彼に対して私はわざと難しい言葉を使ったり日本語の能力を試してみたりするだろうか、いや、絶対にしない。

私を信用しないのも腹だたしかった。彼はNBAのファンなので、二〇〇四年の暮れに会った時には田臥勇太の話をした。この年フェニックス・サンズと契約が成立した日本人初のNBAプレイヤーである。日本では大きな話題になっていたが、アメリカでは全くといっていいほど知られていなかった。日本人がNBAでプレイするなど信じられない(信じたくない)ようで、NBAだね? 日本人だね? 名前は? と何度も何度も念を押す。うんざりして、そんなに信じられないなら信じなくてもいいと怒鳴りそうになったほどだった。インターネットで調べてTABUSEという名前を見つけ、信じない訳にはいかなかったが、それでもまだ信じられないという表情で、すごい

ね、とか信用しなくてごめんね、という言葉は一切なかった。日本を「ストレンジな国」、私はストレンジな国から来たツーリスト、と彼は言った。日本などという小国は彼ら世界ナンバーワンの国からすればそんな程度の認識しかないのだ。

(註4)

確かに黒人映画の中に埋め込まれた差別の歴史のキーワードなどは白人や日本人には理解できない事が多い。「アモス&アンディ」という優れたコメディ映画には、黒人のサミュエル・L・ジャクソンが白人のニコラス・ケイジに「アモス（英語ではエイモス）とアンディ、と続けて言わないでくれ」というセリフがある。かつてエイモスとアンディというちよつとおバカな黒人が登場するコメディ映画があり、サミュエル演ずるピュリッツァー賞受賞の作家は彼らと一緒ににはされたくないのだ。これも他人種が知らない確率の高いエピソードである。日本国内でも女性への手の込んだ差別や嘲りは日常茶飯である。大手就職雑誌の編集長を紹介されて仕事もらえるかと銀座くらんだりまで会いに行った。話し合いは終始和やかだった。その中でその四〇代後半の日本人男性は「どうしたら英語が上手くなりますか、なかなか上手くならなくて」と私が持参して差し出した英会話の著書を見て聞いて来た。私はそれに真面目に答えた。帰宅して、彼を紹介してくれた男性にその事を報告すると、「彼はアメリカの大学を卒業してアメリカ人の部下を使ってバリバリ仕事をしている人だよ」と呆れたように言うのを聞いてからかわれたのだとわかった。「日本人の謙遜と

いうものだよ」と彼はトンチンカンな事を言う。二人とも同じ穴のムジナだったのだ。この紹介者は私が長年友人と信じて来た男性だったが、後に決別する事になった。彼の本性を知るのに三〇年もかかってしまった事になる。

エピローグ―ハーレムで知った「ソウル」

「アンダーカバー・ブラザー」というハチャメチャな映画がある。黒人と白人のステレオタイプとデフォルメで両者の文化を徹底的に茶化している。コメディ映画ではありながら黒人と白人の「比較文化論」として見る事もできる。その中で、大きなアフロヘアーに七〇年代ピンプ（娼婦のヒモ）・ファッションのようなスタイルをした主人公が「ブラザーフッド」という秘密組織の入り口で「黒人^{（註）}度数（blackness）」を試されるシーンがある。ダップ（dap）という、こぶしを合わせる黒人独特の握手にパスした際に「ソウルあり！（You got soul）」という託宣が流れて入り口が開く。

ソウルという言葉はわかるようでわかりづらい。

この言葉は、一九六〇年代のR & B（リズム・アンド・ブルース）から発展したソウル・ミュージックで知った。辞書には「魂、精神、情熱」などとあり、ソウル（魂）、スピリット（霊、魂）、ハート（心）はどう違うのだろうという疑問を持ったまま長い時間が過ぎた。

ソウルを最近辞書で引き直してみると、(肉体と対比される)魂、能力の源と考えられる無形の实体、霊魂、心の奥にある感情、(芸術家や作品の)精神の深み、繊細な感受性などと長々しい説明が続く中に、黒人のソウル、黒人の言語、文化、宗教などの本質とあり、私が考えるソウルがこれに当てはまる。ここでいう黒人とはアメリカの黒人に限るとはつきり書いている辞書もある。

実はアメリカでも宗教的、哲学的な定義以外のソウルのはつきりした定義はないらしく、二〇〇七年にCNNの看板番組である「ラリー・キング・ライブ」に出演した「アメリカン・アイドル」シーズン5の勝者で白人であるテイラー・ヒックスは、「ソウルとは何か」とラリーに質問されて、それはフィーリングであり、楽しい、悲しい、すべての形容詞を表し、「心の中にあるもの (It's in your heart)」と答えている。一方、シーズン3の優勝者、黒人のファンテージャはアレサ・フランクリンのコンサートで感じるもの、外に向かつて表現するもの、と答えるに留まっている。

黒人のファンテージャは生まれながらにソウルを持ち、ソウルが何か、などと改まって考えた事はないのではないだろうか、それに対して白人のテイラー・ヒックスはソウルを目指し、ソウ

ルを後天的に学習しなければいけなかったのだと思う。何しろソウルはアメリカの黒人に独特の感性なのだから。

ソウルは、音楽を例に取るとわかりやすい。ソウルフルな歌手と単に上手く歌うだけの歌手ではその差は歴然としているからだ。ソウルは本来学習によって獲得するものではなく、「持ち合わせているかないか (Either you got it, or you don't)」それに尽きると言っている。

「ドリームガールズ」は八〇年代のブロードウェイミュージカルを映画化したもので、モータウンの創始者ベリー・ゴードイと六〇年代の人気グループ、シユープリームズをモデルにしている。当時モータウンにはリードボーカルのダイアナ・ロスよりも才能のあったマーサ・リーブズ、グラディス・ナイトなどがいたのにも拘わらずこのグループが大ブレイクしたのはダイアナの容姿もさる事ながら、重く、時に野暮ったいソウルは白人受けしないので、黒っぽさを抑えて軽くポップに仕上げて白人層へクロスオーバーしたからヒットしたのだ。この中で、エディ・マーフィー演じる歌手、ジミー・アーリーが新しいサウンドを模索中に、“Got to have soul” (ソウルがなくちゃ!) と叫ぶ。彼はソウル・ミュージックを歌いかけたのに、ジェイミー・フォックス演じるレコード会社の社長に許可されず、失意のうちに他界する。

私はモーターウンの大ヒット曲をリアルタイムで何曲か知っているが、軽いノリのシュープリームズには全く惹かれなかった。ソウルフルなアレサ・フランクリンが好みで赤い渦巻きマークのアトランティック・レーベルの「チェーン・オブ・フルズ」のドーナツ盤には何度も聴き入った。元々はアメリカン・ポップス好きな子供だったのだが、徐徐にソウルフルな歌に好みが移行して、大学時代にはバンド活動をしてR & Bやソウルミュージックのナンバーを好んで演奏していた。仲間うちでは「黒っぽい」曲と呼んでいた。黒っぽいのはソウルのある歌という意味で、後年ディスコでレコードを回すDJのバイトをした時には私の選ぶ曲はいつも「黒っぽすぎて（日本人には）ノレない」と経営者に文句を付けられ渋々ポップな流行曲をかけたものだった。（黒っぽいからダメとはどういう事なのか、曲にはいい曲と悪い曲があるだけではないか）と内心で反論していた。

ポップ対ソウルという図式は当時からあったそうで、それがすべて悪いとは言わないが、売らんかなの一心で、映画の中でジェニファア・ハドソンがソウルフルに歌い上げる「ワン・ナイト・オンリー」までもポップにキャッチーに換骨奪胎した、到底同じ曲とは思えないビヨンセの歌を聞いて「（ソウルのない）リズムだけの曲」と作曲者が苦々しく言い放つ場面がある。クロスオー

バーとは商業的に妥協し、黒人の魂を消し去る事なのだ。

反対にソウル・ミュージックはアメリカの黒人が、奴隸制という過酷な人生を強いられた先祖から受け継いだ痛みや苦悩や怒りを内に秘め、全身全霊で歌いあげる叫びであり、ブルースは嘆きであり、ゴスペルは鎮魂である。歌い、踊る事が単なるお遊びや趣味ではなく、奴隸としての日々の苦悩を和らげたのであり、生きのびる為に必要だったのだ。現代の明るく楽しい黒人音楽の中にも一抹の哀感が漂うのは彼らの中に脈々と流れる負の歴史と遺産が昇華されてソウルが宿っているからだ。

ソウルのDNAを受け継いで現代を生きる黒人達の人生や口調、表情、そして態度に明るさと暗さが交錯するさまは、あたかも強く明るい光と真つ黒な陰を合わせ持つ夏の日の木漏れ日が彼らにちらちらと射すのを見るようだ。日本人の私は彼らのソウルは持てないが、彼らのソウルに触れ、感じ、共感し感動する事はできる。彼らが受け継いだ悲しみや苦痛や苦悩の大きさには比べべくもないが、黒人のソウルは私の中にもあるそれらの感情を代弁してくれるからだ。長い間、ソウルがどういふものかを深く考える事もなかったし、私がどうして黒人やR&B、ソウル、ジャズ、ブラック・コンテンポラリーなどの黒人音楽に惹かれるのかはつきりと理解する事ができな

かったが、二〇〇六年にハーレムを探訪し、ハーレマイト（ハーレムの住民）と話し、笑い、一緒に行動しているうちに、自分なりにうつすらとソウルとはこういうものであると実感できるようになった。

それは先祖から受け継いだ彼ら特有の痛みであり、暖かみ、情熱であり、そこから発せられる深い情感、哀感といったものである。ソウルが醸成されるに至った過程の悲話や感動話、自由を勝ち取る為に戦ってきて今なお現在形で続いている彼らの激動の歴史は私を触発して止まない。そして、過酷な歴史を生きのびてアメリカに太い根を張って生きている黒人のバイタリティと情熱、そして何より、彼らの熱いソウルに魅せられる。

今年の八月にはまたハーレムの通りを闊歩し、知り合いに再会できる。ノー・ハート、ノー・ソール、ノー・パッション（ハートもなく、ソウルもなく、情熱もない）、そんな人生は送りたいくない。

最後に、本書が出版されるに当たって、家族と、いつも気にかけてくださっているかんぽう出版の桐生敏明氏、個人的に資金援助をしてくださった佐々木力氏、堤則考氏、熱海市のシマムラ・キークックさんに感謝の意を表したい。

(註1) この映画の中では「ブラックネス」が服装、歩き方、喋り方、喋る内容など随所で強調されている。エディ・マーフィーがスタンダップのネタで黒人の歩き方を披露しており、四肢のあまり長くない彼ではあるが、一歩ごとに半拍置くような歩き方は、ゲットーに育った友人によると(俺はタフだ、かもうなんて考えるんじゃない)という意志の表現法だという。時に豹を思わせるような彼らの動きはボクシングのスウエイやダッキングを見るようだ。

(註2) たまたまダイアナ・ロス(アメリカン・アイドル出演)とアレサ・フランクリン(マーサ・スチュアート・リビング出演)の歌を聴くチャンスがあったが、この二人の差は明らかである。片やコマースライズされたポップ路線、片やソウルミュージック一直線。どちらが心に響くかは言うまでもない。時代は下り、モータウン・サウンドは消えたが、ソウルはメアリー・J・ブライジや、ローリン・ヒルらの他、多くのすぐれた歌手によって受け継がれている。

「ドリームガールズ」について一言付け加えれば、ブロードウェイでエフィ役を演じたのはジェニファー・ホリデイで、ジェニファー・ハドソンも歌った「And I'm Telling You I'm Not Going」は彼女の一九八二年のヒット曲である。同じジェニファーでも、歌唱力も表現力もホリデイの方が勝っていて一聴の価値がある。「ドリームガールズ」のブロードウェイ・キャストによるアルバムは

DECCA から発売されている。

《著者略歴》

工藤明子（くどうあきこ）

岩手県出身。

東北学院大学英文学科卒業後渡米。

ニューヨークで様々な職業を経て古着屋開業。

帰国後、フリーライターとして活躍。

著書に「心が通う英会話」（丸善出版）、

「18 パターンの英会話」、「さよならツインタワー／ニューヨーク古着屋物語」（かんぼう）がある。

ソウルフル！－A 列車に乗ってハーレムに行こう－

2008 年 8 月 11 日 初版 第 1 刷 発行

著 者 —— 工藤明子

装 幀 —— 仁井谷伴子

発 行 —— 株式会社 **かんぼうサービス**

発売元 —— 株式会社 **かんぼう**

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号（〒550-0002）

電話 (06)6443-2171 FAX (06)6443-2175

印刷／製本……モリモト印刷株式会社

© Akiko Kudo, Printed in Japan 2008

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。